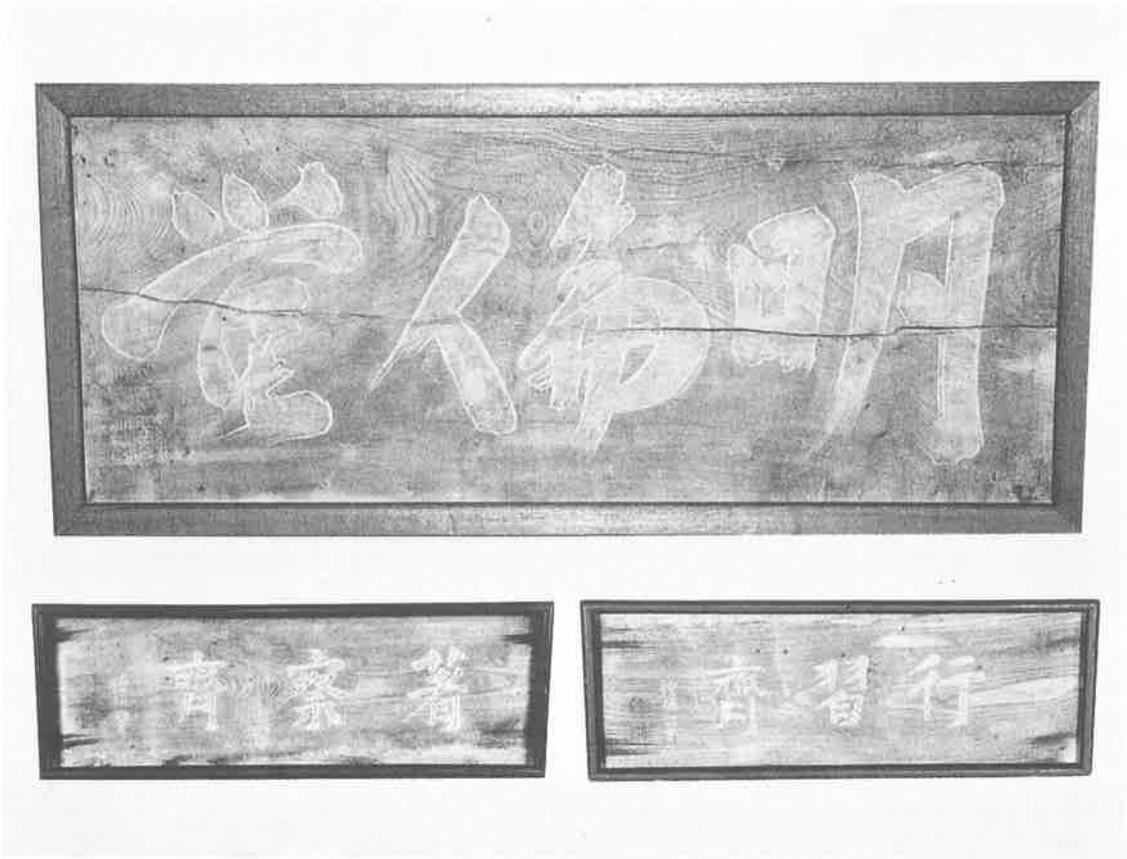
高鍋町の文化財 第八集

高鍋の先賢



高鍋町教育委員会

はじめに

「高鍋の先賢」は高鍋町文化財シリーズ第八集として文化財保存調査委員会に、その編さんを委嘱されたものである。

藩政時代以来今日まで多くの人材を輩出した高鍋は文教の町といわれ、日本の政治・経済・文化・産業などの分野に高鍋出身の人びとが活躍しその名を残した。

高鍋藩の藩主や要人たち、明治維新の尽忠の士など高鍋関係の人々は高鍋町史やその他の資料に紹介されているが、このたびはこれらの人物に加えて、昭和期まで郷土の栄誉と発展に貢献した人びともいれて「先賢」と呼び編さんすることにした。

資料収集に際して関係ある家庭を訪問したり、調査用紙に記入を依頼するなど多大なる迷惑をかけたが、総てに協力していただいたことに対して深甚の謝意を表す。

平成四年三月

高鍋町文化財保存調査委員会

表紙説明

高鍋藩第七代藩主種茂は「人材の養成」は学問に有りと考え、安永七年（一七七八）藩校明倫堂を創設し、子弟教育の第一歩を大きく踏みだす。この時種茂は三十六歳の働き盛りであった。

明倫堂には行習斎（小学）と著察斎（大学）があり、行習斎には八歳ごろから入学し、四書五経の素読、習字、数学、などを授けられた。小学を終わって著察斎に進むのであるから著察斎に入学するのは十五歳ごろになる。ここでは自由教育の形式をとり相互会読、質疑等を行なった。「文教の町高鍋」は明倫堂の教育が根幹をなすものであって、それより以後高鍋から多くの「先賢」たちを輩出した。

執筆の経過

一、文化財シリーズ第八集の題名について

第八集は初め「高鍋の先哲」として資料収集や調査を行ってきたが「先哲」は高度に卓越した人物を象徴するので、きわめて対象人物が限定される。

このたびの対象人物は昭和期まで活躍した人物も対象とし、活動分野についても、さらに視野を拡げたので「高鍋の先哲」ではなく、「高鍋の先賢」とした。

二、対象人物の選定について

基本的には高鍋藩歴代藩主と高鍋町史第八編人物略伝作成の際に設けられた選定条件を踏襲した。即ち

㈠ 明倫堂の教育を初め、教育に顕著な功労のあった人物。

㈡ 産業経済上功労顕著な人物。

㈢ 国家社会に対し功労顕著な人物。

㈣ 文化・福祉その他諸般の公益に功労顕著な人物。

の四項目に該当する人物で故人を対象として選定したが、対象年代を昭和期まで拡げたので人数も増加し、高鍋町史人物略伝掲載の六十八名に五十九名を加え総数一二七名となった。

三、活動分野の表示について

㈠ 対象人物が活躍し功労をあげた分野を氏名の左側に記して分かりやすくした。

㈡ 分野の区分は次のように定めた。

藩主・政界・財界・教育・医学・産業・社会・福祉・軍人・芸術・マスコミ・スポーツ及び維新の功労の十三分野とした。しかし、活動分野が複数の場合は主要な分野とした。

㈢ 掲載順位は、藩主に続いてアイウエオの順とした。その他小中高生にも読みやすいように「ふりがな」をつけた。

目次

はじめに

執筆の経過

高鍋の先賢

1 秋月種長 初代藩主……1
2 秋月種春 二代藩主……1
3 秋月種信 三代藩主……1
4 秋月種政 四代藩主……2
5 秋月種弘 五代藩主……2
6 秋月種美 六代藩主……3
7 秋月種茂 七代藩主……3
8 秋月種徳 八代藩主……4
9 秋月種任 九代藩主……5
10 秋月種殷 十代藩主……5
11 秋月種樹 政界……6
12 秋月種繁 政界……7
13 秋月種英 政界……7
14 秋月可芸 術……8
15 秋月小牧 政界……9
16 秋月左都夫 政界……10
17 秋月種事 分知領主……10
18 秋月種苞 教育……11
19 秋月種節 維新功労……12
20 綾部融 教育……13
21 綾部千平 医学……14
22 荒川環 医学……14
23 荒川リク 産業……15
24 荒瀬カツ 教育……15
25 石井十次 福祉……16
26 石井品子 福祉……17
27 石井辰子 福祉……19
28 石崎義夫 産業……19
29 岩岡保吉 社会……20
30 岩村兼善 政界……21
31 岩村真鉄 教育……21
32 上杉鷹山 米沢藩主……23
33 大塚氏慎 教育……24
34 大塚静氏 教育……25
35 大寺與惣右衛門 社会……26
36 荻原恕平 財界……26
37 荻原百々平 医学……27
38 小沢治三郎 軍人……28

39 押川定秋 政界……29
40 押川如水 芸術……30
41 押川柳水 芸術……31
42 小田知之 教育……31
43 柿原政一郎 政界……32
44 勝浦鞆雄 教育……33
45 加藤二郎 芸術……34
46 金堀伸夫 芸術……35
47 萱嶋景矯 教育……35
48 萱嶋高 軍人……36
49 木代重行 福祉……37
50 清原真弓 政界……38
51 久保昌業 政界……39
52 黒木藤三 医学……39
53 黒水長慥 政界……40
54 黒水長平 産業……42
55 甲佐知定 スポーツ……43
56 神代勝文 政界……44
57 河内山清八 産業……44
58 税田牧之烝 産業……45
59 財津吉恵 教育……45
60 財津吉一 教育……46
61 斎藤角太郎 教育……47
62 坂田稲太郎 産業……48
63 坂田勝郎 マスコミ……50
64 坂田莠 政界……50
65 坂田春男 医学……52
66 坂田諸安 教育……53
67 佐久間頼母 産業……54
68 柴垣前定 政界……55
69 柴垣清郎 財界……55
70 城勇雄 教育……56
71 城重雄 政界……57
72 鈴木定直 政界……58
73 鈴木馬左也 財界……59
74 鈴木憇太郎 政界……60
75 鈴木来助 維新功労……60
76 千石興太郎 政界……61
77 千手興欽 教育……62
78 千手景興 教育……63
79 高橋正照 政界……63
80 竹原祐吉 産業……64
81 立川伊三郎 教育……65
82 田村克明 教育……66
83 田村克成 教育……66
84 田村正明 教育……67

85 田村増吉 維新功労……67
86 田村義勝 教育……68
87 堤長発 財界……69
88 津野常 政界……70
89 内藤元吉 教育……70
90 内藤有恒 教育……71
91 長友勘右衛門 産業……71
92 名和大年 教育……72
93 則松クラ 産業……73
94 原坦 政界……74
95 泥谷良次郎 教育……75
96 日高明実 教育……76
97 日高蔦子 教育……77
98 日高誠実 教育……78
99 一木儀一 軍人……79
100 平島敏夫 政界……80
101 平原美夫 スポーツ……81
102 平林忠恕 政界……82
103 深見和彦 政界……83
104 福崎良一 維新功労……84
105 武藤東四郎 政界……85
106 本多慶次郎 芸術……86
107 本田親 産業……87
108 三沢立身 産業……87
109 三沢糾 教育……88
110 水筑弦太郎 勤王志士……89
111 水町元 軍人……89
112 三好善太夫 教育……90
113 三好退蔵 政界……91
114 森宣著 教育……93
115 安田尚義 教育……93
116 安田李仲 芸術……95
117 山内仙介 教育……96
118 山内貞昌 教育……96
119 山田容庵 医学……97
120 山名勝重 医学……97
121 横尾敬 教育……98
122 横尾栗 教育……99
123 横山政幸 政界……100
124 横山清松 財界……101
125 吉田貞吉 財界……101
126 吉水輝文 政界……102
127 吉本盛光 政界……103
編集後記……105

高鍋の先賢

① 秋月種長

一五六七（永禄10年）生
一六一四（慶長19年）没

初代藩主（長門守）

秋月氏第三十八代種実の嫡男として筑前（福岡県）に生まれ、高鍋藩初代藩主となる。幼名を三郎。

戦国末期に父種実と共に筑前にて活躍したが、天正十四年豊臣秀吉に抗して敗れ日向国に移封となり財部（高鍋）、諸県、福島（串間）などを与えられる。

文禄元年には朝鮮の役に出陣・七年間滞在し慶長三年帰国。その後二年目の慶長五年には島津領都城の庄内の乱に家康の出陣状を受け出兵、その年の関ヶ原の戦いには石田三成の西軍に応じたが後東軍に転じて所領を安堵された。

慶長十二年財部城（高鍋城）の修築に着手、また、野首掘り切り工事も行い、詰の丸へ三層の櫓を建てる。

種長には嗣子なく豊前（福岡県）馬ヶ岳城主長野三郎左衛門嫡子采女（うねめ）を種長の娘ヲチョウ姫の婿養子とする。慶長十五年種春生まれる。種長は、十八年、四歳になる種春を伴い参勤、年内に家康と将軍秀忠に種春の面謁をすませた。十九年種長は江戸にて死去。時に四十八歳。法号龍雲寺殿雄山俊英大居士。吉祥寺に葬る。高鍋龍雲寺は種長が生前自分の菩提寺として建立しておいたものである。

② 秋月種春

一六一〇（慶長15年）生
一六五九（万治2年）没

第二代藩主（長門守）

慶長十五年采女改め種貞の嫡男として生まれる。幼名を種孝と言った。十九年種長死去により家督を継ぐが幼年の藩主は成人まで藩地に就くことは許されない。十二年間足止めされ寛永元年八月初入封。

種春の一生はお家騒動（上方下方騒動）の渦中にあったがそれに加えて、大阪冬の陣、寛永九年肥後（熊本県）の加藤忠広改易につき出陣、同十四年島原の乱に出兵と内外ともに繁忙の連続であった。

種春は性格の弱い一面もあったが、幼少にして相続したため治世は長く四十七年にも及んだ。万治二年十月病気のため江戸藩邸に没す。五十歳。下谷の広徳寺に葬る。法名大洋院殿古巌宗帆大居士。翌年種信は父追善のため高鍋に大竜寺を建立し、ここに遺髪を埋葬し碑をたてた。

③ 秋月種信

一六三一（寛永8年）生
一六九九（元禄12年）没

第三代藩主（佐渡守・長門守）

第二代藩主種春の嫡男として寛永八年十二月十四日生まれる。幼名黒法師。十七歳にて結婚し、夫人は肥前（長崎

県）平戸松浦家の息女であった。万治二年二十八歳にて家督を継ぎ、翌三年藩主として初めて入封。

英明な種信は綱紀粛正を図り藩主政権を確立する。寛文元年から領内検地を行い、地方支配を強化し藩政機構の整備や藩法の制定を手がける。高鍋城を修築整備し、奥御殿をつくり二の丸より移転して一層の藩政強化を図る。「財部」を「高鍋」と改称し、人材の登用を行い藩外から手塚、門田（三好）、田村氏などを召し抱える。

終生能楽を好み、多くの能楽師をむかえる。元禄二年に隠居し、七年幕府に在所住居を願い出て許され萩原に住んだ。隠居後も次代種政を後見し重要な役割を果たした。萩原にて病没。六十九歳。法号天沢院殿龍嶽宗雲大居士。龍雲寺に葬られる。

④ 秋月種政　一六五八（万治1年）生

第四代藩主（山城守・長門守）一七一六（享保1年）没

第三代藩主種信の二男として生まれる。種信の長男種恒が二十二歳を以て藩邸で没したため、元禄二年二月家督を継ぎ、二万七千石を領し木脇三千石は弟種封に分地した。

元禄十年に勅使中御門大納言の接待役を無事果たした。

この時代に入ると建設の機運が高まり諸種の施設が進んだ。はじめの十年間は種信の後見もあったが高鍋藩の法令制度を確立し、藩政機構、地方支配機構を完成させた。また有能の人材を登用した。藩外からは軍学師として佐久間頼母、儒者内藤九右衛門、藩内では藩学の祖といわれる福島（串間）の山内仙介の登用は一例である。一方、農地開拓に努力し貯水池、用水路の開削事業に着手、谷坂堤（元禄五年）長宝寺堤（同七年）檜谷堤（同十四年）等現在も残っている。

種政は元禄二年に襲封し、宝永七年まで十三年間善政を行い五十三歳を以て嗣子種弘に家督を譲り上江お茶屋に隠居し種弘を補佐した。五十九歳にて病没。藩民の哀悼はひとしおであった。法号天祐院殿慶嶽宗善大居士。大龍寺に葬られる。

⑤ 秋月種弘　一六八七（貞享4年）生

第五代藩主（河内守・山城守・長門守）一七五三（宝暦3年）没

貞享四年十一月十六日第四代藩主種政の長子として生まれる。宝永七年二十四歳にて家督を継ぎ、翌正徳元年初入封。

まず、家老のうちより「福島都合」を選んで責任を明らかにし福島（串間）の治績を上げた。正徳三年人材養成のため廉の屋敷で武芸、兵法の稽古をはじめ文武両道は武士の道であることを説いた。この学問所が後の明倫堂となったのである。

種弘は身体虚弱であったが頭脳明敏、摂生を重んじ当時としては長命の部の六十七歳を以て宝暦三年江戸、麻布の藩邸に逝き、同地の広徳寺に葬った。法号瑞応院殿恵山宗定大居士。龍雲寺は遺髪墓である。

⑥ 秋月種美　一七一八（享保3年）生

第六代藩主（佐渡守・長門守）一七八七（天明7年）没

享保三年五月第五代藩主種弘の長男として高鍋城内で生まれる。幼名は兵部。享保十九年十二月家督を継ぎ、同二十年六月初入封。

種美は先代からの経済振興策を受け継ぎ、互いに助け合うことを奨励し、林業牧畜にも意を注ぐ。一方では倹約令をだして徹底した財政引き締めを行った。また父種弘の志をうけて学問武芸を奨励し、才学ある青少年を選んで学資を与え、江戸、京都に遊学させ将来に備えた。財津十郎兵衛、大塚精斎、千手廉斎らはそれによって輩出した学徒であり、後の明倫堂の創設に貢献した。種美の施政は理財、文教の両面でも充実に向かって、基礎を固め、その成果に期待する施策であった。

種美は子女に恵まれ、長男種茂、二男松三郎は米沢藩上杉家を継ぐ。三男頼完は人吉藩相良家、四男忠快は大久保家を継ぎ、五男種懐は新小路秋月家を興し、六男信義は高家中条家、七男利国は斉藤家を継いだ。

宝暦十年七月、四十三歳で隠居し、天明七年九月病没す。七十歳。麻布広尾の光林寺に葬る。法号竜光院殿前長州大守英巌宗俊大居士。遺髪を竜雲寺墓地に葬る。

⑦ 秋月種茂　一七四三（寛保3年）生

第七代藩主（佐渡守・右京亮）一八一九（文政2年）没

寛保三年十一月三十日、江戸麻布の藩邸に生まれる。種美の長子、幼名は黒帽子。後に兵部と改めた。宝暦十年七月八日、父の隠居により、十八歳にて家督を継ぎ、翌十一年五月入封。

種茂は聡明で学を好み、情け深くて、よく人の意見を入れ、父祖の遺業を継ぎこれを発展させて、高鍋藩の全盛期

を実現した。初入部の後、小田岡右衛門らの新進気鋭の人材を登用し、藩政全般にわたり斬新な発想と周到な計画によってさまざまな施策を実施した。溜池や水路の築造、大規模な開墾事業や水除工事等は、歴代藩主中随一の実績を残した。換金作物の植え付けを奨励し、山林資源の開発利用を促進し、馬牧を盛んにして農業生産の増大と牧畜収益の増加をはかるなど経済の充実につとめた。また、庶民の生活にも心を用い、農民の三人以上の子どもには、一日米二合または麦三合のいずれかを支給し、産婆を大阪から招聘し、ばくちや間引きを厳禁し、双子の出産には貴賤をとわず扶助料を給し、朝鮮にんじんを栽培して藩倉に蓄え、薬価に乏しい領民に施したり、江戸勤務の足軽の生活を援助した。特に藩校明倫堂を創立し、自ら「明倫堂記」を作って建学の精神を明らかにし、人材の育成に努めた。天明八年に隠居、文政二年江戸麻布邸に没し、広尾光林寺に葬る。遺髪を竜雲寺に葬った。七十七歳。法号清観院殿前佐州大守真乗宗円大居士。

⑧ **秋月種徳**（あきづきたねのり）　一七六三（宝暦13年）生　一八〇七（文化4年）没

第八代藩主（山城守）

第七代藩主種茂の嫡男として宝暦十三年江戸麻布の藩邸に生まれる。幼名を黒法師、兵部とも言った。天明八年に家督を継ぐ。生来健康はすぐれなかったが、治世の内二十年は父種茂が健在でその後見に負うところが多かった。父の志を受けて人材の育成、民治の振興に努めた。特にいつくしみの心深くいくつかの美談が伝えられている。

その一つは寛政二年二月持田での鷹狩の時、鷹が獲物をつかんで地上におりたのを、そこにいた百姓の喜市というものが薪で打ち殺し、よく見ると脚に革が付いているので驚き、人に知られぬように地に埋めてしまった。結局それがわかり役人が重罪に処そうとした時、種徳が許してやった。その他孝子節婦の表彰、長寿者のねぎらいなどがあげられる。

なお武備にも心を配りはじめて西洋式の教練を採用し野首の講武原で閲兵を行った。

種徳は健康にもすぐれなかったが、家庭にも恵まれず、二夫人を次々に失い嫡子なく庶腹の種任が嗣子となった。江戸麻布藩邸で病没。四十五歳。法号泰雲院殿実山宗真大居士。広尾光林寺に葬られる。

⑨ 秋月種任　一七九一（寛政3年）生

第九代藩主（佐渡守・筑前守）一八五六（安政3年）没

寛政三年高鍋城内に生まれる。幼名を栄三郎といった。文化四年十二月父の死により家督を相続す。

種任は温雅な性格であり、種茂の遺訓を守り慈愛の政を布く。孝子節婦の表彰、敬老、貧民救助につとめた。

また、医療に関しては特に留意し医師の重病人の診断を断ることを禁じ、赤痢等流行に当たっては医薬を給与し、医師に対しては、遠隔の地もいとわず奔走すべきことを命ずるなど、先君と同じ施策をとった。文化六年、文政四年の天然痘大流行の際は回診、施薬に尽力した。

種任の時になると諸入費がかさみ、天保四年には江戸仕送り金六千両が不足となり、お手炭山を抵当として大阪商人から借り入れようと、したこともあった。

天保十四年、五十二歳にて隠居し、種殷に家督を譲る。安政三年江戸麻布藩邸にて病没。六十六歳。法号俊徳院殿寛道宗裕大居士。広尾光林寺に葬られる。

⑩ 秋月種殷　一八一七（文化14年）生

第十代藩主（佐渡守・長門守）一八七四（明治7年）没

第九代藩主種任の嫡男、文化十四年六月十三日江戸麻布の藩邸に生まれる。幼名を黒法師、天保十四年父隠居の後を受けて藩主となり、幕末動乱期に隣藩外交、藩内治政をよく全うした。藩政の改革を行い弘化元年には、医学館を明倫堂に附設した。また寄宿舎切偲樓を建て、明倫堂の教授、助教授の定年制を実施、次ぎに奨学制度を起こした。時局下武芸について種々施設するところあり、嘉永二年剣・槍の優秀生を柳川藩（福岡）に留学せしめた。修史事業にも着手、続本藩実録二十二巻が成立、編者横尾敬この時藩の日記を再検討して拾遺本藩実録十一巻を著す、また、中国の文献「夷匪犯鏡聞見録」の木版本を刊行したことは近時世の注目を引いている。

外交に海防に世論が高まりつつある時、藩では細島、美々津、福島三港に砲台を築き、翌年には兵制を改革し近代戦に対処するため従来の兵器、戦法を一新し、新兵器、新式教練の採用を断行した。郷学校を開き農村子弟の教育、屯兵の質向上を図る。明治二年戊辰の役の功により永世禄八千石を賜る。藩知事に命ぜられ、家禄は賞典禄と併せ一万五千余石となる。

日本歴史の大変動期に、よくその処置を誤らず藩政の終

わりを完了したことは永く銘記すべきである。明治七年三月十八日東京久保町賜邸で病没。五十八歳。法号盛徳院殿赫誉景山大居士。崇巌寺に葬られる。

⑪ 秋月種樹

一八三三（天保4年）生
一九〇四（明治37年）没

政界

高鍋藩十代藩主秋月種殷の弟、天保四年十月十七日、江戸麻布の藩邸に生まれる。幼名を政太郎、松渓・楽山・古香などの雅号がある。昌平黌に学び西島蘭渓・塩谷宕陰・安井息軒・芳野金陵ら天下に名ある学者の教授を受け、早くから小笠原・本田二侯とともに「天下の三公子」と呼ばれ期待の的であった。文久二年江戸幕府の学問所奉行、翌年若年寄格となり将軍家茂の侍読を兼ね将軍の上洛供奉となる。

元治元年感ずるところあり、辞任し再度の任命も辞して受けなかった。慶応四年維新政府に招かれ、木戸孝充らとともに参与職となる。

ついで明治天皇の侍読となり、下局議長を兼ねた。また建議して公議所を設けその議長に任ぜられた。版籍奉還、廃藩置県に率先協力し、維新の大業の成就に尽力した。やがて大学小監・大監（文部大臣格）となり、新教育制度の樹立に参画し、大学規則・中・小学規則の発布に功があった。

明治五年一月から十二月まで、欧米視察の途にのぼり、帰国後華族会館設立の事に当たった。七年兄種殷の死去で家督を継ぎ、翌年元老院議官となる。

十年西南戦争起こるや高鍋に汚名を残さぬために奔走努力した。十四年種繁に家督を譲り、高鍋に寄留し千歳亭に入り、高鍋学校生徒の指導に当たり、漢文や作文を教授しかたわら書画の揮毫を楽しみとした。このころの作品が多く残されている。二十三年十月、錦鶏間祗候を仰付けられる。二十五年東京に移住し悠々自適、風流を楽しみ詩文をよくし、「万歳亭の記」漢詩集「古香公詩鈔」などがある。書に優れ超凡の風韻があり、「松上之鶴巌上之亀」の絵は明治天皇の乙夜の覧に供せられた。二十七年一月、貴族院の勅選議員となる。三十七年従二位勲二等に叙せられ転地療養中神奈川県片瀬の別荘で十月十七日逝去。享年七十二歳。高鍋町高月大竜寺墓地に葬られる。

⑫ 秋月種繁　一八五八（安政5年）生
政界　一八九〇（明治23年）没

安政五年七月九日高鍋藩第十一代種樹の庶子として生まれる。幼名を謙次郎といった。隅江五郎左衛門信道の撫育をうける。また、養徳堂にて堤長発等より学問の指導を受けた。養徳堂とは謙次郎の住所に開いた学問所の名称である。

続々本藩実録巻の十三、慶応四年四月一日の記載事項に「謙次郎殿蔓崎御住居御治定相成二ノ丸御殿へ日々御出御文学御修業被成候付学校助教一人宛申談定詰御世話申上候様被仰付依而一人賄被下」とある。「堤長発君小伝」によるとこの時謙次郎は十二歳、堤長発は二十歳で明治元年三月頃の事であると記す。

明治四年謙次郎は上京、その後三年にして従五位下に叙せられ、明治十四年種樹隠居のため家督を継ぐ十七年子爵の称号を授けられ間もなく正五位に叙せらる。

以後、秋月家の隆昌のため鋭意努力中であったが二十三年八月九日病気にて死亡、時に三十三歳。大龍寺墓地へ父君種樹とともに眠る。

種繁は、始め妻として肥前国（長崎県）大村家第十一代純昌の八男利純の息女知久子をむかえたが諸般の事情により明治十一年大帰す。その後米沢藩上杉家より駒子をむかえ妻となす。駒子は種繁病没後上杉家へ帰る。

⑬ 秋月種英　一八八〇（明治13年）生
政界　一九六一（昭和36年）没

明治十三年三月九日高鍋藩第十一代秋月種樹の二男として東京市渋谷区南平台町に生まれる。三歳の時高鍋に帰り分家して平民籍に入り福島町高松（串間市）に移ったが兄の種繁が亡くなり一定期間内に相続せねばならぬので復籍し二十三年十月第十三代として秋月家を嗣ぎ子爵の称号をうける。二十五年高鍋小学校在学、二十五年から二十八年まで東京市成城学学校在学、三十年山口県宮市中学校入学、三十一年金沢中学校転入学、三十六年東京帝国大学法科大学へ入学、三十八年京都帝国大学法科大学に転校、四十三年卒業、同年司法省属を拝命し国務に就く。

大正三年辞職、程なく貴族院議員に互選せられ以来三十五年間貴族院議員として鋭意研鑽につとめ昭和十一年広田内閣の司法参与官に就任し国政に関与し、官位も従二位勲二等に叙せらる。終戦により新憲法が実施され貴族院は消滅したので高鍋城二ノ丸跡の住居に帰り自適の日を送りながら旧高鍋藩内の復興発展に尽力し、豊かな識見をもって郷土の指導と助言に意を注ぎ町民より尊敬された。

昭和三十五年上京し娘治子を久しぶりに訪問した。その後病気にかかり医師の治療を受けたが、三十六年十月二十九日在京のまま死去。時に八十二歳。大龍寺墓地に葬る。

⑭ 秋月可山

芸術　　一八六七（慶応3年）生　一九三一（昭和7年）没

慶応三年十二月二十八日、新小路秋月家に父良種、母円子の長男として生まれる。幼名は兎太郎、後に復郎といった。号は可山、中ごろ紫明、晩年には芡雲を用いた。

明治初年東京に出て、麹町番町小学校に通い、更に東京美術学校第一回入学生となった。二十七年七月蒔絵科（初めは漆工科と呼ぶ）を卒業。二十九年二月から一年余り同校調漆の教師を嘱託された。美術学校が岩手県中尊寺の修復を請け負った際は、その責任者となって重責を果たした。

明治三十三年パリーで万国博覧会が開催されたとき、復郎は同博覧会事務官となってフランスに渡った。後にまた官命を受けて再びフランスに渡り、油絵の研究に従った。

帰国後、郵便配達人のカバンに「〒」（明治二十年逓信省中島某考案）を桜花で包んだ図柄をデザインし漆の加工を施した。これが好評を博し人々に親しまれたと伝える。

明治四十二年には梨本宮邸の漆塗りの内装を担当した。その後、日高秩父（書家）の推薦によって宮内省に奉職し主馬寮の御用係りとなった。また皇族御料車制作の監督に招かれ鉄道院で仕事に当たったこともある。大正十三年一月、昭和天皇（当時皇太子）御成婚用の漆塗りの馬車制作にも携わり、この車は現天皇御成婚の際にも使用された。

可山は蒔絵のほか、日本画にもすぐれ、橋本雅邦、川端玉章、の北画を学び、更に滝和亭、野口幽谷の南画を吸収し、荒木寛畝、高島北海の長所を取り入れ、花鳥山水に独自の画境を成就し、人物画も巧みであった。

昭和七年六月二十九日死去。享年六十六歳。東京都府中市多摩霊園に眠る。

⑮ 秋月小牧

政界　一八四六（弘化3年）生　一九一三（大正2年）没

弘化三年三月十二日高鍋町小丸に生まれる。父正蔵は松崎慊堂に学び造詣が深かった。

小牧諱は輝種といい通称は初め仙治、後に小牧と称した。秋牧と号し後に西園と号した。姓は大蔵、税田氏、故あって秋月氏に改めた。

代々高鍋藩に仕えた。彼は幼にして庭訓を受け藩校明倫堂に学ぶ。十七歳の時発憤して江戸に出て安井息軒に師事、また業を渡辺魯輔に学ぶ。

元治元年、戊辰の役起こるやその四月二十八日京都に於いて徴兵を命ぜられ陸軍局に入る。やがて六月徴兵五番隊司令官を命ぜられ、総督宮兵部卿嘉彰親王に従い奥越の賊を討ち会津城下に入る。賊を平定し十月京都に凱旋して恩賞を拝受して藩に帰る。

この年藩政改革行われ士族投票公選議員に選ばれ功績顕著であった。

明治四年一月藩命により東京に遊学、小橋橋陰の門に入る。六年四月小学四等教授、高鍋小学校支那学兼習字掛を拝命、同年十一月大阪師範学校入学、八年病により退学、十年西南役起り藩内は政府につくべきか薩軍に投ずべきか騒然たる状態であった。そこで黒水長慥等鹿児島の実情をさぐり薩軍に従ってはならぬことを説く。然し遂に薩軍に従い出兵するもの約二千、秋月小牧は病気だといって従軍しなかった。

明治十三年金融会社小丸株式会社を創設、大正十年宮崎銀行と合併するまで四十二年間社運を保持し得たのは彼の誠実の致すところと言わねばならない。

十七年県会議員、村会議員を兼ね八年間の功績偉大なものがあった。

詩をよくし書に巧みで古書画骨董、刀剣を愛玩した。

大正二年十二月二十日死去、享年六十八歳。

高鍋町田の上墓地に葬り巌谷小波の筆跡になる墓碑は二米余の自然石に西園先生墓と刻まれている。

⑯ 秋月左都夫　一八五八（安政5年）生
政界　一九四五（昭和20年）没

外交官。父は高鍋藩家老秋月種節、母は鈴木百助の長女久子、その三男として高鍋町筏小路に生まれ、幼名を六三郎と言い、毅堂と号した。鈴木馬左也の兄である。藩校明倫堂、鹿児島医学校に学び、司法省法学校卒業。ベルギー、ドイツに留学し、明治二十五年外務省参事官となった。しばらく帝国大学で国際法を講じたが、再び外交官となり、フランス・ロシア・スウェーデン・ベルギーの公使館に勤務。明治四十二年オーストリアの特命全権大使となった。大正三年退任して宮内省に入り、学習院の教育に当たる。退官後は読売新聞社長となり、第一次世界大戦後のパリー講和会議には全権顧問となった。同十年朝鮮総督斎藤実にその人格識見、豊かな経験を朝鮮統治に寄与して欲しいと懇請されて京城日報社長に就任した。長い期間にわたり、情報活動の中で諸方面の思想感情の融和に尽力した功績は大きい。昭和二十年には太平洋戦争の終結、早期講和の実現を吉田茂らと図ったが、この年六月二十五日、東京で病没した。享年八十八歳。高鍋町大竜寺墓地に葬られた。

読書家で知られていた左都夫は、常住座臥読書に親しんだ。その逝去後、和・漢・洋にわたる数千冊の蔵書が遺されていた。明倫堂文庫の蔵書約一万六、〇〇〇冊は、明倫堂書庫の蔵書を主体とし、毅堂書庫の蔵書も含まれている。嗣子捷五は亡父の遺志を思い、慰霊の意をこめて、フランス語の原書千余冊を外務省に寄贈した。外務省ではこれを「秋月文庫」として収蔵したが、仏語書籍のほかの英書・独書・多数の仏文雑誌はその利用の便を考えて国会図書館に移管されている。蔵書の内容は政治・外交・歴史・哲学・文学・心理学・経済学・自然科学にわたっている。

⑰ 秋月種事　一八四四（弘化1年）生
分知領主　一八七七（明治10年）没

幼名は幾三郎、第九代種任の庶子、一時家老隈江織部信吉に養育される、文久元年十七歳の時臣下し高鍋新小路に居住し三十人扶持家老上席となる。

文久三年木脇分地領主種記の後を継ぎ、慶応二年将軍にお目見えされる。

学問を好み、幼少にして西島蘭渓の門下に入り、のち藩校明倫堂に学ぶ、特に書に秀で藩主より賞せられた、剣は藩士石井寿吉、柿原宗敬に学び大石神影流の奥義を極める。明治十年西南の役起こるや薩軍に参加し、その参謀格となる。また高鍋隊の総師として熊本・宮崎・鹿児島と転戦する。

なかでも明治十年八月十八日の延岡えの岳の決戦には、最後まで戦闘に参加し、西郷の解散命令後は坂田諸美等とともに西郷に従い、長駆鹿児島に向い城山に戦死せり、時に三十四歳、鹿児島浄光明寺に葬られた。国富町木脇馬場の「招魂碑」は種事の遺髪墓という。また、鹿児島城山の南洲墓地には、西郷隆盛の墓のすぐ近くに種事の墓石がある。正面に東京士族秋月種事・高鍋士族坂田諸美と並列に刻す。

妻は肥前国松浦（長崎県）小笠原壱岐守長泰の娘女ツタ子・二人の間には明治二年十月十七日生の長男重太郎があり、のちに木脇（国富町）村長をつとめる。

⑱ 秋月種苞（あきづきたねもと）

教育　一八九〇（明治23年）生　一九八〇（昭和55年）没

高鍋藩秋月家第十二代種繁と駒子（米沢藩上杉家）の長男として誕生。

種繁は明治二十三年八月九日病没。家督は直ちに弟の種英が相続し、その二ケ月後の明治二十三年十月十七日種苞が誕生。母の駒子は種苞が百ケ日を過ぎると実家の上杉家に返されてしまった。

種苞は両親を全く知らず、母の墓参も許されずに育った。藩の家臣の家を転々として養育され、宮崎中学校から東京府立一中に進み、将来高等学校、大学進学の大望を抱きながら秋月本家の経済的事情を考慮して鹿児島高等農林学校に進学、卒業後東京国立農業試験場に入所したが、種苞は意を決して宮崎農学校に勤務することになった。（大正七年から昭和九年まで）同九年三月二十五日旧制組合立高鍋中学校校長として迎えられ第四代校長となる。現在高校前通りの南京ハゼは校長自ら宮崎高等農林学校から貰い受け植樹したものである。（昭和十年二月）。

十八年三月三十一日退任。高等官四等に補せられ正六位に叙せられた。退職後高鍋町教育委員、三十一年から三十

八年まで教育委員長として高鍋町の教育の振興につとめた。

種苞は藩主の分家としての分限を常に持ちつづけ、邪心も媚びることもなく妬み心など微塵も持たず、天真爛漫にして気品の高い性格を自ら律し、観世音菩薩を信仰し慈悲深い人であった。

宝生流謡曲の趣味を持ち、短歌を楽しみ格調高い作風の歌集がある。

昭和三十九年十月から町老人クラブ連合会長をつとめたが、五十五年四月二十二日病没、享年九十一歳。秋月家竜雲寺墓地に葬る。

⑲ 秋月種節（あきづきたねよ）

一八一四（文化11年）生
一八七七（明治10年）没

維新功労

文化十一年、高鍋横筏に父水筑彦太郎長周、母大塚静氏の娘、その長男として生まれる。水筑家の先祖は藩主秋月家から出たが、筑前の水城地方を領し、水筑姓を名乗った。明治維新後、種節のときに再び秋月の姓に復した。小一郎、種世、長節と呼び、号は陶淵明に私淑して季陶と言いその住居を常関草堂という。

種任、種殷二代の藩主に仕え、特に種殷の親任が厚かった。弘化中に物頭となり次いで参政に進み藩政の改善に努めた。慶応二年、家老に昇進二百石を受けた。当時幕府の威信衰え、その回復に人材を求め、世子秋月種樹の学問識見とその声望に着目、若年寄に迎えようと内命を受けた。世の成り行きを配慮した種節は城勇雄らとその間に奔走し、ついに若年寄辞退を実現した。更に物情騒然たる中で、慶応三年鈴木来助、城勇雄を従え薩摩藩に使いし、高鍋藩の実情を説き、以後両藩強調して時局に対処するに至った。戊辰戦争のとき、種節は京都にあり在留の藩士とともに薩軍に合流して朝廷方警護に当たった。藩政改革後は少参事に推され政務に従ったほか、後に島田小学校長となり、旧家中の女子を募集して就学させ、みずから教授した。

種節は幕末から維新にかけて高鍋藩の行財政改革の指導者として活躍したが、明治二年の版籍奉還後には執政となり、藩会計知事を務めた。実業奨励に力を注ぎ櫨の良種を取り寄せて栽植を勧め、信濃の桑栽培法を調べ良苗を持ち帰り桑園経営を庶民に教えた。また太平寺に蚕室を建て養蚕をすすめ、士族授産のためお仮屋長屋に機業場を開き、京都から教師を招いて女子に伝習させた。

俸禄を失い貧窮に苦しむ旧士族の救済のため、貸金会社の代耕舎を設立し、川南村甘付海岸が良質の海苔を産することに着目、浅草海苔の製法を習ってその改良を促した。みずからも早く実業に力を注ぎ、家号を「最中屋」と名付け、酢、醤油、酒類を製造販売し、商を賤しむ風を打破し自立自営の精神を鼓舞した。

明治十年西南戦争の際、西郷軍参加を主張する意見が多い中で、弟黒水長慥らとともに順逆を論じその非を説いて譲らず、ついに同志九人（九烈士）旧藩米倉の獄に幽閉され、病気のため明治十年六月二十三日島田の獄中で没した。享年六十四歳。墓は高鍋町高月の大竜寺墓地にある。種節の男子四人は世に「四哲」として名を知られる。

⑳ 綾部融

一七八六（天明6年）生
一八三七（天保8年）没

教育

通称を順輔字は、文淵、姥南と号せり、幼年より学問を好み、日夜勉学に怠りなく成長、英俊にして年十八の時、江戸に遊学し昌平黌に入り、尾崎二洲良輔に師事す。聖人の教えをしるした書などを研究すると共に経書や歴史も修めたが、最も文章に巧なり。

山口周防守京都二条御番所詰の幕命をうけるにあたり、雇われて儒官となり京都に行く。任期満了に及びまた江戸へ帰る。みずから塾を開きて教授を業とせり。この時藩主種任の命をうけ高鍋に帰り文化十年九月十日小給格儒家に召出され、禄三十石を賜わり藩校明倫堂の助教となる。

しかれども素より仕えることを好まず、京都に塾を開く志ありて、いつもは人々と談笑して温和なれど弁論ともなれば直言にして遠慮なし、是をもって上司のねたみを受け学術御家の家風に合わず教育を害すると称して罪となり、格禄取上げの上きびしく他藩へ出る事を禁じられた。

この時悴豹蔵は幼年であったが新知十五石を賜い徒士格に取立てられ家督を継ぐ。のち中小姓に進んだので隠居し日々釣竿をたれ、夕べには家族ともども杯を傾け談笑す。兄弟の友愛、家族の協和観賞せざるものなし、天保八年三月十二日病に臥して逝去せり、時に五十二歳。法号雄岳了威居士。大龍寺墓地に眠る。

㉑ 綾部千平　一八七四（明治7年）生
医学　一九三〇（昭和5年）没

荻原百々平の長子として明治七年一月十日に生まれる。幼くして才智にたけ学を好み十二歳にて高鍋学校に入学、十七歳の時熊本以文館へと進む。更に十九歳長崎医学専門学校へ学ぶ。成績優秀につき特別賞を受賞して卒業する。間もなく熊本歩兵第十三連隊へ入隊し三等軍医を命ぜられた。在隊一年にして帰郷、父の経営する日向病院の医業を補佐していたが、日露戦争が起こり従軍して一等軍医に特進、金鵄勲章・瑞宝章を賜る。三十九年自ら日向病院を経営しながら、病院を新築し医療技術の研鑽向上に努め名声大いにあがる。

大正九年選ばれて宮崎郡医師会長、十三年推されて県医師会長となる。十五年医師健康保険部長を兼任、その間産婆看護学校を設立し自ら校長となる。また、妊産婦保護会、産婆看護外勤部などを設けた。その他医事衛生百般の施設を整える。

日頃は学問を好み文学をきわめ、公私共に多忙な毎日であるが慎密にして先を見ることに明るく、常に人びとの生活を助ける志をいだき、その為に全精力を消費した。

郷にありては、在郷軍人会の会長を勤め、あるいは民政党県支部長等を歴任したが、昭和五年十月三十日病気のため没す。五十七歳。大龍寺墓地へ葬る。

㉒ 荒川環　一七八五（天明5年）生
医学　一八六八（慶応4年）没

天明五年美々津に生まれる。名は利貞、通称環、哺亭と号す。早く漢学を学び、長じて医学を学ぶ、特に産科に長じたという。娘蔦子の夫、日高耳水が儒官として美々津より召し出され、城下町の藩邸（お仮屋）に住むよう命ぜられ、まもなく環も藩命で同居することとなる。やがて環は蓑江の宅地の一つを賜ってここに住むようになり、藩校医学館にて山田容庵、平嶋保節らと共に医学研修の係りに任命される。

環は早くより蘭法の種痘を学び、安政二年藩の許可を得て山田容庵と共に川北郷（今の都農）で種痘を行った。『傷寒論』（疫病の医学書）は晩年の著作という。

宮崎城ケ崎の中村宇太方（四女の婚家先）で、種痘の宣伝中病に罹り、慶応四年六月十日城ケ崎にて没す。享年八

十四歳、墓は元祇園にある。

㉓ 荒川リク　一八七一（明治4年）生
産業　一九六六（昭和41年）没

高鍋村大字北高鍋八一四番地（小丸）父荒川盛明・母チカの長女として生まれ、五歳のとき父盛明は西南の役で西郷軍に加わって田原坂で戦死、母の手一つに育つ。明治二十一年高鍋製糸会社の蒸気機械製糸の新工場設立に備えて、十九年数え年十六歳でほかの二人の士族の娘とともに、選ばれて先進地群馬県に研修生として派遣され、前橋・桐生で製糸・機織を研修し、次いで最新式の機械設備を持つ富岡の官営工場でも見学実習を行なって帰郷。三十五歳で高鍋製糸会社の主任婦教となり、則松クラとよく協力して幾百の女工の教育指導に当たり、昭和初期まで四十数年、リクの指導を受けた女工は約一万人、そのうち後続婦教となった者数百人に及ぶといわれる。大正末期財津吉憲らとはかり、「高鍋製糸養成所」を開設して、県下各製糸場の中堅女工を集め、後進婦教の養成に専念している。

リクは製糸功労者として、しばしば表彰を受けているが、特に有吉忠一知事から記念の懐中時計も贈られている。

晩年は長男盛潔（元県農地委員）、次男如矢朗（元熊本日日新聞宮崎支局長）のもとで本県製糸業界開拓功労者として九十六歳の長命で没した。墓は田の上墓地にある。

㉔ 荒瀬カツ　一八七一（明治4年）生
教育　一九五七（昭和32年）没

高鍋村大字南高鍋一九八番戸（現在の宮田）父森孝一、母うめの長女として生まれ、幼時から学問の志篤く、高鍋小学校を終えると、熱心に両親を説得して娘一人山越えで熊本に出て、明治二十一年五月、私立熊本女学校、普通科に入学、専ら苦学して二十五年六月同校卒業。同年九月京都市同志社女学校専門部甲種師範科に入学、同校卒業後一年私立松山女学校、次いで高鍋小学校教員、三十二年四月から求められて母校同志社女学校教員となった。

三十五年八月、イギリス、ウスター州アンステー女子体育学校に留学三十六年五月帰国、望まれて村井銀行支配人村井貞之助宅の家庭教師をなすこと数年に及んだ。三十九年同郷高鍋町大字北高鍋一二四番戸、陸軍軍人荒瀬哲と結婚し、家事に専念し二男一女の母となった。長男は生後一ヵ月で早逝。大正四年三月十日夫哲逝去。その前年の三年七月から高鍋実科高等女学校教授嘱託となり、八年六月から同校寄宿舎の舎監となり、十三年四月からは組織変更により高鍋高等女学校教諭兼舎監として勤務。かたわら免許を生かして生け花や茶道を教授し、高鍋和歌の会に属して秀作を残している。十年から三年間は高鍋小学校の裁縫専科教師を兼ねていた。

カツはつとに幼児教育の必要性を説き、婦人会などに熱心に幼稚園設立を勧め、大正十三年四月他にさきがけて高鍋幼稚園の開園に導いた指導者でもあった。昭和四年四月同志社女学校専門部生徒監主事兼寮務主事に任ぜられ、八年三月六十三歳で辞任するまで教職通算二十五年、特に舎監を務めること長年、信頼敬慕される慈愛の人、よく教え子たちの面倒をみ、直接媒酌人となったものだけでも六十組を超すという。

東京帝国大学法学部を卒業して住友金属株式会社に勤め、その将来を嘱望されていた二男達也は十四年十二月に急逝し、以後は先に昭和九年十月長女和子が高鍋町出身の海軍軍人瀬戸山八郎と結婚していたので、娘婿瀬戸山宅に身を寄せることになり、瀬戸山の自衛隊入隊後は、ともにその任地に移り住んでいたが、三十二年六月二十六日浜松市広沢町の航空自衛隊官舎で八十七歳の生涯を閉じた。墓は高鍋町高月に荒瀬哲・達也の墓とともにある。

㉕ 石井十次

福祉

一八六五（慶応1年）生
一九一四（大正3年）没

日本社会福祉事業の先駆者である石井十次は、慶応元年四月十一日、上江村馬場原に生まれる。父は高鍋藩士石井万吉、母は乃婦子、その独り息子、性剛直果断、仁慈の心あつく、開拓の精神に富み、早くキリスト教を信じ、我が国社会救済事業の鼻祖といわれる。

明治十五年岡山医学校入学、十七年郷里の青年のために馬場原教育会を起こす。後学生五人を伴い岡山市に帰り、その学資を分かちながら、不足を補うため按摩を習い、夜

は笛を鳴らして街頭に立った。二十年春、脳症の療養と医術の実地研究のため、同県邑久郡大宮村上阿知に移り、隣接の大師堂に一貧児を救い、更に二人の薄幸児を引き受け、九月に三児を伴い岡山に帰り、孤児教育会を設けた。岡山孤児院の初めである。二十二年「人は二主に仕ふること能はず」との聖書の章句に感激し、六か年学習の医書を焼き医学校を退学し、孤児教育に専念することを誓い事業に着手した。

当時慈善事業は、世の顧みるところとならず、飢餓全院に迫り、断食祈とうにその日を、過ごすことも少なくなかった。こうした時に、明治二十四年濃尾大地震起こり、災害児童を収容救護すること九十三人に達した。また塾舎制度を改めて家庭制度とし、わが国慈善事業界に新しい道を開き、院内に尋常高等小学校を創立し乳児、里親制度を創始するなど、我が国福祉事業界に大きく貢献した。

三十九年には、東北地方大飢きんによる孤児貧児も六回にわたり、八〇〇人を収容し、在院千二百余人にのぼった。

更に孤児教育の真随は、独立自活の良民をつくるにありと信じ、農業的訓練を与えんがために、宮崎県茶臼原に分院を設置し、四十一年以後、次第に岡山市から児童全部を移し、約六十余町歩（六〇ヘクタール）五十余棟の植民村を実現し、また大阪市に分院を設け、南区下寺町貧民街に愛染保育所と同夜学校を開き、専ら細民街の改善教化に努力した。

赤誠よくその事業の成績を挙ぐるにしたがい、世の同情理解も自然に集まり、その善行を表彰して藍綬褒章を授けられ、またご下賜金を賜るなど仁慈に浴すること数回に及んだ。

大正三年一月三十日持病腎臓炎のため茶臼原静養館にて逝く。享年五十歳。死に先だち正七位に叙せられ、茶臼原に埋葬した。

葬儀は国内の知人名士をはじめ、郷土民の会葬者三、〇〇〇人を超えるおびただしい人であった。

㉖ 石井品子

福祉　一八六五（慶応1年）生　一八九五（明治28年）没

慶応元年、上江村字北平原新馬場の内野家に生まれる。父は要蔵。明治十四年石井十次と結婚し、十五年九月、岡山県甲種医学校に入学する十次に従って岡山

市に移った。十七年九月、絹織物技術修得のために京都に赴いたが、十次の信仰上の姉ともいうべき炭谷小梅の勧めにより十八年五月岡山県高梁（たかはし）の順正女学校に入学した。

二十年四月十次の岡山県邑久郡大宮村上阿知の診療所に行くのに従い、十次が貧児前原定一を同村大師堂に救い、さらに二人の孤児も救い三児を伴って岡山に帰り、三友寺を借り、岡山孤児院を創設した。品子は二十一年十一月、神戸女子伝道学校に入学したが、院児はしだいに増加し翌二十二年一月十日、十次は医学を廃し医書を焼いて孤児教育に専念することを決意した。

品子は十次の孤児教育の最良の同伴者となってその短い生涯を送った。

石井品子について「岡山孤児院」の著者石田祐安は次のように述べている。

石井夫人は孤児院に於ける隠れたる基礎なり。創業の際一人の同情もなく補助もなき時にあり、何の縁故もなき児女を集めて親しく撫育したるは実に石井夫人にてありき。多くの補助者の中に立ち、三百の児女の母として必要となる。偏せず、党せず、多言せず、他人の秘密を知らざるが如くすることの如何に嘆きかは、蓋し他人の想像の及ぶ所にあらざるなり。

また石井夫妻が最大の敬意を捧げた炭谷小梅が品子の葬儀の席で述べた言葉の中に、

お父様（十次をさす）は時として子供に懲罰を加えて、厳訓なさることもありましたが、お母様（品子）は、未だかってさることのありましたのを見受けませんでした。お母様が私にこんなことをお話しになったことがあります。わたしはまだ子を産んだことがない。それで、子を思う真の親の慈悲を味わい知ることができぬ。もし真味を知ってその心を心として彼等を撫育することができたならば、少しは彼等を慰さむる術（すべ）もあろうに、一人の子供だになきは返す返すも遺憾であると涙と共にお話しになったことがございます。この一言でお母様がいかに博愛で、慈悲深いお方であったかを知ることができましょう。（小野田鉄弥石井十次伝）

明治二十八年三月、品子は三女基和子を生み、過労と結核に倒れ、別居して養生に努めた。この年は岡山にコレラが流行し、孤児院内にも罹病者が発生し、石井十次も感染して避病院に隔離され、八月二十九日退院したものの、この間に品子の病状は悪化し、十次が退院して二週間目の二十八年九月二十一日永眠し、岡山市東山山麓に葬られた。享年三十一歳。

墓は埋葬の場所と茶臼原十次の墓のかたわらとにある。

㉗ 石井辰子

一八六三（文久3年）生
一九二七（昭和2年）没

福祉

文久三年出生。福岡の人。同志社看護婦学校に入学。石井十次が明治二十五年同志社病院に入院した時、辰子の働きぶりを認め、同校卒業後、孤児院専任の看護婦として招き、その仕事のほか、年長女子に看護術を教授することを委託した。

品子夫人の没後、二十八年十二月十六日、石井の継室となり、多病の石井を世話し、数百の孤児養育の中心となった。そして石井の健康に万全を期し、三人の継子を養育し、院母としての重責を果たした。

大正三年一月、石井が亡くなると、大原孫三郎、大庭孟が相ついで院長となったが、大正十年辰子は推されて岡山孤児院第四代の院長となり、十五年の院解散に至るまでその遺業を受け継いだ。解散後、辰子は柿原政一郎とともに清算人となり、残された孤児や、再び孤児になった者は、茶臼原に「帰って」来る者を受け入れるのであった。

昭和二年三月二十一日、六十五歳でその奮闘の生涯を茶臼原で終わり、十次のかたわらに葬られた。

㉘ 石崎義夫

一九〇三（明治36年）生
一九八七（昭和62年）没

産業

明治三十六年十月十五日父貞兵衛母オキヨの二男として広島県安芸郡倉橋村に生まれる。石崎家はもともと毛利家の家臣で庄屋などもつとめた旧家、父貞兵衛は七代目でん粉製造業を営んでいた。

大正七年高等小学校卒業後家業に従事、昭和初期ごろには原料かんしょの大量買いつけのため高鍋に来ることが多かったが、この事に着目した高鍋農会長田中正行および町収入役平山重平、勧業課長岩村靖の三人が協議してでん粉工場の誘致を決意し「工場用地のあっせんと原料かんしょの確保」を約束して義夫に申し入れた。その結果、九年十月、町内宮田に県内最初のでん粉工場が設立され、これを契機として町内に多くのでん粉工場が誕生した。そしてでん粉用原料かんしょの増産が結局、十二年六月の国営無水アルコール高鍋工場の誘致にもつながり農業の振興をもたらしている。

でん粉製造業で成功した義夫は、同業団体の理事長などのほか十七年に町会議員（一期）、高鍋信用組合（現高鍋

信用金庫）の理事を二十年から二十四年間、また高鍋商工会議所の常議員などをつとめ政治、経済両面で活躍した。

四十一年には中小企業功労者として内閣総理大臣表彰を受けたが六十二年十一月十九日病没、享年八十五歳、菖蒲池墓地に葬られた。功労により勲六等單光旭日章を追贈されている。

㉙ 岩岡保吉

一八八九（明治22年）生
一九七七（昭和52年）没

社会

高鍋町の名勝地、高鍋大師開山の主岩岡保吉は、明治二十二年十月九日、香川県に父与平、母キヌの三男として生まれる。同二十九年一家八人高鍋に移住した。幼少のころから体躯優れて強健、小学校を卒業すると、固い志望を持ち、町内の文房具店に奉公した。仕事は車に文房具類を満載して隣接の村々の学校を巡回する出張販売で、それを五か年続けた後に、大字北高鍋小丸秋月撲医院の車夫に住み込み、昼夜の別なく、遠近を問わず医師の診療治療に従ったことは衆人の注視の的であった。彼は年来の信念を貫き、四十一年小丸上に独立し、精米業および米販売業を経営した。誠実、正直、勤勉な人柄は顧客の信頼を一手に集め、商売は大いに繁盛した。大正七年三十歳の時、四国八十八箇所の巡礼に出て、帰ると水谷坂八十八箇所に参り、その荒廃を歎き、新八十八箇所建立を発心した。またま弘法大師生誕一、一〇〇年を迎える前で、好期を逸せずと、適地を東光寺村に求め、雑木を払い準備に当たった。昭和三年仏像彫刻に適した石を発見、石工仏師を大分県から雇い、小丸川原に作業場を設け、家業を嗣子に譲り専心製作に励んだ。その間自身も技を学び、六年完成、早速東光寺山東面を開山、八十八仏像を安置した。これが新八十八箇所である。その後習い覚えの彫刻技術で、弘法大師石像一体、仏具一式、大師堂一二〇平方メートル四方屋根瓦ふき、内部組立丸木材使用でほとんど自力をもって建築を完了、九年三月二十一日、安置入仏式を挙行した。参拝者は跡を絶たず。持田古墳八十五基の霊の供養、戦没者の慰霊を併せ、大小各種の仏像七百余体を彫刻した。第三の事業は裏参道の横穴開削事業で青の洞門の禅海和尚を思わせる。これは昭和十六年太平洋戦争が起こり、待避壕の必要から設けたもので壕内に自作の三十三仏を安置している。終戦後はひたすら、英霊と古墳の供養と、町民の安全

祈願、信者や老人の親睦慰安の場として、囲碁用具、茶の湯の家も特設している。彼の念願の道路開通は果たせなかったが、五十年その功績が認められ観光協会の表彰状を授与された。五十二年一月十九日享年八十九歳をもって大往生した。僧名弘覚、戒名法寿院弘覚求道居士。道具小路田の上墓地に埋葬した。

㉚ 岩村兼善

一八四三（天保14年）生
一九一九（大正8年）没

政界

天保十四年十一月四日、高鍋石原に生まれ幼名を虎雄と称した。藩校明倫堂に就学の後、江戸に出て安井息軒に学んだ。戊辰の役に当たり、藩主秋月種殷は米沢藩が上杉鷹山以来の親密な関係から、順逆を誤らないよう説得のため特使を送った。この特使に選ばれた岩村虎雄、坂田潔の二人は明治元年六月、京都を出発、戦乱の奥州に赴き危険と困難を克服して米沢に達し、速やかに官軍に降伏するよう内命を伝えた。米沢藩は帰順が許され岩村らは面目を施し、その功により永年高十五石の加増があった。

明治維新の後、官界に入りしばらく県に勤めたが、明治八年一月海軍省に転じ、横須賀造船所から本省に入り、十五年海軍権少書記官、同年末少書記官に進み、十九年海軍主計少監となり、海軍大臣秘書官に補せられた。その後本省と横須賀鎮守府との間を出入りし、二十一年主計大監となり、翌年横須賀鎮守府監督部長に転じ、三十一年五月主計総監同時に予備役に編入された。

三十七年貴族院議員に勅選せられ、大正七年二月十一日には多年貴族院議員にあって尽くした勲功により金杯を下賜された。同年九月海軍主計少将となり、十一月二十七日従四位に叙し勲二等瑞宝章を授けられたが、同日没した。享年七十七歳、法名は勧成院殿性善日道大居士と称し、墓は東京青山墓地にある。

㉛ 岩村真鉄

一八五八（安政5年）生
一九三九（昭和14年）没

教育

安政五年二月十二日、高鍋村大字北高鍋字道具小路の父岩村又八、母萱嶋のし子の二男として生まれ、幼時萱嶋復馬に養われていたが兄亀太郎が早死したので

復籍して岩村家を継ぎ、石井万吉の娘静子と結婚、一男三女をあげた。岡山孤児院長石井十次の義兄である。資性温良、藩校明倫堂行習斎に学び、後進んで宮崎学校に学び、明治十年高鍋小学校訓導三等補となる。十二年六月山梨県東八代郡に赴き、養蚕・製糸およびフランス流ブドー酒醸造法を学び、数年後桑苗を持ち帰り、みずからも植えほかにも勧めて、高鍋授産場設立に尽力した。

同二十年九月、石井十次が岡山孤児院を開設するに当たり、これを補佐し、同年十二月同志五名と謀り、児湯郡上穂北村茶臼原に、将来院児の移住地に備えて、原野五十余町歩（約五〇ヘクタール余）を購入した。二十五年夏石井の招きに応じ、岡山孤児院会計事務を担当した。二十七年四月、茶臼原農村部設置に当っては、真鉄夫妻は年長院児六〇名を率いて茶臼原に移住し、住居建設・開墾・耕作など、石井院長を助けて茶臼原分院経営に院児らと辛苦をともにした。

三十四年六月、清国人正二品厳修に招かれ、天津に赴き、日本語学校の教師となり、日本居留民子弟のため小学校を建てみずから教べんをとった。三十七年二月日露戦争が起こると、天津駐屯軍経理部に所属、第二軍の糧米三、〇〇〇石、鉄道材料などの兵たん部輸送に活躍した。三十八年母の病の報に急きょ帰朝し、看病わずか十一日でその死に遭い、三十六年米国留学から帰り茶臼原農林部を興していた長男真琴も三十九年病死した。岩村はこれに屈せず、院内に養蚕の術を教え、多くの収益をあげ、大正三年一月石井院長永眠の後は、未亡人を助けて院事をみること九年。知事表彰、七年の内務大臣の功績状が輝いている。

九年孤児院を辞して自邸に帰り、晴耕雨読郷土の史実、史跡を探求し、旧藩主秋月歴代の誠忠事績を調査顕揚することに努め、後進のため計るところ少なからず、昭和三年十一月十六日大礼記念章を授けられた。六年推されて高鍋郷党協会長となり、会を誘導し、高鍋・上江の町村合併を推進するなど、地方文化の発展に貢献した。十四年五月二十九日天寿を全うし霊天に帰る。享年八十二歳。墓は道具小路田の上墓地にあったが、平成三年栃木県下都賀郡壬生町に移された。

㉜ 上杉鷹山

米沢藩主　一七五一（宝暦1年）生　一八二二（文政5年）没

宝暦元年七月二十日、高鍋藩第六代藩主秋月種美の二男として江戸一本松邸に生まれる。母は筑前秋月藩主黒田長貞の娘ハルで、種茂は鷹山の実兄で八歳年長であった。幼名は松三郎、後に直松と称した。宝暦十年米沢藩主上杉重定の娘幸姫の婿養子となり、直丸勝興と改名した。母ハルは米沢藩第五代上杉綱憲の孫娘であるから、松三郎は綱憲の曽孫に当たる。明和三年将軍家治の前で元服し、従四位下に叙せられ、家治の一字をもらって弾正大弼治憲と改名した。上杉家へ養子の内約が調った折、高鍋藩の家老三好善太夫重道はその縁を喜び、誠意を込めて所信を書き、成長の後も折節ご覧くだされたいと松三郎君に訓言を献じた。また上杉家に引き移る喜びの前に、更に心を尽くして五か条の訓言を書き綴り、「奉贐書」として贈っている。二通の訓言は聡明な松三郎に深い感銘を与え、常にその座右に置き生涯反省の資にしたという。現在も上杉家に保存せられている。先年、原本のコピーを町図書館にもらい受けてある。それには高鍋藩学の伝統精神が明らかに脈打っており、鷹山の治績のうえにもりっぱに生かされている。

上杉家に移った治憲は、細井平洲、滝鶴台、渋井孝徳に師事し、特に平洲を厚く尊敬しその教えに従った。治憲が養子となった当時の米沢藩は、疲弊の極に立ち、そのうえ権臣の悪政もあり、滅亡寸前ともいうべき状態であった。治憲は元服の翌年、明和四年四月二十四日家督を継ぐと、

受け継きで国のつかさの身となれば
忘るまじきは民の父母

と一首の歌に決心のほどを示し、上杉家の氏神春日明神に誓詞を奉納し、積年の旧弊の打破と財政建て直しのため大倹約令を出し、率先躬行し、あらゆる困難を排除して断行した。そして農村の振興に意を用い、「籍田の礼」を行って荒蕪地を開拓し、黒井堰、飯豊穴堰を築造して農地を拡張した。「樹芸役場」「縮布製造所」「製藍染物役場」「陶焼場」などを設置し、漆、桑、楮、青苧、紅花を植え、「養蚕手引」を分かち、米沢織りの基を作るなど種々の産業を開発し、国産を他領に販売するに不良品売り出しを取り締まって永く繁盛するように注意するなど、きめ細やかな施策をとった。凶歳に備えて、「備籾倉」を建設し、救荒植物の解説「かてもの」を配布した。また風俗を乱す者を取り締まり、教学を振興し、藩校興譲館、医学館好生堂を

創設して人材を育成するなど、百方苦心して藩政を安泰にした。天明五年、養父重定の心情を思い、三十五歳で重定の実子治広に家督を譲り、鷹山と号し、餐霞館に隠居した。隠退に当たり、義弟治広に「人君の心得三箇条」を伝授した。

一、国家ハ先祖より子孫へ伝候国家にして、我私すべき物にハ無之候

一、人民ハ国家に属したる人民にして我私すべき物にハ無之候

一、国家人民の為に立たる君にて、君の為に立たる国家人民には無之候

右三条御遺念有間敷候事

天明五巳年二月七日　治憲（花押）

治広殿　机前

世にこれを「伝国之辞」と言っている。治広と父重定は鷹山の後見を請い、鷹山も決心して政務の万般を聴いた。治広退隠の後、十二代斉定からも懇請されて、後見した。

天明七年八月実父秋月種美重病のため急ぎ出府した際、江戸城に呼ばれ、将軍家斉から国政の賞賛を受けた。それより名君鷹山の名が喧伝されることになった。文政五年三月十二日、米沢に没し上杉家廟所に葬られた。享年七十二歳。法名は元徳院殿聖翁文心大禅定門。

㉝ 大塚氏慎　一七二九（享保14年）生　一八〇七（文化4年）没

教育

享保十四年八月三十日、上江村黒谷に父氏頼、母坂田氏の長男として生まれる。七郎次と称し、精斎と号した。志を立てて宝暦七年十月一日、藩主種美に上書して大坂京都方面に遊学することを願い出て許され、久米訂斎、留守希斎に師事し、学ぶこと三年、同十年五月帰国し、種美、種茂、種徳、三代に仕えた。種美に従って江戸に出て、柴田剛四郎、多田蒙斎、宇井黙斎に学んだ。安永二年物頭に進み長柄組、次いで同五年鉄砲組を預かり更に勘定奉行となった。安永七年学校（明倫堂）師範に任ぜられ、同九年、学校師範兼勘定奉行に任ぜられた。天明元年四月、大坂留守居を命ぜられて登坂し、同四年十二月、隠退を願い出たが引き続き勤務を命ぜられ、多年の功績によって二十石加増、合わせて一三〇石となった。天明七年十一月、同九年七月、寛政三年七月、同四年九月としばしば隠退を願い出たが、そのつどいましばらく勤めるよう差し止められ、寛政五年九月一日六十五歳になって初めて引退を許された。藩主種徳は多年の精勤とその功績を賞し、羽織を贈り厚く労をねぎらった。

文化四年十二月二十八日病のため没した。享年八十歳。墓は安養寺墓地にある。妻は柴垣氏。一男四女があり、家

督は静氏が継ぎ、長女は早世し、次女は藩士岩村兼時に、三女は飫肥の門川杏林に、四女は内藤有隣に嫁した。

㉞ 大塚静氏　一七六一（宝暦11年）生　一八二五（文政8年）没

教育

宝暦十一年四月八日、上江村黒谷に父氏慎母柴垣氏の長男として生まれる。字は子倹、通称太一郎、観爛と号した。梅桜、拙斎、冬扇子、孝槃窩は別号である。生来虚弱な体質で母は百方手を尽くし成人して初めて壮健となった。安永六年十一月、藩主種茂は藩学明倫堂の文武の試験に臨み、静氏の論語の進講を聴き、非凡の才を奇とし、賞として上下を与え、学費を給して京師に遊学を命じた。翌七年三月、種茂は参勤の途次、伏見で宇井黙斎に静氏の教育をみずから委託した。後大坂に遊び御牧直斎、山口剛斎に業を受けた。天明三年三月江戸に出て世子種徳の師伝となり、幸田誠之、柳田義直、渋井太室、服部栗斎に学を正し、岡田寒泉、頼春水、尾藤二洲らの知遇を得た。寛政元年六月種徳の襲封に従って国に帰り、法令制度の更張に当たっては、観爛もその衝に当たった。

同四年江戸に祇役し、柴野栗山に謁した。この年幕府は栗斎のための麹町に講堂を開いたが、栗斎は観爛に大学を代講させている。翌五年五月帰国し同九月財津吉恵に代り明倫堂教授となり同七年十二月物頭に任じ、九年九月命を受けて、練兵法を更張した。以来藩主種徳に重用されて参勤の度ごとに江戸と国許の間を往復し、江戸にあっては世子種任の伝となり後宮の事を兼ね、帰国しては教授として後進の指導に当たった。享和三年一月、家老隈江藤太夫、奉行小田勘解由を輔佐して、福嶋に漂着した清国船の事を弁理し、長崎奉行へ引き渡しの指揮を取った。このとき、外国船漂着処分法数十件を長崎奉行所と協議して定めた。文化元年十二月、漂流外国船処分書、擬定漂流話一巻を藩府に納めた。文化五年に清国船が福嶋黒井浜に漂着した時も、家老手塚源太夫、奉行内田主水を輔佐し、翌六年一月長崎へ護送した。九月には総奉行に任ぜられ、教授を辞めてなお侍講を兼ねた。文化十三年五月学校中都合となり、文政元年二月には特に奉行の月番を免ぜられ学政を振興させた。同二年二月数年の功労を賞して別墅を賜り、同四年九月、老齢のため特命により隔日登城し、賞罰等の大事に参議した。これよりさき、しばしば引退を請うたが許されず、文政八年七月、引退を願って初めて許され、養老料若干を賜ったが、九月二十日病没した。享年六十五歳。二十二日秋月山安養寺墓地に葬った。

著書には『本藩実録七巻八冊』、『藩祖事略一巻』、本藩譜系一巻、『日本道学淵源録四巻』、『同続録五巻』、『同続録増補二巻』など現在に伝わっているもののほか多数の著書がある。

岩村氏を娶り、三男二女があった。長男は夭折し、次男寛氏が家を継いだ。

㉟ 大寺與惣右衛門　生年不祥

社　会　一六二八（寛永5年）没

平田村伊倉に生まれのち鴫野に住む、本姓は矢野といい、種長公の折、船手として仕える。敬神の念厚くそのためか海路に過ちが無かったという。比木大明神を尊崇し、廟前に松の木を植えたのが並木となって後世まであったという。また各地に植えたものが後世供養の松と称せられた。また国土安穏五穀豊饒の祈願のため、毎年十二月の吉日を選び、祭場を設け神木（神籬）をたて、天地の神霊を勧請し、夜を徹して三十三番の神楽を奏して祭った。これがいわゆる高鍋神楽の徹夜奉納の始りである。後に藩内安全祈願のため比木廟前で奉納されるようになったのは、寛永二十年十一月十八日であると『見聞年代記』は伝えており、これを『門徒神事』といったと『藩史一班』は記し、爾来参百年の恒例となった。現在は旧高鍋藩の郷社六社（比木・愛宕・八坂・三納代八幡・白鬚・平田の各神社）の大神事として、毎年旧暦十二月十一日に六社が交番で行なうことになっている。與惣右衛門はまた、鬼神に仕え禍福を予言してしばしば効験があったので、当時の人々は深い信頼と尊敬を払ったと伝えている。家庭的には恵まれず嫡子は早く世をさり、自らも寛永五年二月十六日没した。藩主はその死を悼み大宮大明神の号を贈り鴫野の墓の側に祠堂を建てさせ、祭祀を絶やさなかった。明治二年大矢野神社と改称した。

㊱ 荻原恕平　一八四九（嘉永2年）生

財　界　一九三五（昭和10年）没

父高鍋藩御典医荻原成章（石作・五代目）、母曽登（秋月種節の妹）の長男として嘉永二年三月六日筏に生まれる。水筑弦太郎、黒水長平、秋月左都夫、鈴木馬左也の「四哲」たちとはいとこになる。

荻原家は代々医家で、一門および近親者には医学を志す

者が多かったが、長男である恕平は医学に進まず漢学生として江戸の昌平黌に入学（堤長発と同期生）、しかし明治維新になって洋学と漢学の対立で一時休校となった時を契機に、学業半ばで帰郷し明治五年筏でしょう油醸造をはじめ実業人の道を歩むことになる。

西南の役には秋月種樹公の指示に従い、坂田参軍の意にそむいたので秋月種節らとともに捕えられ城内の籾倉に幽閉されたが薩軍の退去で助かった。

また十八年に欧州留学から帰国した三好退蔵のすすめで筏地区を中心にキリスト教が普及し、恕平は弟百々平らと高鍋に組合教会堂を創設した。場所は現在の聖母幼稚園の東南端である。

三十年十月一日、県内最初に高鍋に設立された日向銀行の頭取に就任し金融を通じてこの地方の商工業振興に貢献するとともに、以後経済界の重鎮・長老として明治・大正・昭和初期の長期にわたり地方経済の発展と後進の指導に力をつくした。

名門荻原家を継いだ恕平は、自らは医道には進まなかったが四男憲三を医業界に送り出している。

昭和十年五月四日病没、享年八十七歳、大龍寺墓地に葬られた。

㊲ 荻原百々平

医学　一八五六（安政3年）生　一九二八（昭和3年）没

父成章（石作）母曽登の二男として安政三年九月十日筏に生まれる。

早くから家業の医家に志し明治五年より十年まで鹿児島に出向いて鹿児島県病院や付属医学所で西洋医学を研修し、十年の西南の役では薩軍の医師として各地を転戦し、延岡で官軍に降伏したが、官軍はただちに百々平を医官に編入し宮崎県内で負傷者の救護に当たらせた。

西南の役終結後、薩軍の負傷者救済の目的で宮崎に開設された鹿児島県宮崎臨時支病院の医員として勤務したのち宮崎医学所教授となったが、十六年、宮崎県再置を契機に職を辞し、宮崎町旭通りに日向病院を設立、開業医としての道を歩むことになった。

百々平は宮崎の綾部豹蔵の娘チョと結婚し千平、二郎の二子をもうけた。もともと綾部・荻原両家のこれまでの関係は深く、荻原家二代（立安）、三代（立章）はともに綾部家からの養子である。

二十二年、宮崎県連合医会（宮崎県医師会の前身）の設

立に参画し、第二代ならびに第五代の会長をつとめ、医師として医療・医政に活躍するほか政治・経済の分野にも積極さを示し、町会議員や県会議員として町政・県政に参画するほか、三十年十月一日に設立された日向商業銀行の初代頭取として地方金融界のリーダーとなった。

読書を好み、宗教や歴史を深く勉強し、兄恕平とともに力を合わせて高鍋に最初の教会堂を建設している。

また、青年時代の石井十次にキリスト教と岡山医学校行きをすすめ、学資をだしてやるなど日本における孤児救済事業の開祖十次を啓発誘導した功績は大きい。

晩年は医業を長子の千平にゆずり、宮崎と高鍋を足場に悠々自適の生活を送った。

昭和三年病没（月日不祥）、享年七十三歳、大龍寺墓地に葬られた。

㊳ 小沢治三郎

軍人　一八八六（明治19年）生　一九六六（昭和41年）没

明治十九年十月二日父寅太郎、母ヤツの二男として、高鍋町六日町に生まれた。生来身体強健、性剛直正義の念が強かった。高鍋学校卒業、宮崎中学校四年生のとき、不良青年と橋橋付近で大立ち回りを演じた理由で退学処分となる。直ちに上京私立成城中学校入学、三十九年卒業に際し、第七高等学校と海軍兵学校合格の通知に接した。意を決し第三十七期生海軍兵学校に入学した。四十二年十一月卒業、海軍少尉候補生となり、練習艦宗谷乗組を命ぜられ軍人として第一歩を踏み出した。その後砲術学校普通科学生、海軍水雷学校普通科生として輝かしい街道一筋を歩いた。大正三年第一次世界大戦起こるや、日英同盟により、日本はドイツに宣戦を布告、小沢海軍中尉は第一艦隊主力艦比叡に乗り組み、南方洋上を行動中のドイツ東洋艦隊主力艦に戦闘を挑む、二十八歳の初陣であった。海軍大尉昇進、六年名門の妻を求めず、同郷森石蕗と結婚。水雷学校高等科学生、海軍大学校卒業、少佐昇進、駆逐艦竹艦長、その後各種艦長歴任、戦隊、艦隊の参謀、各駆逐

隊司令、戦隊司令官、連合艦隊参謀長兼第一艦隊参謀長となった。砲術に詳しく、特に水雷作戦に秀で、当時軍令部長の信任が厚かった。十四年第一航空戦隊司令官、旗艦赤城に乗艦、十五年海軍中将に累進、十六年海軍大学校長、十七年十一月第三南遣艦隊司令長官となり、マレー海域に進出、英国東洋艦隊の戦艦「プリンス・オブ・ウエールズ」および「レパルス」を撃沈し、陸軍山下兵団と相策応し、海陸協同作戦を展開し、よくその範を示した。更に印度洋機動作戦を実施し、第三艦隊第一機動艦隊司令長官となり、軍令部次長兼海軍大学校長となった。このころからしだいに日本海軍も不利な状況に追い込まれた。二十年五月海軍総司令長官兼連合艦隊司令長官、海上護衛司令長官に親補され最も重要な地位に立たされた。このとき海軍大将昇進の命を固辞した。八月十五日終戦の詔勅下り、終戦処理に従事し十月予備役となった。十一月従三位旭日大綬章を授けられた。

その後敗戦の責任を痛感し、戦死者への供養に身を捧げ、一方真実を伝えるため、防衛庁戦史室の事業に協力、四十年防衛庁顧問となり、三軍統一を進言した。彼の生涯は「無欲」の精神をもって軍人生活を貫いた。四十一年十一月九日、東京世田谷の自宅で病没した。享年八十一歳。鎌倉霊園に葬る。分骨し高鍋町元祇園墓地に埋葬、墓碑名大雄院殿浄誉治濤居士。

㊴ 押川定秋（おしかわさだあき）

政界　一八九〇（明治23年）生　一九五一（昭和26年）没

明治二十三年五月十七日父定澄、母ミエ（渡部氏）の三男として菖蒲池に生まれる。

明治大学法学部卒業、東京小石川で弁護士として活躍した。昭和三年小石川から東京府議選に出馬して当選（三十九歳）、七年二月民政党の井上準之助元蔵相の後援を得て郷里宮崎（全県一区）で衆院選に出馬したが途中で井上が兇弾（きょうだん）に倒れるなど不測の事態も生じて落選、以来二十二年四月国民協同党公認で当選するまで八回目にしてようやく初志を貫いた。当時、新聞各紙がその全国版に「七転び八起き」の好例として報道したので国中にその名を馳せたが二十四年一月の総選挙で落選（このとき都農町出身の渕通義当選）し雄図空しく二十六年六月東京で病没、享年六十二歳、小石川の護国寺に葬られたが近年、養嗣子定臣

（米国ワシントン在住）の手で米国の墓地に移された。しかし、分骨が父定澄の分骨とともに東京都狛江市の玉泉寺の押川家墓地に葬られていることが最近判明している。

定秋の葬儀には芦田均、楢橋渡など旧民政党系の大物代議士など多数参集してまれに見る盛儀であったという。

定秋が長年にわたる選挙戦を貫いた陰の功労者として妻の如水の内助があった事は見逃せないし、また、同じ地盤の高鍋から平島敏夫（政友会）が立候補した昭和七年二月の総選挙では旧児湯郡と福島町（現在の串間市）の票の争奪において二人は典型的なライバルであり、政友、民政の二大政党の激しい選挙の宮崎縮図版であった事や、演説では定秋が絶対優勢であった事など現在にも語り継がれている。

㊵ 押川如水

一八九二（明治25年）生
一九六六（昭和41年）没

芸術

如水は号、本名は雅、明治二十五年三月十八日福岡市博多の米問屋青柳清次郎の四女として生まれる。福岡女学校卒、幼時より琴、三味線を習いさらに華道の勉強につとめる。女学校卒業後上京して華道の教授となり弁護士押川定秋と結婚、のちに松風流家元となり日本華道連盟会長の要職もつとめた。

昭和二十三年、夫の郷里宮崎に華道連盟を創設し後輩の指導にあたりその後は実務を妹押川（本田）柳水にゆだねる。

如水はさらに国際活動にも力を注ぎ、昭和十三年には外務省の要請により文化使節として渡米し日本文化の宣伝普及につとめ、第二次大戦後は進駐軍婦女の生け花の指導にあたり日米親善に貢献、また、二十三年に再度渡米して指導普及につとめニューヨークをはじめ米国の主要都市に松風会支部を設立、その活躍はトロント（カナダ）まで及んだ。

また、その後は東南アジアや中国、台湾にも進出し各地

に支部を設けるなど活動の場を拡げた。

これらの功績により勲五等宝冠章を追贈されている。

そのほか、夫定秋の長年にわたる政治活動の陰の功労者としても有名。

四十一年六月十日、東京で病没、享年七十五歳、夫定秋と同じく現在は米国の墓地に眠る。

㊶ 押川柳水

芸術　一八九八（明治31年）生　一九八四（昭和59年）没

柳水は号、本名は本田力子、実姉如水（雅）と同じく福岡市博多の青柳清次郎の六女として明治三十一年四月七日生まれる。芸事に熱心な博多豪商の家に育ち幼時より琴、三味線を習いこれを生涯の趣味とする。

大正二年福岡技芸女学校卒業、六年、姉如水の華道松風流に入門、十年高鍋町出身の本田親雄と結婚し、二男四女の母となる。

十一年、松風流師範免許を取得し翌十二年夫とともに朝鮮に渡り各地で指導にあたった。

昭和十八年、高鍋町に帰り宮崎市と高鍋町を中心に指導、松風流の普及につとめ二十年に松風流宮崎支部を結成、初代支部長となる。

また、二十三年、宮崎県華道連盟（宮崎県華道協和会）の創立に力をつくし理事に就任、三十九年より五十年まで長期にわたり会長として会の発展に大きく貢献した。

五十三年、華道貢献者として県知事表彰をうけ、五十一年からは名誉会長として後進の指導にあたっていたが五十九年十二月二十二日、中鶴の自宅で病没、享年八十七歳、中鶴の墓地に葬られた。

㊷ 小田知之

教育　一七四〇（元文5年）生　一八〇三（享和3年）没

元文五年八月十四日、父は知光、母は坂田氏、その三男として生まれる。初め知時、後に知之に改め権之丞と称した。本姓は大蔵氏、父、知光は秋月種政の庶子で小田藤兵衛の養子となり、主計と称した。坂田貞左衛門の娘を娶り三男五女があり、長子知要が家を継いだが子が無く、弟知時が継ぎ、名を知之に改めた。

知之は安永十年内藤進とともに明倫堂師範に任ぜられ天明元年十二月二十七日、御使番に立身した。天明三年五月藩主種茂の帰城使者として江戸に上り、同五年十月二日、惣奉行となり、天明七年十二月三十日、家老となった。享和三年八月四日、高鍋新小路で没し、慈雲山大竜寺墓地に葬る。享年六十四歳。室は森幾右衛門の娘、三男あり、長男知周が家を継ぎ、次男長敬は黒水次右衛門の養子となり、三男知言は森氏を継いだ。

㊸ 柿原政一郎

一八八三（明治16年）生
一九六二（昭和37年）没

政界

明治十六年五月二十五日、高鍋町道具小路に父柿原正一、母キミの一人息子として生まれる。霧仙と号す。三十一年高鍋学校入学、第六高等学校（岡山）を経て、東京帝国大学哲学科に学び、四十年石井十次・大原孫三郎に師事し、労働問題、社会問題を実地に研究した。これが彼の人生を築く基礎となった。

四十二年石井十次の大阪総合社会事業の開設に参画した。大正三年以後中国民報社、四国民報社の両社長となり、次第に活躍舞台が広まり、九年三十七歳の若さをもって、衆議院議員に当選、郷土宮崎県発展のため、県外送電反対運動および県営電気創業に貢献した。

十三年から昭和七年ごろまでは、中国地方で活躍し、新聞報道、広島市宇品臨海広島土地株式会社経営、喜清会学園を創設した。十年からいよいよ郷土発展に尽力した。宮崎市長に就任早々天皇行幸に際し説明の任を果たした。県会議員当選、議長となり県発展策を図る。十二年高鍋地方民の要請に答え、多年にわたる念願であった、高鍋町・上江村合併を実現した功績はまことに大きい。高鍋町長在任四期にわたり、工場誘致では南九州化学（株）、宝酒造（株）の創業を、文教の町としては学校永久建築に着手し、町立図書館の創設、高鍋高校が本県初めての甲子園出場を記念して、町営球場を完成させた。福祉事業では県内最初に老人ホームを設立した。そのほか産業振興を呼びかけ、日向茶業の振興と製茶、販売を兼ね、九州輸出製茶（株）創業、養鶏を奨励し高鍋養鶏組合長となる。社会福祉面では茶臼原孤児院後見、石井記念友愛社、財団法人正幸会を創設、福祉と文化発展に貢献した。

日向文庫の石井十次伝を執筆刊行し、三十一年宮崎県文

化賞を受章し、全日本社会教育功労賞を受けた。後日従五位勲四等瑞宝章を授与された。三十五年四月三日高鍋町制六十周年記念式典に際し、高鍋町名誉町民に推戴された。

病を得て宮崎市広島通別宅で静養し、三十七年一月十四日永眠。享年八十歳であった。

葬儀は十七日高鍋東小学校で町葬が営まれ、生前最愛の地新富町湯風呂の先祖の墓地に葬る。

㊹ 勝浦鞆雄（かつうらともお）

教育　一八五〇（嘉永3年）生　一九二六（大正15年）没

嘉永三年一月二十八日、大坂に生まれる。父は清六敬明、母は小島ツマ子、幼名を清太郎といった。早くから句読・書冊に親しみ、長ずるに及び武技を習い、和漢の書を講習し、国学を学び鑑古堂と号した。たまたま高鍋藩士坂田諸潔ら若手諸藩士と親交あり、明治二年正月高鍋藩主秋月種殷参朝の途上、大坂藩邸で謁見し、即時召し抱えられ小給格に列し扶持米を給せられた。翌三年堺県史生を辞し、海路高鍋に着き、十二月九日学校助教、藩学改正の主任となり翌四年明倫堂教授に任ぜられ、神社のことを兼掌した、当時二十二歳。たまたま廃藩から諸制度の大変革あり。「童蒙須携」「連語篇」などの出版を文部省に願い出てこれを許された。六年九月十七日静岡県片岡喜将の長女ミフヂ子と結婚。師範学校建設に尽力学校長兼務となる。森有礼文部大臣となるに及び上京して東京師範学校幹事となり、二十三年四月東京府立尋常中学校校長となり鋭意改善、模範中学校とした。三十七年十月韓国皇帝の旨により、同国留学生四十八人の教育監督となり、四十二年四月には関東都督中学校長に任ぜられ、同年旅順中学校開校式を挙げ、翌四十三年旅順高等女学校を創立、大正七年勲四等、九年四月旅順工科学堂教授高等官二等に叙せられた。九年九月二十一日職を辞して帰朝した。その後特に高鍋中学校創立に当たっては、推されて学監となり、十二年二月西下して事に当たり、四月十六日開校式を挙げた。老齢をおして以後数回往復して校務に精励、校訓・校歌の制定、舞鶴会（ぶかくかい）の創始など中学校創立の基礎づくりを進め、みずから教壇に立って人間の生き方を教授した。十五年春から健康勝れず、十二月七日、七十七歳で没した。事上聞に達し、位一級を進め正五位に叙せられ、麻生本村町円沢寺に埋葬した。

㊺ 加藤二郎

芸術　一九一四（大正3年）生　一九九〇（平成2年）没

大正三年五月七日、山形県東根市東根温泉に生まれる。山形中学校を経て東京武蔵野音楽学校（現東京武蔵野音楽大学）師範科を卒業、昭和十四年四月、高鍋高等女学校に赴任。高鍋中学校・高鍋農学校も兼務。昭和二十三年四月、学制改革によって高鍋高等学校勤務となり、同都農校舎。高鍋農業高等学校を兼任、ひたすら音楽教育に尽瘁貢献した。

昭和十四年赴任以来、この地方の音楽文化の向上に努め、先ず童謡運動をおこし終戦前まで毎年夏季休暇、農繁休暇を利用して東児湯郡内の小学校、託児所等を巡回行脚し童謡、唱歌の指導にあたる。

昭和二十二年「たらちね会」をおこし、家庭婦人、とくに母親を中心に指導啓蒙にあたる。次いで、高鍋合唱団を組織し青年男女の音楽教養に寄与する。当時荒廃した戦後社会の混迷した世相のなか、精神的支柱を失っている老幼男女に音楽をとおして光明と希望を与えることを思料し、著名音楽家の公演が宮崎であるたびにあらゆる犠牲を払って高鍋に迎え、多くの人々を魅了させた。

世界的新進ピアニスト　ワルター・ハウチツピアノ演奏会五回　アメリカバリトン歌手マクヘンリー・ボートライト独唱会　フィリツピン文化使節ネナ・デル・ロザリオピアノ演奏会　ポール・オレフスキーチェロ演奏会など、国内にあっては、藤原義江、大谷冽子、四家文子、伊藤武雄、伊藤花子、有田愛子、三宅洋一郎、三宅春恵、舞踊家、高田せい子、石井みどりらの音楽家、舞踊家の公演に尽力し学校ならびに地域の音楽文化の向上に大きな業績を残した。

作曲家としても、高鍋高等学校校歌。高鍋農業高等学校寮歌。成人式の歌。高鍋町未亡人の歌。わが高鍋。高鍋音頭。交通安全子供行進曲。石井十次の歌など五百曲に及ぶ作曲を残している。

その他、レコードコンサート、ピアノ研究会、青年層の音楽教育指導にその活動は多方面にわたっていた。

昭和二十九年、県音楽文化協会から学校ならびに地域の音楽文化向上に寄与した功績により音楽文化賞をうけた。

平成二年十一月十二日逝く。七十六歳。蚊口浦円浄寺に葬る。

㊻ 金堀伸夫

芸術　一九〇八（明治41年）生　一九七〇（昭和45年）没

明治四十一年八月二十三日木城町出店に生まれる。

父柳一は木城町比木平島家、母エキは岩渕河辺家より出で金堀祐一の家を継ぐ。

柳一は宮崎師範学校を卒業して母校宮崎師範の教諭（植物学）後熊本県玉名中学等熊本県内の教諭を勤めた。

伸夫は宮崎中学校から熊本玉名中学校、熊本中学校を経て熊本の第五高等学校に進み、その頃から音楽に興味をもちピアノをよくし作曲に秀でた才能を現わした。

熊本医科大学在学中に第六師団軍歌（六師団進軍譜）第五高等学校寮歌、第七高等学校寮歌を作曲した。

大学卒業後医学博士の学位をとり、昭和十三年支那事変に応召、中支に派遣され軍医中尉として二十年まで中支各地を転戦し、駐屯の合間を見ては住民にピアノの指導をして音楽の普及につとめたという。

二十年、復員後間もなく高鍋町洗町に小児科内科医院を開業、後に後小路に新築して名医と称せられ、高鍋淮看護学校の創設に尽力し、高鍋東小学校校医を永年勤めた。

その間に高鍋町文化協会の発足を企画し、音楽コンサートを度々開催して音楽文化の向上につとめ、合唱団の組織を促し、また、請われて高鍋西小学校、高鍋西中学校、高鍋農学校、川南多賀小学校、木城小学校、中学校、石河内小学校、中学校、中之又小学校、中学校のほか県内外の校歌も作曲した。

また、木城町図書館に金堀文庫を寄贈した。（二六〇八冊）

三十一年度県音楽文化賞。社会教育普及の向上に尽くし功により文部大臣表彰を受け、勲五等瑞宝章を受けた。

高鍋東小学校父母の会に於いて講演中、脳卒中に倒れ、自宅に於いて加療中、四十五年七月十七日病没、享年六十三歳。木城町岩渕百合名墓地に葬る。

㊼ 萱嶋景矯

教育　一七七七（安永6年）生　一八四六（弘化3年）没

安永六年四月一日生。父は新五左衛門、母は内田氏。諱は景矯、保次と称し、後克巳に改めた。家は代々軍学家で、曽祖父市之丞、父新五左衛門は共に越後流の軍学者佐久間頼母に学んだ。克巳景矯もその家学を受け継ぐ秀でた軍学

者であった。多年八代藩主種徳の世子種任の伴読としてその誘掖に努め、種任は文化五年十月家督を継いだ。明倫堂教授千手廉斎は克巳の識見とその学殖を高く評価し、「存寄」（意見具申）をもって教授に推挙し、文化七年十一月二十四日、克巳は明倫堂教授に任命された。藩主種任の信任も厚く、翌八年六月には、藩主の帰城使者に選ばれて幕府に報告した。それより次第に累進して十四年十月には惣奉行に任ぜられた。藩主の参勤に従うことも多く、文政六年九月用人に任ぜられた。不肖をもって辞退を申し出たが許されず、かえって宮田に屋敷を与えられ忠勤を励まされた。それより後、用人より奉行兼任となり、また用人に転じ、さらに奉行となり、その間に学校中都合、内証方担当、唐船担当等を歴任した。天保六年六月には世子種殷付きの用人に任ぜられ、種殷に従ってしばしば江戸と国許の間を往復した。十三年から度々隠退を願い出たが、その都度慰留され、弘化三年四月初めて隠退を許された。同年十二月病のため没した。享年七十歳。

㊽ 萱嶋高

軍人　一八八九（明治22年）生　一九五六（昭和31年）没

明治二十二年四月十八日上江村新馬場に父三郎、母阿具利の長男として生まれる。父は営林署勤務のため、祖父母が養育に当たる。幼少から頭脳優れ学業成績は優秀で高鍋学校を卒業、県立宮崎中学校を経て、陸軍士官学校を卒業し、四十三年見習士官を命ぜられる。大正二年臨時駐韓軍旅団に入団、慶尚南道英州駐屯部隊に派遣され翌年帰隊、中尉昇進、やがて陸軍士官学校生徒隊付となる。

このときの地位は陸軍大学校えの登竜門とも言えるものであった。六年陸軍大学校学生を命ぜられた。九年大分県日出町の松本サツと結婚、卒業と同時に歩兵第四十五連隊（鹿児島）中隊長となる。十年陸軍士官学校教官に補せられ大尉昇進、第六師団参謀を勤む、少佐に昇進歩兵第七十四連隊の大隊長、昭和二年陸軍工兵学校教官となり、実戦的戦術には生徒を厳しく鍛えたという。

中佐昇進、北陸金沢第四師団付、十年大佐昇進、天津駐屯歩兵隊長となり大陸に赴く。十一年五月北支駐屯歩兵第二連隊長となり、北支事変ぼっ発後は、各地に転戦鎮圧に

努める。十二年陸軍士官学校教授部長、十三年陸軍少将となる。

第一〇六師団第一三六旅団長として、南九州の軍隊統帥の地位に立った。十六年陸軍中将に任ぜられ留守第六師団長、第四十六師団長に補せられ、十八年十月予備役仰せ付けられた。十一月第六師団長として召集を受け、前両師団を合わせ熊本師団長の任に就く。二十年四月召集解除となり、宮崎市長に就任した。終戦前後のいちばん困難な時期に復興対策に当たり、駐留軍来ると同時に市長を辞任、郷里高鍋に余生を送った。当時の家庭生活は厳しい食糧自給の時で、かつて経験しなかった農耕作業に従事しながら、舞鶴神社宮司となり、子女教育と郷土愛に燃え、日本の教育復興を念願し、二十七年高鍋町教育委員に出馬当選、三十一年まで、教育委員長を勤め、教育の刷新改善に尽力し、かたわら戦時中から短歌に志し、多くの佳作を残した。病を得て、三十一年二月二十八日死去、享年六十八歳、教育委員会葬を行い、谷坂の萱嶋家墓地に葬る。

㊾ 木代重行（きしろしげゆき）

福祉　一八八八（明治21年）生　一九八〇（昭和55年）没

明治二十一年七月三日、父與太郎、母セイの二男として小丸上に生まれる。

木代家は十三代つづいた旧家で高鍋藩の御典医だった。石井十次と縁戚関係にあり少年時代から十次の感化をうけた重行は、明治四十年同志社大学神学部に入学したが兄の急死により大阪高等工業機械科に転じ四十三年卒業、大阪発動機製造株式会社に入社し設計部長まで昇進した。

大正三年に退社独立して「きしろ発動機製作所」を設立、従業員千二百人余の企業にまで成長させた。

昭和六年、高鍋小学校に動力水揚機を寄贈し当時の学校運営と児童の衛生向上に貢献している。

十二年から終戦まで陸軍運輸部の要請で中国に渡り、発動機その他軍需品の生産・輸送に功績をあげた。

終戦後高鍋に帰り酪農を始めたが失敗し、先祖以来の縁のあった日向市の病院を買い入れ社団法人健康科学研究所を設立、病院経営に成功したが入院した老人患者の実情を見て老人の生活と幸せを守るための施設の必要性を痛感し

てその実現をはかった。

四十四年、神戸市灘区鶴甲に社会福祉法人六甲鶴寿園を設立し養護老人ホーム六甲台ビラ、四十五年有料老人ホーム翠光園、四十六年軽費老人ホーム長寿園、四十八年養護盲老人ホーム千山荘、五十三年高齢者向けマンション・プラザ翠光、五十四年特別養護老人ホーム・きしろ荘を引き続き設立、日本における老人施設の設立・運営の草分けとなりまたモデルともなっている。

五十五年二月九日病没、享年九十三歳、明石市人丸山月照寺に葬られた。功労により従五位勲四等瑞宝章を追贈されている。

重行の没後、事業はマサノ未亡人により運営されたが、三年五月十日に逝去、現在は長女田尻美和子とその夫知巳の両氏により運営されている。また高鍋出身で毎日放送の社長・会長だった坂田勝郎（故人）夫妻もこの施設の理事として長い間運営に協力していた。

重行のこの篤行は、石井十次の感化があったことは勿論ながら、長男（スキーで遭難死）二男（戦死）に対する供養の志の発露でもあったようだ。

日本でまだ高齢者対策が制度化されていない時代に卓越した先見性を発揮してその余力と余生を老人対策に傾注した功績は大きい。

⑤⓪ 清原真弓

一八三三（天保4年）生
一九〇七（明治40年）没

政界

高鍋藩第六代藩主種美時代永く家老職を務めた岡本八郎衛門の長男として石原に生まれたが、岡本家の本家である清原家を継いだ。初めは岡本恭平と称し慶応二年第十代藩主種殷に仕え家老職を奉じた。

江戸藩邸詰のころ藩主の世子種樹は三十五歳の若さで幕府より若年寄の職を命ぜられていた。これを辞職するのに苦慮の毎日であったが真弓をはじめ黒水長慥、坂田莠等の尽力によりついに辞職することができた。慶応三年十月江戸幕府第十五代将軍徳川慶喜により朝廷へ政権の返上があった。真弓は慶応四年正月京都より種樹の知らせを江戸藩邸に持っていった。その後暫くは行動を共にして種樹を補佐したが同年境県の大参事に任ぜられる。また、明治五年に設置された教部省に入り、社寺の廃立、神宮、僧侶の任命昇叙などの事務に従事する。ついで司法省に転じ判事、検事を歴任する。

晩年は大阪に於いて高津神社宮司を拝命し久しく神明に奉仕す。明治四十年二月十八日病をもって東京に没す。享年七十五歳。

㊿ 久保昌業

政界　一八六九（明治2年）生　一九六〇（昭和35年）没

明治二年五月五日、高鍋町後小路久保友衛、母三重の長男として生まれる。幼名篤十郎と称した。十五年高鍋学校および晩翠学舎に学び、十八年南方村（穂北役場）外三か村戸長役場用掛となり、二十年四月三財村戸長役場用掛に転勤。その間職務に専念努力し、事に当たるや疑問、不知の点あれば昼夜を問わず帰高してその都度先輩の教えを請い、直ちに処理し賞讃を受けた。二十二年町村制が実施されると、高鍋村役場書記となり、三十年児湯郡役所書記に任命され、郡内町村の指導事務を担当した。

三十二年六月高鍋村長に就任。財政改善に努力、三十四年二月七日高鍋町制を施行し、初代町長となる。四十四年県会議員に当選、議員十二年、大正四年町会議員当選以来、昭和十七年まで連続当選した。二十二年から三十年九月まで後小路区区長を勤めるなど、地方自治に尽力貢献した。特に高鍋町是策定は県内でも初めて発表され注目を集めた。三十一年地方自治功労者として藍綬褒章を授与された。

このほか実業経済界での活躍にも著しいものがある。大正八年高鍋製糸株式会社支配人、日向銀行員となり整理運営に当たった。選ばれて、十五年高鍋無尽株式会社専務取締役に就任し、これより本格的に敏腕をふるい、東児湯一円地域の金融界の黄金時代を築いた、社員八十余人、中小企業商店街の経営に寄与した。

事務所は現在の宮崎太陽銀行の所在地にあった。十六年太平洋戦争起こるや、金融界の組織変更で、宮崎無尽常務取締役、十九年辞任、宮崎無尽株式会社顧問となり、郷土の商工業の発展に貢献した。三十五年四月三日、高鍋町名誉町民に推挙される。三十五年八月三日齢九十二歳で病没した。八月五日町葬を行い、田の上墓地に葬る。

㊷ 黒木藤三

医学　一八九一（明治24年）生　一九四八（昭和23年）没

明治二十四年十二月二十九日、父藤七、母ミツの三男として、高鍋町六日町に生まれる。

高鍋学校を卒業後大阪簿記学校へ進む、その間歯科

医師への願望断ちがたく遂に東京に行き、神田駿ヶ台に開業中の榎本積一歯科医師に師事する。

榎本歯科医師は血脇守之助の高弟である。その血脇は日本歯科医師界の草分け的存在にて東京歯科医学専門学校の開祖である。この系列の中で歯科医師としての修業と研さんに努力したので大正二年、歯科医師国家検定試験に合格、当時の合格率は千人に対して三人の割合いであったという。

五年恩師榎本医師に別れをつげ、郷里高鍋に帰り旭通りに歯科医院を開業、七年医院を横町に移転するや、青年歯科医師は横町や東町は雨が降るたびに浸水し、交通麻痺の状態となるのを心配して、ついに埋立て造成工事に着手した。工事費のほとんどは自分の資産でまかない、また、日向銀行からも融資を受けた。十三年に舞鶴座も竣工し町民の演劇等鑑賞の場として貴重な存在となった。昭和初期の不況で経営が悪化した時は自ら経営者としてのりきる。

五年には市街地形成が完工し、横町、東町附近がうるおいはじめた、苦しい資金のやりくりであったが故に、そのよろこびはひとしおであった。

八年高鍋町議会議員となり二期八年町政に参加し、高鍋町と上江村合併の大業を議員のひとりとしてなしとげた。

本業の歯科医師と社会事業や議会等誠意の連日であるが故に議員を辞職したのは五十二歳であった。その後本業に余生をうちこんだが病魔の襲うところとなり二十三年十二月二十一日、五十八歳の生涯を高鍋町横町に終える。墓は元祇園墓地にある。

㊸ 黒水長慥（くろみず ちょうぞう）

一八二八（文政11年）生
一九一六（大正5年）没

政界

文政十一年九月十六日、父水筑長周（ながちか）、母大塚静氏の娘、その四男として生まれる。長兄種節（たねよ）は後秋月を名のり、秋月左都夫・鈴木馬左也の父である。長慥は通称を鷲郎（わしお）といったが明治三年から実名長慥を用いた。明倫堂に学び横尾敬、日高明実に師事し、しばしば藩主への御前講書を行って賞を受けている。天保十四年十六歳で用人黒水司馬太の養子となり、嘉永元年二十一歳のとき藩主種殷の近侍として江戸に出て種樹の経学・槍術の相手を勤めた。文久三年藩主が海岸防御の勅書を受けると兵制改革を担当し、細島、美々津、福嶋の砲台を建造した。慶応三年、幕府は世子種樹を強いて若年寄に任用しようとした。長慥

は天下の形勢日に迫る折、若年寄就任は断じて避けねばならないとし、兄秋月種節とともに、僚友である城勇雄、坂田莠と協力し、青年有志の田村増吉、鈴木来助、水筑弦太郎、三好退蔵、岩村兼善らとともに藩論の方向を定め、奔走して辞任の実現を見るに至った。辞任実現を見るまでに薩藩に依頼して種樹の江戸脱出を図ることがあった。そのとき、すなわち慶応三年十二月二十五日、たまたま幕軍の薩摩屋敷焼打事件があり、薩の副留守居脇田一郎が高鍋藩邸に保護を求めてきた。長慥は甥の水筑弦太郎と鈴木来助に指図してこれを京師に脱出させようとした。島津秋月両家が豊臣氏西征以来極めて親密な両敬の間柄であることと、幕府の高鍋藩に対する疑念の回避のための処置であった。不幸にして三名は駿河原駅で幕吏に捕われ、江戸伝馬町の獄に投ぜられたが、藩の責任を問われるには至らなかった。弦太郎は獄中で病没したが、ほかの二人は後日許された。

明治維新後、長慥は兵賦局知事兼内務総括となり、次いで明治二年三月十二日執政（家老）となり、三年三月大参事に任ぜられた。四年七月廃藩置県となり、大分県七等出仕、同県権参事に任ぜられた。七年十二月依願退官し、八年九月宮崎県第四大区区長、九年八月宮崎県を廃して鹿児島県に合併した後、十年一月願いにより区長を免ぜられた。この年西南戦争が起こり高鍋も大いに動揺した。長慥は空論を廃して実状視察の必要を論じ、同志の士と鹿児島の実況を視察し画策するところがあったが、実兄秋月種節らとともに薩軍のために幽閉された。いわゆる高鍋九烈士の領袖である。乱後、東京市ヶ谷の監獄につながれたが、前後の事情の疎通しないためで、直ちに放免され一時三好退蔵の自宅に寓居した。十二年七月士族の恒産恒心を保存する主旨で高鍋保存株式会社を設立し、推されて社長となった。また、高鍋養蚕社を興し、晩翠学舎設立のことに参与し、十六年七月第一回県会議員選挙に当選し、宮崎県再置に尽力して請願委員にあげられ、川越進らと上京して運動し、十六年再置を見るに至った。本県再置の当初県会副議長にあげられ、十七年児湯郡長に任ぜられ、二十三年に多年念願していた高鍋穂北間の里道を完成させ、二十五年非職を命ぜられた。その後二十六年四月高鍋製糖株式会社を設立して社長となった。また秋月家のことに尽瘁するなど公私のために貢献したが、大正三年一月桜島爆発のときに発病し、五年九月二十九日没し、大竜寺墓地に葬られた。享年八十九歳。

⑤④ 黒水長平（くろみずちょうへい）

産業　一八五二（嘉永5年）生　一九一五（大正4年）没

父は高鍋藩家老秋月種節、母は鈴木百助の長女久子の二男として嘉永五年三月二日筏小路に生まれ、黒水家の養子となる。

明治二年父祖の志を承け、心を殖産の道に傾け、桑園二反歩を栽培し、はじめて養蚕に着手し、同十一年大分県蚕業社についてその実際を調査研究した。

蚕業に於いて、経済の大部分を占むるのは桑葉であると着目し、桑園を増殖してその研究に力め、また蚕種を製造して成繭の良否を実践研究した。夕に先進地の養蚕書を読み朝に実践し業が着々と発展していった。

偶々（たまたま）士族授産金拝借の議起り平林忠恕、内野重孝等と百方手を尽し、明治十五年金一万円の恩借を得、これを元手に製糸場を創設、忠恕を頭取に推し共に心力を尽した。

また、十九年先進各地の養蚕を視察し更に三十二年島根県の風穴貯蔵による蚕種の製法を学び、大分県大船風穴貯蔵を委託し、遂に一般養蚕家に普及できるようになった。また、早くからキリスト教を信じ石井十次のよき協力者であった。

彼は心身を労し、誠心誠意、実に四十年一日の如く養蚕の振興に尽くした。

大正三年四月一日郡長より表彰を受く。

参議院議員であった平嶋敏夫は長年の思い出を次のように語っている。

長平さんは少しも身辺を飾らぬ、そして俗事に全く無頓着な、飄逸というか、超然というか、いわば悟り切ったといった風の人であった。臭味のないクリスチャンで養蚕の普及と指導に熱心であった。

また、大輪の朝顔の鉢作りの名人であったという側面もあり、この人こそ怒るということを知らない人という印象が残っており、何人にも親切で、いわゆる陰徳を積まれた方であり、人間として立派な人格者であった。と…。

大正四年八月十七日病没、享年六十四歳。墓地は大龍寺墓地で兄長男水筑弦太郎、弟三男秋月左都夫、四男鈴木馬左也の徳を称えた四哲碑が横筏父種節の旧邸趾に建っている。

㊺ 甲佐知定（こうさともさだ）

スポーツ

一八八七（明治20年）生
一九五四（昭和29年）没

柔道八段。明治二十年十二月五日、父、柴垣前定（第四代高鍋町長）母、イオの次男として筏に生まれる。柴垣清郎（第二代南九州化学株式会社社長）は長兄。故あって叔父の家甲佐家を継ぐ。

宮崎中学校卒業、柔道をもって身を立てる決意をして京都武徳会に入り、明治四十二年四月、東京高等師範学校（現筑波大学）体育科（柔道）に入学、卒業後、山口師範学校、天王寺師範学校に奉職。教育界を去って、大正四年、大阪府体育主事、昭和十二年、文部省督学官を経て、後に橿原神宮道場次長となる。

知定が、柔道家を志したのは家庭環境に宿命的な因縁があった。父が武門の後を継がせようと少年の頃に、城跡の武道館に連れだし関心をもたせるように努めた。ある夏、武道館で見た講道館安川二段の非凡の妙技に驚き、あの印象と感激が柔道への憧れを強めた。また、父が嘉納治五郎への敬愛の情と講道館柔道を近代的武道と高く評価していた信念など、父の感化と環境による影響が大きかった。（郷友会報四号「柔道の思い出」）

講道館の父嘉納治五郎を敬愛し、柔道の教育理念に則り教育実践を究め全力を傾注する。嘉納治五郎から天王寺師範学校在職中「学童の柔道」指導要目（試案）作成の委任をうけるが、当時文部省は「学童の柔道」を白眼視していたので実現を見るに至らなかった。

昭和十二年文部省に転任した頃、石黒事務次官が就任。奇縁と言うのか石黒事務次官は学童の柔道に深い関心をもっていた。偶然の事実が契機となった訳ではないが、石黒事務次官とは事務的な交渉が比較的多く、事務次官室の出入りも多かった。時に、日中事変の最中でもあったので、省内の動機は武道の奨励に傾き、新に武道審議会が設けられるなど、積極的な方針がとられ、到頭小学校武道指導要目の発令を見「学童の柔道」が実現した。

昭和二十九年十二月二十六日逝く、享年六十八歳。

この世を去るまで生涯を柔道に捧げ、なかでも「学童の柔道」に精魂を傾注したその功績は大きい。高鍋の柔道の歩みに直接かかわることはなかったが、町出身の柔道界の先達として記憶されるべき一人である。墓は安養地墓地にある。

⑤⑥ 神代勝文　一八六四（元治1年）生
政界　一九四四（昭和19年）没

元治元年十月二十九日、高鍋藩士神代準一の長男として高鍋村小丸に生まれる。

島田小学校を卒業し、晩翠学舎に漢学を修むること五年、明治二十四年十月東京新報に入社する。主として詩文作成の仕事をしていたが、二十六年四月高鍋村役場書記となる。二十八年高鍋小学校教員嘱託及び学校組合管理者になり、三十一年まで高鍋小学校充実発展のために努力した。

その年の三月高鍋村長に選出され、この時名を栄寿より勝文と改む、三十二年六月まで第四代村長を勤める、三十四歳の若さであった。

更に児湯郡役所に職を奉じ第一課長を命ぜられる、三十三年五月に辞職し、六月には宮崎中学校教諭心得に任ぜられ、三十七年五月には舎監心得も兼ねたが、三十九年関東州大連実業会書記長の職につき赴任、四十年一月大連衛生組合事務員となる。九月その職を辞して帰郷、十月には第百四十七銀行書記となり大正二年一月まで同行宮崎支店へ勤務する。

一月十七日高鍋町第五代町長に推薦され、十年二月まで二期八年町長の職をまっとうする。

町長在任中、高鍋中学校の設立、日豊本線の開通、武者小路新しき村の誘致など政治的手腕を発揮する。また、高鍋郷党協会の設立（大正八年）、高鍋東小学校歌作詩（大正十年）、晩翠学舎創立五十周年記念式の祭文起草（昭和三年）、長友勘右衛門君水路功績記念碑撰文（昭和八年）等を行い今も尚、卓越した墨跡をこの地に残す。

町長を勇退して二十有余年、常に高鍋町民の進むべき道を懇切に助言し続けたが昭和十九年十二月二十七日死去、享年八十一歳、田の上の墓地に眠る。

⑤⑦ 河内山清八　生年　没年　不詳
産業

高鍋藩家臣にして、土木技術に長じ、藩の灌漑用水や土木事業に功績を残す。

もと姓は恵利氏で、その祖恵利内蔵助は鎌倉幕府から筑前国秋月庄を賜り秋月姓の始祖といわれる秋月種雄（初代）の弟種久の末という。

内蔵助は高鍋藩の初代藩主となった秋月種長の重臣であっ

た。豊臣秀吉の九州入りに対し、種長が島津氏とともに抗戦することを決定したとき、内蔵助はこれに反対して自刃した。

河内山清八が、三代藩主秋月種信に知行百石で召し出されたのは天和二年とも、貞享元年ともいう。

高鍋藩は元禄期に水利開削、新田開発を進めたが、清八が直接あたった土木事業で判明しているのは元禄五年の谷坂提築造、光音寺板道作事、元禄七年の上江長宝寺堤築造などがある。

清八は元禄十五年願い出て恵利姓に復した。なお、恵利氏の分家の一つに水筑氏があり、幕末の家老水筑小一郎（秋月種節）もそのひとりである。

⑱ 税田牧之烝　一七九四（寛政6年）生

産業　一八四六（弘化3年）没

寛政六年小丸の屋敷に生まれる。幼くして学を好み藩校明倫堂に入って和漢の学を修め、二十二歳の時、明倫堂の助教となる。二十六歳にして高鍋藩第九代藩主種任の世子種殷の師伝（先生）となり、以後二十五年間中小姓を勤めた。文政三年二十七歳の時「日用算法記」を著わす。この書は藩校明倫堂の教科書として用いられた。

四十二歳の時、初めて「営葬講」を起す。営葬講とは葬儀を行ったり先祖のまつりを行う場合の費用を補うことを目的とした今でいう共済制度のようなものである。当時の組織は小丸下の士族講のうち五人組が二組十戸よりなり、各禄米のうち年々四斗（約六〇kg）を出してこれを貯蔵しておき葬送用両人分として米一石二斗（約八〇kg）銭六貫（一、五両）を残し講員の家族に死亡者があればこれを無利子で貸付ける。五年位の年賦にて返済する規定にして死亡者が七歳以下の場合はその半額等の規定が設けられていた。

その頃は徳川幕府の末期にあたり政治がゆきとどかずその上風俗も悪化し、なまける者が多く、上下ともに窮乏の極に達する状況であったので、牧之烝は憤然としてたちあがり、進んでこの講を創設したのである。

弘化三年十二月五日、五十三歳にて没す。墓は田の上墓地にある。

⑲ 財津吉恵　一七二八（享保13年）生

教育　一七九八（寛政10年）没

享保十三年三月十八日、上江村松本に生まれた。父は吉

当、母は森氏　藤原姓、十郎兵衛と称した。壮年にて京都に遊学し、久米訂斎に師事した。宝暦十二年二月十九日、廉の屋敷の講書師範を命ぜられ、藩臣の子弟の教育に当たった。明和二年七月二十一日、御居間で藩主種茂に経書を講じ、大目付以上に聴聞を命ぜられた。安永四年、吉恵は人材育成のため学校設立の必要を感じ、学友の内藤進とともに、廉の屋敷稽古所とは別に学校を設立することを進言した。しかし当時、連年大風雨、干害、虫害などの天災が引き続き財政困難の折であったため、やむなく見合わせとなった。同六年、特旨をもって新納代官に任命された吉恵は、六月十七日、農民たちの農耕馬の入手困難の実状を見て、その具体的な解決策のほか、農民に対する夫役の軽減策を具申し、銀と銭との交換率に関する提案を行い、同年七月には、風俗を正す上から、盆中に他領から村々に入り込む夜念仏を停止すべきことなどの建設的な建言を行った。

安永六年七月十八日、千手八太郎興欽の献言によって、新たに学校が建設されることになり、吉恵は学校諸支配頭取となり、千手八太郎、山内冨太郎とともに建設に参画した。学校は、翌七年二月二十四日完成し、明倫堂と名付けられ開講式が行われた。吉恵初め千手八太郎、山内冨太郎は師範（寛政五年以後は教授という）に任命され、大学校著察斎において「大学序」の初講義を行った。安永十年二月、ほかの任務に転じたが、天明二年七月再び師範に任ぜられ、それから寛政五年に隠退するまで前後十六年間、藩臣の子弟の教育に尽くした。寛政四年七月に高山彦九郎が高鍋に来た際には、吉恵のほうから彦九郎をその宿に訪ねたことが筑紫日記に記されている。寛政十年十月五日没し、大字上江松本坂の北の先塋に葬られた。享年七十一歳。

⑥0 財津吉一

教育　一八二三（文政6年）生　一八九一（明治24年）没

文政六年九月十日、父善輔、母泥谷氏の長男として上江村井上に生まれる。藤原姓、諱は吉一、字は子慎、十太郎と称し、掬翠と号した。明倫堂教授の吉恵は曽祖父であり、祖父貞一、父善輔も明倫堂教授であった。吉一は性強毅、学問を好み、天保十四年二十一歳で江戸に遊学し古賀侗庵に師事すること三年、更に弘化三年大阪の篠崎小竹に学び、藩命によって再び古賀氏に学び、嘉永元年帰郷して明倫堂助教になっている。古賀侗庵は漢学ばかり

でなく洋学にも通じた視野の広い学者で、その声望は一世を風靡したという。侗庵門の横尾敬に次いで新学風を明倫堂に持ち帰ったのであった。また聡明な公子政太郎種樹の伴読となり、心を傾けてその輔導に当たり師友を都下に選んで推薦した。佐藤一斎、藤森弘庵（天山）、安井息軒、塩谷宕陰、渡辺魯輔、山井璞甫は皆吉一の推輓するところであった。城勲は「掬翠財津先生小伝」に、「種樹の今日に至るはその聡明によるといえども薫陶の功も亦誣ふべからざるなり」と吉一の功績を評価している。安政四年特命によって家老手塚邦之丞を都合（長官）とし、惣奉行鈴木百助、大坪勝太郎、勘定奉行城勇雄、それに参加して藩財政の再建を図ることになった。「竹窓年譜」によれば財政通の吉一最も功ありという。当時内外極めて多事、藩の負債は四万両の巨額に達していた。家老手塚、惣奉行鈴木に従って上坂し交渉の矢面に立って奔走し、返還の道を講じ、殖産節約ようやくその諸に就くを得た（第四編六章第一節）。文久三年、種樹の世子問題についても城勇雄と協力し、奔走努力してようやくその実現を見るに至ったが、重病に伏す父を振り捨てて江戸に急行し、事成って父の墓前にぬかずいたのである。吉一は累進して勘定奉行となり、慶応二年一月明倫堂教授を兼任した。同三年三月江戸に祗役して教授を解かれ、明治元年七月帰藩して教授に再任された。翌二年三月惣奉行に昇進し藩政に参与し、居を黒谷に移した。同年九月公選によって少参事に選任された。廃藩後、宮崎県出仕に請われたが就任せず、高鍋で商社長となった。銃器弾薬および糧食を斡旋するところが多かった。西郷隆盛の可愛嶽突出後は隆盛とともに鹿児島に入り、城山陥るに及び国事犯として東京市ヶ谷の獄に投ぜられた。しかし同十三年一月特赦により帰国を許された。獄中文筆に親しみ「鉄窓吟稿」を書いた。ほかに詩文集「掬翠先生遺稿」があり、論説十七編、詩六十六編が収録されている。明治二十四年十二月二日、病により没した。松本坂北の墓地に葬る。享年六十九歳。

⑥1 斎藤角太郎　一八七四（明治7年）生　一九三一（昭和6年）没

教育

明治七年六月二十九日、児湯郡都於郡村（現在西都市）に父荒木周平と、母ムメの三男として生まれる。七歳のとき同村、斎藤伊平次の養子となった。広瀬高

等小学校から熊本第五高等中学校予科に進んだが、期するところあって退学し明治二十六年札幌農学校予科に入学した。三十二年七月同校本科を卒業。秋田県平鹿郡農事試験場技師、同試験場長を歴任し手腕をふるった。三十六年高鍋町に郡立農業学校が設立され、迎えられて同校の初代校長に就任した。時に二十八歳であった。

高鍋藩校明倫堂の跡に設立されていた、高鍋学校に代わって同じ敷地内に建てられた農業学校とあって、地域住民の期待は大きく、これを双肩に担って新しい学校づくりが始まった。明倫堂以来の人材養成の伝統を踏まえ、国民教育の本旨に即し、斎藤校長の郷土愛と勤労開拓の精神、質実剛健と報恩礼節などを織り交ぜながら、常に寛厳の配分よく学校経営は充実の一路をたどった。大正七年郡立農業学校は宮崎県立高鍋農学校となったが、引き続き校長を勤め十五年三月十七日退職まで実に二十三年終始一貫変わるところがなかった。その間校舎、寄宿舎、実習棟、農場、畜舎、学校林、運動場、武道場、教材、教具の整備はもとより、教師陣容の充実は年を追うて、学校の声価を高からしめ、県内はもちろん県外から校風を慕って集まる者多く、特に児湯地区は斎藤校長のもとに子弟を学ばせることを誇りとし、少年たちは同校入学にあこがれを持つ風潮も生まれた。斎藤校長は栄転の話にも耳を貸さず、農学校の経営に全力を傾けた。教えを受けた人々は、その厳しい教育の姿を「斎角精神」と呼んで敬慕してやまない。赤誠剛毅の性格のうえに進取の気性に富み、卒業生の就職の世話など私費を惜しまず活動した。こうして築かれた校風はその後県立高鍋農業高校に受け継がれ、更に今日の自営者養成農業高校に続いている。

昭和六年五月二十四日、高鍋町にて死去、二十七日自宅を出て葬儀場の高鍋農校運動場に向かった柩には、在校生はもとより卒業生ほか町内外会葬者の長い列が続き、この温容と厳格を兼ね備えた偉大な教育者の死を弔った。享年五十八歳、生前従五位勲五等に叙され瑞宝章を受けていた。墓地は高鍋町高月の安養寺墓地にある。昭和十三年十一月、高鍋農高同窓会は同校創立三十周年に当たり斎藤角太郎校長の胸像を校庭に建設した。

⑥2 坂田稲太郎

一八二六（文政9年）生
一八八八（明治21年）没

産業

文政九年十月五日、高鍋藩上江平原の藩士坂田伊喜治の長男に生まれる。名は師正、通称稲太郎。坂田家は代々秋月家に仕えた古い名門で、藩公の信任厚く剣術、柔術の家

柄で山奉行を兼ねた。生来清廉潔白、幼少のころから卓越した才能とおう盛な気概を持っていた。藩校明倫堂に学び、弘化三年藩主種殷の供をして、しばしば江戸と高鍋との間を往復した。その間に書方見習い、供目付を仰せ付けられた。向学心に燃え余暇を利用して、雲弘流剣術、長沼流砲術（西洋砲術）および小銃操練など高度の免許を取得した。また数多くの著名な人物に接して教えを請い、識見を高め、技能の修得に励み、後に兵法及び西洋砲術の師範となる。教を請う者多くその指導に当たっては忍耐強く、一心不乱、昼夜をいとわず、私財を投じ夜は篝火（かがりび）をたき、寝食を忘れ、夜半に及んだという。

平常隊伍教練に臨んでは、号令は明朗、隊士の挙動は活気あふれ、地を踏む足音は遠く響き渡り、観る者はただ巧妙と称し拍手称賛した。

後年高鍋藩が維新の東征に際し、多くの精鋭を北越の戦地に送り、顕著な功績を現したのは、稲太郎の指導によるところが大きい。なお藩政末期山奉行を兼ね山林制度を整理し椎木屯長となった。

また細島、福嶋の砲台築造の責任者として、藩公よりたびたびその功労を賞せられた。明治三年兵賦局の助教を命ぜられ、砲術師より、製薬長官を命ぜられた。八年九月第四大区五小区持田、平田戸長を命ぜられた。

明治十年の役起こるや薩軍のため無理に大砲火薬製造に従事させられたが、後許されて無罪となった。十九年ごろから中風症を病み、二十一年十月二十六日没した。享年六十三歳、谷坂墓地に葬る。三十三年十二月黒水長慥と、武藤東四郎発起となって門下生二十余人とともに墓石を谷坂に立て、盛大な除幕式を挙行した。

また昭和十七年一月吉日平原区住民ならびに有志によって「坂田稲太郎翁記念碑」が、平原の金比羅山中腹に建立された。碑銘は秋月種英の筆である。

稲太郎は山奉行時代、平原地区民に谷坂、金比羅山一帯の造林および管理に当たらせた。そのおかげで住民は日常生活の炊事用薪炭を不自由なく使用することができるようになった。その後樹木を伐採し、消防機購入費に充て消防活動に貢献した。現在は平原地区の貴重な共有財産として管理し、利用されている。

⑥③ 坂田勝郎

一九〇四（明治37年）生
一九九〇（平成2年）没

マスコミ

明治三十七年十月一日、新小路の坂田千束の長男として、日向市細島町の母うらの実家で生まれる。高鍋尋常高等小学校卒業、宮崎師範を病気のため中退、その後第五高等学校を経て昭和七年京都帝国大学法学部を卒業、当時マルクス主義の風潮が高まるなかで、それに同調し得ずペンをもって社会の不正に挑もうとして毎日新聞大阪本社に入社したという。社会部教育担当記者として七年間にわたり関係機関と読者を結んだ。十四年バンコック特派員として日タイ親善に寄与、十九年広島支局長、二十年八月一日大阪本社地方部副部長へ転勤後の六日広島は原爆により被災、その二日後広島に入ってその惨状を読者に伝えた。二十九年西部本社編集局長、三十三年紙面の最高責任者たる本社編集主幹、次いで三十六年大阪本社代表となり新聞社の各種事業に尽力した、その一つに交通事故ゼロ運動がある。

また、放送事業では、三十年RKB・毎日放送（福岡）取締役に就任から活躍を始め、宮崎放送取締役を兼任し、四十年毎日放送副社長、五十二年社長、五十五年会長となった。また日本民間放送連盟理事、同放送委員長となり、民間放送事業の発展と番組向上に寄与した。さらに、日本ヘレンケラー財団理事、高鍋町出身の木代重行創設の老人福祉施設六甲鶴寿園の理事に夫妻で就任するなど、社会福祉事業にも熱意を傾けた。『自分の生き方の指針としては「流水先を競わず」と坦道を踏み締めながら、ゆっくり確実に人生を歩くよう心掛けてきた。困難に当たっても「失意泰然」であることに努力した』と述懐している。

昭和五十年勲二等瑞宝章受章、平成二年一月十六日、入院先の吹田市国立循環器病センターで肺炎のため逝去。享年八十七歳。従四位に叙せられた。

⑥④ 坂田莠

一八三〇（天保1年）生
一八九一（明治24年）没

政界

天保元年七月十七日、父は諸亮、母は田村雄右衛門の娘数子の独り子として生まれた。五歳のとき父を失い、母は実家に帰り、父の末弟盛太夫諸正が家を承け、莠はその嗣子として養育され、後、家を継いだ。素行はその号である。清太夫諸安は曽祖父、堤長発は母数子が鈴木百助の後妻と

なって生んだ異父弟の助作で堤家を継いだ。

莠は早く明倫堂で日高耳水に学び、嘉永二年十二月一日、明倫堂教授仮役、三年十月十八日、助教本役となった。五年大坂に遊学して藤沢東畝の門に学ぶこと三年、病を得て帰郷し、安政六年再び江戸に出て藤森天山に師事し、川田剛、小野湖山、依田百川、小崎利準、股野琢らと親しみ、活眼して帰国し、尊王を唱え大いに藩中の士気を振作した。物頭となり兵賦方専務となり、兵制の改革を提唱した。文久二年特命をもって支封木脇分知の家政を総裁し、その処置が厳明で君臣ともに引き締まったという。八月細島砲台築造の功により賞を受けた。慶応二年一月周礼の講書を命ぜられ、高鍋屯長を兼任し、十二月には大坂留守居兼探索方となった。慶応三年六月世子種樹の若年寄固辞問題が起こったため、京師江戸間に奔走して百方周旋し、ようやく落着し種樹は新政府に入り参与となった。明治元年三月、京都乾門警衛の総長となり、同年参政に昇進して十人扶持を給せられた。四月二十八日、徴士となって内国事務局権判事、閏四月二十二日権弁官事となり、五月二十四日、下局議長となった。

この年奥羽越討伐に高鍋藩兵が参戦し、米沢藩の帰順説得に使節を派遣するなど皆その周旋によるという。

十一月八日、徴士および権弁官事を免ぜられ、精勤を賞し羽二重一匹を下賜されている。官をやめるに至った事情は、一説に、薩長閥の一部に彼の公正な議論と痛烈な批判が恐れられ、讒に遭ったと伝えられる。

この年東京に出て十二月、藩の公議人となり、集議院に入って幹事に補せられた。明治二年藩の職制改革があり、十一月二十五日権大参事となったが、病に倒れ大坂で療養を続けた。四年十一月新川県権参事に任ぜられたが、病のためまだ任に就かないうちに免官となった。八年九月、都農神社宮司に任じ権大講義を兼ね、宮崎県神道事務局長となった。十年西南戦争がぼっ発すると、莠の動向の影響の大きいのを懸念した大久保内務卿は秋月種樹に旨を述べてこれを諭さしめ、莠はみずから神官に素しては神官を行うとし、薩軍にあえて侵させなかった。官軍進攻に当たっては、百方尽力して兵糧を捜索して官軍に供給し、征伐第四旅団長から謝状と慰労金を贈られている。乱後、神道事務局から乱中の動静について問うてきたので、顛末を叙して答えた。旧藩主種樹は、これを「素行紀事」と題し三条実美に呈覧した。三条公は、「莠の志操行為終始一徹感賞すべし」と賛辞を呈したという。十二月十二月大和神社宮司、十四年十二月大神神社宮司、十六年司法省の法律学校、後元老院に勤め、二十四年三月二十二日、親戚の坂田明（諸潔の長男）を訪問中に発病し、三十日没した。享年六十二

歳。東京麻布光林寺墓地に葬ったが、遺髪は高鍋大竜寺の坂田家の墓に、その室ツヤとともに合葬されている。

⑥⑤ 坂田春男（さかたはるお）

医学　一八九三（明治26年）生　一九七三（昭和48年）没

医学博士。明治二十六年一月九日、父、孫四郎、母、美津の長男として順礼堂（道具小路西）に生まれる。

坂田家は、高鍋藩秋月家の分家、第七代種茂の弟種懐（たねやす）（新小路秋月家の祖）のながれをくみ藩の御典医という家柄である。

高鍋小学校・宮崎中学校を経て東京慈恵会医院医学専門学校（現東京慈恵医大）卒業、大正十年四月、東京市養育院医務課に籍をおき、東京帝国大学医学部内科教室介補として確居龍太郎教授に師事。十三年十一月、大阪医科大学（現大阪帝国大学医学部）生化学教室に入り古武弥太郎教授に師事、昭和二年四月、大阪医科大学専攻生に編入、六年十一月十八日、大阪帝国大学医学部より医学博士の学位を授与、主論文〝グロクローワの起源について〟九年十月、千代田生命保険相互会社京城支社医長、十四年十月、東京で独立開業、十八年五月、大阪府南泉医療購売利用組合聯合会（れんごう）横山病院長、十九年五月、大阪帝国大学医学部附属病院を医員、二十年五月、和歌山厚生病院長、二十一年十一月、帰郷、二十二年七月、自宅開業。つねに郷土を思う心あつく、帰郷するや戦災で荒廃した郷土高鍋の復興に力を注ぎ、二十三年二月、公安委員長、高鍋町警察署（自治体警察）の設置に伴う公安委員会の設置・運営に尽瘁（じんすい）。同年五月子弟の育成に心を用い、P・T・A（父母と先生の会）を結成。

高鍋高等学校PTA会長、学校環境の整備と内容の充実に尽力、三十二年八月、県人事委員として二期六年間県行政に貢献、ほかに選挙管理委員、医師会、高鍋郷友会役員など多くの役職につき、医学界はもちろん地方自治、地方文化の発展振興に寄与した功績は大きい。

昭和四十年十一月、七十二歳の高齢にもかかわらず若者以上の情熱を燃やし辺地医療推進のため東臼杵郡南郷村渡川診療所長に就任。辺地の人々の心の支えにと日夜献身的な診療にあたり地元民から〝救世主〟〝医療の父〟と慕われる。

四十二年十一月一日、辺地医療と健康増進の功績により

宮崎日日新聞社社会賞をうけた。

四十四年十一月、南郷村渡川診療所長を辞任して、高鍋に帰り余生をおくる。四十八年十一月九日自宅で逝く。享年八十一歳。元祇園の先塋に葬る。

⑥⑥ 坂田諸安

教育　一七三八（元文3年）生
一八二〇（文政3年）没

元文三年八月四日、父は実陳、母は小田氏、その長男として生まれる。幼名は喜太郎、後宇平次、更に清太夫と称した。芝山はその号である。坂田家は中原姓、その祖先の官師という者が秋月氏の始祖阿知使主に従って帰化したという。また、梁の司馬達の末裔で、達は帰化して近江国坂田郡に住み、子孫が坂田を姓としたともいう（城勇雄説）。以来血統連綿とした旧族である。清太夫諸安は少時大坂に遊学して留守希斎、宇井黙斎に師事し、帰国の後、種美、種茂、種徳、種任の四代に仕えた。早く福嶋郡代となり、次いで勘定奉行となったが、安永十年勘定奉行を免ぜられて明倫堂師範となり、天明二年師範を免ぜられ、更に三年師範再勤、四年福嶋郡代となった。その後、しばしば祇役して江戸と国許の間を往復し、漸次累進して藩政に参与し、寛政元年奉行となった。三年十月には家老小田権之丞とともに福嶋を巡見し、九年十月十二日用人に昇進し、翌年は藩主参勤の責任者となった。寛政十一年十月十日、多年の功績により牛牧に下屋敷を支給され、また特命によって二十石を加増され一四五石となった。享和元年七月以来老齢のゆえをもってしばしば致任を願い出たが許されず、文化五年一月八日年七十一歳で初めて隠居を許され、養老料一生二人扶持を賜った。それまで家老以外で隠居扶持を支給された例はなく、清太夫だけの特恩であった。清太夫は早く妻を喪い、一族の者は再婚を勧めたが、結婚は嗣子をもうけるためであり、自分は既に嗣子がいるので後妻を迎える必要はないといい、江戸祇役の際も幼児三人を連れて行った。天資明敏、人に接して温和であるがみずから律するに厳しく、人々に愛重せられた。世務に練達し、言葉遣いや動作に品位があり、輔佐に法があり、近世士太夫の模範であった。文政三年九月三十日病没、享年八十三歳。墓は大竜寺墓地に在る。

⑥⑦ 佐久間頼母（さくまたのも）

産業　　生年・没年　不詳

越後流の兵法学者。資料がなく詳しい経歴は知られていない。越後流は上杉謙信を流祖と仰ぎ、謙信流とも呼ばれ、この兵学をまとめ大成したのは越後の人沢崎主水景尚で承応元年江戸に出て大いに名をあげ門人も多かった。主水の高弟の一人に佐久間景忠の名が見えるが、頼母との関係は明らかでない。

佐久間頼母は江戸に門戸を構え、越後流の兵学者としてその名を知られていた。当時高鍋藩は三代種信が藩主で、上方下方騒動（うえがたしたがた）のような不祥事によって人材の減少を招き、新しい人物を登用して藩政の刷新を図っているときであった。頼母はこうした時機に高鍋藩に召し抱えられた一人で、本藩実録貞享三年四月二日の記事に、吉田寺頼母を二百石で召し出したとある。吉田寺頼母は佐久間頼母のことであり、佐久間家（藩主種信の五男勝茲が養子となった安房守勝豊の家）に遠慮して吉田寺と称したという。頼母が江戸から高鍋へ下ったのは四代種政のときで、元禄六年五月であった。種政は頼母を伴って帰国、宮田長屋に住ませ、兵学を講じさせた。本藩実録には吉田寺頼母が佐久間融閑斎と称し、軍学の師で高鍋藩の北越兵学がこれから始まったことを記している。

頼母はこのとき以降、日を決めて城内で兵法を講じ、諸士にも聴講を許された。頼母が高鍋に在住した期間は正確には分かっていない。元禄十五年八月、頼母は家族を高鍋へ引っ越させる見込みがないため、辞任を申し出たが、種政はその人物を惜しんで許さず、江戸行きは折々の自由とし、引き続き藩の軍師とし、改めて二十人扶持を与えて優遇した。右の事実から察すると頼母の高鍋在住は約十年ないしそれ以上になりそうだが、藩史話に安田尚義も記すように余り永くはとどまらなかったようである。

頼母の兵学教授以外の功績として今日に伝えられているものに、佐久間土手の築造工事がある。小丸川は毎年台風の襲来ごとに氾濫（はんらん）し、田畑や住宅を浸した。そのため馬場原、平原から塩田川一帯が湖水のようになった。この災害を防止することは当時の懸案であった。たまたまその対策に従事したのが頼母である。小丸川洪水の実情を子細に調べ、兵学者の立場から考え出したのが平原から畑田に及ぶ水防土手の築造であった。今日「佐久間土手」の名とともに往時の優れた着想を物語り、小字に「水除」の名も残っている。後に堤防の上に櫨（はぜ）の木を植え、実を蝋（ろう）の製造に使用したが、その何本かは終戦後まで残っていた。

頼母の高鍋退去後のこと、没年ならびに墓の所在など残念ながら知られていない。

⑥⑧ 柴垣前定

政界　一八五二（嘉永5年）生　一九二四（大正13年）没

父斗喜次、母美賀の長男として嘉永五年七月二十五日筏に生まれる。六代藩主種美の母は柴垣氏の出身、これを縁として柴垣氏は京都から高鍋に移った。

幼名は儀一郎、九歳のとき父が死去し家督を継いだ。慶応元年の人給帳には、百四十石、柴垣儀一郎（十四歳）幼少ニ付三歩通被召上とある。

明治七年、二十三歳で田村義勝の長女イオと結婚、清郎、知定（甲佐）、峻通（神代）及びエイ（橋本）の四子をもうけた。

八年、高鍋学校の教師となったが十年二月西南の役では官軍につき、秋月種節らとともに城内に幽閉された。（九烈士の一人）病臥した種節の看病のため毎晩天井の梁を伝って病室に通ったという逸話が残っている。なお、筏の柴垣邸は薩軍が退去するとき放火され焼失した。

十一年、教育界に戻り千葉師範、同女子師範の監事となったが十三年から二十六年までは陸軍省勤務に転じた。二十六年、宮崎に帰り裁判所書記として宮崎、延岡、飫肥の各区裁判所の勤務を経て高鍋に戻り、四十三年高鍋町助役、四十四年町長に就任したが病気のため大正元年十二月退任した。その後は秋月家家令となり十二年まで主家のため力をつくした。

町長在任時に財部叶高鍋小学校長の提言をうけ実科高等女学校の併設を文部省に申請、当時、県内唯一の実科高等女学校が四十五年三月十八日開校した。女子中等教育につくした前定の功績は大きい。

十三年七月十八日、大阪の長男清郎宅で病没、享年七十三歳、龍雲寺の柴垣家墓地に葬られた。

⑥⑨ 柴垣清郎

財界　一八八四（明治17年）生　一九六二（昭和37年）没

父前定、母イオ（田村義勝の長女）の長男として明治十七年五月十四日に生まれる。

早くから海外雄飛を志し、宮崎中学校を卒業した翌明治四十年米国に渡りワシントン州タコマ市のホイットウォー

ス大学理科入学、苦学力行しながら四十五年に卒業、シアトル市で雑貨輸入業やメリヤス靴下製造業に従事。また日本人会長などつとめたが、第一次世界大戦のぼっ発による材料暴騰で休業、その後、苦難の道を歩む。

高鍋の柴垣家では清郎のために日本に新会社を設立する事を条件にして大正九年使者を渡米させ帰国をうながした。この新会社設立については、当時住友の総理事だった鈴木馬左也（筏の出身）の配慮と協力があったと云われる。

清郎は翌十年二月日本に帰り、大阪市市岡町に株式会社エンパイヤランドリーを創立して社長に就任、以来東の白洋舎とともにクリーニング業界の指導的先駆者となって業界の発展に貢献するとともに戦中戦後の業界統合再編などに存分の力をふるった。

また、戦後二十三年には請われて野村貿易株式会社の取締役に就任し、特に米軍当局との渉外活動を通じて会社および業界に貢献している。

さらに、南九州化学工業株式会社の初代社長吉田貞吉の急死のあとをうけて、学友柿原政一郎（当時高鍋町長）の要請により第二代社長として二十九年十一月三十日に就任、三十一年六月二十日に退任するまで大阪と高鍋の間の往復が続いた。

三十年五月、大阪府知事より産業功労者として表彰をうけ、翌三十一年五月に黄綬褒章をうけている。

三十七年十一月十日大阪で病没、享年七十九歳、功労により従六位勲六等瑞宝章が追贈され、龍雲寺の柴垣家墓地に葬られた。

なお、クリーニング業界では、清郎の遺徳を讃えるため全国同業有志や篤志家の寄金により、四十五年十一月に記念事業として清郎の頌徳胸像を大阪市内に建立している。

⑦⓪ 城　勇雄

教育　一八二八（文政11年）生　一九〇〇（明治33年）没

文政十一年七月五日、高鍋新小路に父志津馬景正、母浪子（内藤有隣の二女）の長男に生まれる。通称勇雄、詩文には勲と署名した。字は子潜、号を竹窓または天則廃人といった。諱は重淵という。藩校明倫堂に入り横尾敬、日高耳水に学び、十九歳で助教になった。儒学のほか兵学、槍術にも優れ横笛をよくした。

二十四歳、藩命を受けて江戸に出、古賀謹堂の門に学び、

佐藤一斎、安積良斎、羽倉簡堂、安井息軒、塩谷宕陰と交わり学業を深めた。在塾二年、その間森盈之進とともに寄宿舎設立の要を鈴木百助に建議、後に明倫堂に切偲楼が実現した。

嘉永六年、足疾のため帰郷、再び明倫堂助教となり、寄宿寮の都講を兼ね、次いで目代（大目付に次ぐ要職）に任ぜられた。安政四年三十歳で物頭格の勘定奉行に補せられ、三十四歳で物頭使番に進んだ。

文久三年明倫堂教授にあげられ、刑律方御系図調、家中家筋調を命ぜられ、藩政改革について「藩官擬典」を作った。翌元治元年には総奉行兼寺社奉行となった。慶応二年には世子秋月種樹の若年寄就任の中止をめぐって水筑小一郎とともに奔走し、就任辞退の実現に成功した。明治二年家老となり職制改革に当たる。更に藩執政となり神祇局知事を兼務した。版籍返還後は大参事に選ばれた。

五年美々津県南部副長、翌年から宮崎県第四大区（児湯郡東部）受持学区取締に補せられ、准一等訓導となった。七年第四大区区長に就任、引き続き学区取締を兼ね、民政と教育のうえに業績をあげた。

西南戦争の後、十一年に田村義勝が晩翠学舎を創設すると、その講師となって青年教育に当たり、十二年六月倉岡（東諸県郡）に転出したが、十三年再び高鍋に帰住、晩翠学舎で子弟の教育に従った。十七年五月京都府中学校教諭となり二年在職の後、東京府に招かれ「東京府水産図説」五巻を編さんした。二十四年九月高鍋に帰り、家事を養嗣子重雄に託し余生を過ごした。勇雄は早くから高鍋藩史編さんを志し、永年にわたり集録するもの数十巻に及んだが、西南戦争のためほとんど全部を失った。しかしなお志を捨てず再び稿を起こしたが未完成のうちに、三十三年九月二十四日病没した。享年七十三歳。著書に「藩官擬典」「高鍋藩史一班」「藩史備考」などがあり、碑文に「丁丑戦亡記念碑」「平林忠恕君墓碑銘」「高城々跡記」などがある。墓は町内高月の大龍寺墓地にある。

⑦1 城重雄

政界　一八六九（明治2年）生　一九〇八（明治41年）没

明治二年新小路秋月家に生まれ、城勇雄の養子となる。晩翠学舎に学びのち、同志社を経て早稲田専門学校英語政治科を卒業、明治二十七年三月、高鍋学校の

校長となり、英語、地理、歴史、を講義した。「美しい髭をフランス刈りにしていたように、フランス自由主義の持ち主で、校風の中心的存在でもあった」と、そこに学んだ安田尚義は自伝の中で述べている。同二十九年七月橘瀬小学校跡に野口末彦伝道師、岩村真鉄らと共に、高鍋キリスト教会堂建設に尽力した。三十年九月十五日県会議員選挙に立候補、津野常と共に当選、翌三十一年五月、高鍋村会議員に当選、三十六年三月第八回総選挙に当選衆議院議員となる。現在舞鶴公園の本丸跡にある「外戦忠魂碑」は、当時の町長久保昌業が城重雄に依頼して、元帥陸軍大将大山巌に揮毫してもらったものである。

明治四十一年六月十九日永眠、四十歳であった、大龍寺墓地に葬る。

⑫ 鈴木定直（すずき さだなお）

一八五三（嘉永6年）生
一九一四（大正3年）没

政界

高鍋町水谷原鈴木定信の長男として、嘉永六年三月十七日生まれる。幼名を半造と呼んだ。少年のころ大志を抱いて上京し、苦学努力の後、明治十年二月西南戦争が起こると、旧藩主秋月種樹の命を受け、密書を託せられ、危険を冒して任を終え大分県日田でこれを報告した。六月警部補に任官すると同時に従軍した。その際種樹は、書面に添え、秋月家の名刀を贈りこれを激励した。

戦乱治まり十一年兵庫県警部、十四年豊岡警察署長となる。以後兵庫県警部、高知県、富山県と移動、二十二年富山県警察部長となり敏腕をふるった。二十六年に大阪府警部長に就任した。異例の抜擢（ばってき）であった。数年勤務し消防について大改革を行い、服装の改善、火事場の鎮圧、早急消火を図った。なお時勢の進歩に伴う英語学習の必要を説いた。当時は政変が激しく、伊藤、桂、山県、松方、大隈など内閣の更迭は頻繁であった。そのつど知事、警察関係の異動が行われた。

三十二年大分県知事に任ぜられ、三十四年内務省警保局

長、群馬県知事・滋賀県知事を歴任した。当時はめまぐるしい政変時代で困難な問題に遭遇することがしばしばであったが解決は明快であった。

四十年高知県知事就任を最後として、四十三年三月休職退任し多年の官界生活から離れた。

性剛毅率直で、よく上官、同僚、部下の信頼を得た。酒もよく飲み、礼儀も正しく、接客には丁寧で、玄関まで見送ったと伝えられる。

京都東屋町に隠栖し静養した。大正三年九月十九日、糖尿病で死去した。享年六十二歳、京都市黒谷光明寺内西翁院墓地に葬る。

⑦③ 鈴木馬左也

財界　一八六一（文久1年）生　一九二二（大正11年）没

実業家。高鍋藩家老秋月（旧姓水筑）種節の四男、母は鈴木百助の長女久子。高鍋町筏小路に生まれた。秋月左都夫の弟。幼名犢郎。藩士鈴木衛房の後を継ぐ。

東京帝国大学卒業後、内務省に入り、愛媛・大阪・岐阜各府県書記官、農商務省参事官を歴任、明治二十九年住友家に招かれて住友本店の副支配人となる。次いで理事兼別子鉱業所支配人となり、別子銅山の煙害問題については、製錬所を四阪島に移し、別子銅山の近代化を図った。三十七年住友総理事となり、別子銅山経営を機軸に鉱業・金属工業・林業・化学工業・機械・電力・銀行・倉庫等広範な、住友全事業の監督経営の責に任ずること十九年。諸般の事業を計画してその功を収め、営業組織を改革し、大正十年総本店を住友合資会社に改組して全事業を統括し、三井・三菱と対比される財閥に成長させた。また各種調査会委員など公職に就くとともに、東北大学鉄鋼研究所、大阪府立図書館の創設や、社会事業・教化事業に貢献したが、十一年病気のため退任し、十二月二十五日兵庫県御影で没した。六十二歳。高鍋町竜雲寺墓地に葬られた。

高鍋町筏にある「真清閣」はその別邸で、町が譲り受けた。

⑭ 鈴木慤太郎

一八九四（明治27年）生
一九三七（昭和12年）没

政界

明治二十七年四月六日、鈴木馬左也の長男として東京市牛込区市ヶ谷砂土原に生まれる。

第一高等学校（現在の東京大学教養学部）を経て、東京帝国大学政治学科へと進み大正八年卒業、この年高等文官試験に合格して大蔵省に入る。

第一高等学校へ入学した時は初代宮崎交通社長岩切章太郎もいっしょであった。章太郎はこれから東京帝国大学へと進むが、のちに住友入社のアドバイスをしたのは慤太郎であった。

十年七月アメリカに留学してハーバード大学で経済学を修めていたが、父馬左也の訃報に接し十二年一月帰国したけれども、再びハーバード大学へ学ぶ。十三年春イギリスのオックスフォード大学へ学び十四年には帰国して大蔵省に復帰する。七年志賀直温の三女隆子と結婚し父馬左也の嗣子としてはずかしからぬ人物と、将来を嘱望された。

昭和三年には父の果たさなかった「弘道館記述美小解」を刊行し、全国の図書館その他に寄贈した。六年大蔵省財務官としてイギリス在勤を命ぜられ、再びイギリスの土をふむ。十年六月大蔵省銀行検査官、九月には大蔵書記官に任命され、外国為替管理部総務課長を経て銀行局特別銀行課長に転じた。

大蔵省の先輩・同僚からは、深い信頼をうけ、弟妹からは敬愛されながらの充実した生活であったが、昭和十二年五月三十一日四十三歳の壮齢をもって、東京にて病没した。墓は高鍋町龍雲寺墓地にあり、父馬左也と静かに眠る。東京には分骨して霊をまつる。

夫妻には子どもがなく、末弟の維房がその後を嗣いだ。

⑮ 鈴木来助

一八四二（天保13年）生
一八六八（明治1年）没

維新功労

天保十三年七月二十日、高鍋筏小路に藩の儒者日高耳水の二男として生まれた。母は荒川氏。幼名を虎衛、諱は衛房、字は夢虎、牧山と号した。少年のころから文才があり、英気優れ藩主秋月種殷の命を受け、壺井芳洲について蘭学を修め、安井息軒、田口江村に漢学を学んだ。惣奉行鈴木百助の養子となり鈴木家を継ぎ、早くから勤王の志を抱いていた。藩内の兵制改革や砲塁の建設に参画する一方、薩

摩藩そのほかと往来して、藩のため修好の実現を図った。

慶応三年十二月、薩藩脇田市郎の江戸脱出に便宜を図り、水筑弦太郎とともに幕吏に捕えられ、江戸伝馬町の獄につながれた。翌年二月五日に出獄するが弦太郎は病死する。来助は助かって京に上った。当時高鍋藩は北越出征の命を受けていたので、武藤東四郎を総指揮に高鍋隊が編成され、来助は隊長の重任を負い新潟、山形の各地に転戦し武勲を立てる。新潟県北部の戦闘で小隊長福崎良一が帰らず山中を探したが、銃弾を受け割腹していた。

庄内藩関川の激戦では、率先危難を冒して奮戦し、敵陣を奪ったが、自身も重傷を負い明治元年十月五日、新潟野戦病院で没した。享年二十七歳。大正五年十二月、その功績に対し従五位の追贈があり八年一月鈴木馬左也が主催し墓前奉告祭を行った。墓は高鍋町上江の谷坂、戊辰の役戦没者招魂墓地にある。

⑯ 千石興太郎（せんごくこうたろう）

政界　一八七四（明治7年）生　一九五〇（昭和25年）没

農協運動の祖、元農林大臣、東京都千代田区日比谷に生まれる。明治二十八年札幌農学校（現北海道大学農学部）卒業。翌年農業試験場技手となり、各地の農学校教諭をつとめ、高鍋農学校に赴任した。三十八年七月二十八日のことで、翌年三月までの八ヶ月間という短さであった。斎藤角太郎校長が千石の人物識見を見込んでの招請であった。創設期の基礎づくりに尽力する。離任後は、大日本産業組合島根支会理事となり、産業組合運動の旗手として次第に有名になった。高鍋農学校が県下産業組合運動の指導者を輩出させた遠因としては、千石の強烈な実践運動家としての影響が大きかった。昭和十四年産業組合中央会会頭、二十年東久邇宮内閣の農商務大臣となり、旬日ののち農林大臣に任命されたが短期間で辞任した。

㊼ 千手興欽（せんじゅおきかた）　一七三七（元文2年）生

教育　一八一九（文政2年）没

名を八太郎と称し、幼名孝之進、字は一静、廉斎と号した。祖先は筑前千手村に住し秋月氏に仕え、高鍋に従った。代々給人、物頭を勤め俸禄百石の上士の家格であったが、父興応故あって家禄を奪われ、その子興欽は十五石を給されたが幼年の故をもって禄は半減。やがて母（河辺氏）の喪に遭い窮乏を極めた。職に就いても公務の余暇に農耕に従事し、かたわら藩の儒者内藤有全（元吉）に学んだ。論語の「位無きを憂えず学なきを憂う」の講義を聴き、憤然大いに発奮し学に励んだ。二十歳で藩主の江戸勤務に従って出府し、朱子学派の宇井黙斎の門弟となり、勉学すること三年。業終わって帰藩するに当たり、黙斎は興欽のため「懈怠一生便自暴自棄」の一書を贈った。興欽これを服膺してますます勉学、その後江戸勤めのたびに宇井先生の教えを受けた。衣食を節約して謝礼や筆紙の費用に充て、自己を律するに極めて厳格であった。二十八歳で中小姓に立身二十石を給された。興欽は綾部氏をめとり三男四女をあげたが、両親の食膳は常に豊かに孝養に努め、弟を還俗させて黙斎先生の門に学ばせた。その弟興容が病床につくと自分の衣服を売って薬代に替え、葬儀の費用に充てた。父興応にも孝養至らざるなく、その喪に服して七日間の初喪は礼服をつけて過ごし、寝床に就かず、後三年間は心喪に服した。

興欽は種美、種茂、種徳、種任の四代に仕えて偉功があったが、安永六年六月十七日八太郎四十歳種茂三十五歳のとき、学校を設けて文教を奨励するようにと建議（存じ寄り）した。藩公は即日この建議を用いて学校を設け、「明倫堂」と称して興欽をその教授に任じた。興欽は四十四歳で野別府代官、五十一歳で福嶋総代代官に任ぜられたが、社倉を設けて貧窮のときに備えることを建議して許され、貧民は子を産むも育成し難く、「間引き」が行われているし、土地は広いが耕す者が少ないのを憂え、藩主に建言して農民三人以上子あれば養育費を支給し、分家独立に必要な資金を与え、農民を説得する救済策を進め、萩原の米蔵勤務のときは余剰米の自分の取り分を藩に返し、義倉を建て、救農共済の制度を創始し、民政・財政に尽くすところも大きく、六十歳で家格は小給、家禄四十石に加増されていた。病にかかり職を辞したが藩公は養老料を給し、明倫堂教授をもって遇した。

資性剛毅、廉直、家は貧しかったがいっこうに気にせず、程朱の学を起こそうと勉め、藩主にもこれを勧め、家にあっては終日端座して読書し、学を修め躬行してみずから聖人たることを努め、徳行識見古賢に恥じる所なく、後進の模

範であった。その著書に自求録・九州繹故のほか小学・近思録・詩経・書経・易経などの筆記若干部がある。上に英主あり、これを助ける興欽のごとき傑物あり、藩の治績は大いに上がった。文政二年一月三日八十三歳で死去。安養寺墓地に葬る。墓碑銘「廉斎千手先生墓」側背面に略歴があり、「室人綾部氏合わせ葬る」とある。

⑱ 千手景興

一七六三（宝暦13年）生
一八三〇（天保1年）没

教育

宝暦十三年八月二十八日、父は千手興欽、母は綾部氏、その長男として高鍋村下蓑江に生まれる。幼名は興重、春太郎と称した。父興欽廉斎に就いて学ぶ。宝暦四年閏二月十二日高山彦九彦が高鍋に来たときは、蚊口から城下町の旅籠屋に帰る途中で春太郎と相識となり、彦九郎は七月に再び高鍋に来り、春太郎、興欽を蓑江の自宅に訪ね、春太郎は酒食を饗して歓待している。

文化十二年六月、明倫堂教授であった父興欽廉斎が病気のため、稽古改役から教授仮役に任ぜられ、十二月父に代わり教授本役となり、文政九年三月致仕し、養老料二人扶持を給せられた。春太郎は早くから兵学を修め、軍官となり軍学師範を兼ねた。天保元年十一月十一日に病没した。享年六十八歳。安養寺墓地に葬った。

⑲ 高橋正照

一八六一（文久1年）生
一九二八（昭和3年）没

政界

久留米藩士高橋正幸の二男として生まれる。幼名峯五郎、晩年紫川隻手、機外、と号す。明治九年長崎県巡査となり同十三年陸軍教導団を経て、十五年輜重兵として熊本鎮台に在任、十七年近衛騎兵隊に転じ、十九年陸軍士官学校騎兵科助教となる。二十四年軍馬育成所開設と共に判任官（軍属）となり岡山県青野に赴任、二十九年軍馬補充部と改称され鳥取県大山支所に初の文官支所長として勤務、三十七年軍馬補充部本部付きとなる。同年日露戦役に第二軍指令部付として出征三十九年一月復帰農事主任として各地の軍馬補充部の開設運営に関係し、北は北海道から南は鹿児島まで足を運び飼料の生産・改良、育馬指導に奔走する。この間にステッセル将軍より乃木大将に寄贈

の名馬（寿号）の飼育について仲介の労をとる。四十一年高鍋軍馬補充部用地買収に携わる、四十二年正七位勲六等瑞宝章受章、四十三年東京の自宅でわずかな傷から病患に犯され左腕を肩より切断、大正二年高鍋支部付きを願い上江村に転居、六年退官、十一年上江村長に推され、農会長、財団法人高鍋中学校理事などを兼任、十二年県会議員に当選、産業組合日向蚕糸社組合長、十三年県会副議長、十五年全国初の乾繭倉庫設立に柿原政一郎に有志と共に協力これの完成とともに理事となる。この倉庫の完成はこの地方の繭の価格の安定と製糸業の振興に貢献することになった。昭和三年県煙草耕作組合長を最後に一切の公職を辞し療養に努めるが同年四月二十一日に没、享年六十八歳。鬼ヶ久保の墓地に葬る。

㊽ 竹原祐吉　一八五八（安政5年）生　一九二五（大正14年）没

産業

安政五年六月二日、父、祐之、母、ミネの長男として川田に生まれる。幼少にして聡明、十一歳のはじめ明倫堂に学ぶ。算数に長じ理財に長ける。明治七年、当時のアメリカ駐在領事富田鉄之助の養蚕業に関する報告書を見、感ずるところあり。志を決して斯業に就かんと考え、斯業に関する多くの著書により知識を得、自ら桑園を造成して同志を勧誘し当時の上江村長に建議してその援助を求め、東奔西走、遂に、四十三年三月、同志九十二名、資金一一五〇円を以て高鍋養蚕社を設立。高鍋地方を県下屈指の養蚕地の名を築きあげた功労者である。

明治十七年以来高鍋授産場製糸事業を担当し、かたわら模範桑園六反を設け、二十一年には改良養蚕二階一棟を建築。二十二年には蒸気機関を購入し五十八人繰りの製糸機械を据えつけ、さらに教師を招聘し繭百三十余石を買入れ製糸。二十三年三月、株式会社組織の成立を見る。社長平林忠恕病のため辞したので自ら社長に就任。二十四年には、繭五百石を買入れ製糸業ますます盛運に向う。二十五年に

は蚕種の統一を謀る。二十八年社長を辞任。二十九年以来機械製糸場を自己の邸内に設け、業務煩雑になるにもかかわらず家人を督促し毎年蟻量四十匁を飼育し、明治十一年以来三十四年まで一日も怠ることがなかった。

明治十年から十四年まで、都農町副戸長、上江村副戸長、児湯郡吏。以後四十余年の長きにわたって上江村会、高鍋上江木城治水土木組合、児湯郡会議員、宮崎県産業調査委員等の要職に就く。川田報徳会をおこし矯風運動をすすめ殖産興業につとめ、地域振興のために尽力貢献する。

大正七年、大日本農会総裁守正王から緑白綬有功章。

明治四十四年五月、農商務大臣から銀杯を賞与。

性格は、温和でみずからを律するには厳しく、慈愛の心あつく多くの人々から信頼敬慕される。

六男一女に恵まれる。長子、祐憲は県会議員として地方自治に貢献した。

大正十四年七月十三日逝く、享年六十八歳。楠（川田）の先塋に葬る。墓碑銘は神代勝文の撰。

昭和十年四月三日、川田報徳会一同相謀って頌徳碑を川田神社境内に建立。

㊶ 立川伊三郎

一八八〇（明治13年）生
一九六七（昭和42年）没

教育

明治十三年一月二十八日、大阪にて父和助、母コトの長男として生まれる。その後別府、延岡を経て上江村平原に住む。父和助は体格も優れ柔道が強く付近の人に教えていた。伊三郎は小学校を卒業すると島田の公立高鍋学校に進む、家は貧しかったが勉学に励み、明治三十一年四月、学資の要らない宮崎師範学校に入学、毎日夜更けまで勉強し記憶力もよく在学中首席で通した。三十五年三月師範学校を卒業、卒業後泥谷良次郎の援助をうけ東京高等師範学校へ進み、三十九年本科卒業、宮崎県師範学校を振出しに、四十二年長野県、四十五年長崎県、大正五年鹿児島県の各師範学校教諭、十一年新潟高田師範、昭和二年奈良女子師範、六年富山県、七年和歌山県、十年三重県、十三年京都府などの各師範学校長を歴任、この間三十六年の長きに亘り教員の養成一途に勤めた。この功績にたいし、当時学校長としては最高の勅任官に列せられ、正四位、勲四等瑞宝章を受章。

昭和十七年懇願されて不振の私学、京都橘女子学園校長

となり、刻苦精励十七年に亘って再建に努力し校舎を新築するまでに復興し、三十四年名誉校長に推されたが三十五年八十歳で退任、西都市に住いを移し老後を送り昭和四十二年十二月二十八日、八十八歳の天壽を全うした。墓地は西都市穂北の如法寺境内にある。

㉒ 田村克明（たむらかつあき）　一七〇九（宝永6年）生　一七九五（寛政7年）没

教育

幼名金五、長じて新八郎、後に織右衛門と称し、繼斎（けいさい）と号した。父は与三左衛門、母は山田平右衛門の娘、高鍋村宮田に生まれた。若いときに藩主種弘の参勤に従って江戸に出て、闇斎学派の浅見絅斎（けいさい）の門人高木毅斎（きさい）および津田某について学んだ。寛保三年四月十六日物頭役となり、延享二年七月十日縦筏に屋敷を拝領した。宝暦五年十二月十七日大坂留守居、十一年六月五日惣奉行兼寺社奉行、十三年五月十五日用人に登用せられた。八月二十七日、大目付以上の役人の子供および小給以上の者の教育のため、廉（かど）の屋敷稽古所において講書を行うよう、藩主種茂から直接命ぜられ、青少年の教育薫陶（くんとう）に努めた。明和二年七月二十二日五十七歳のとき、病気のため隠居を願い出て許された。夫人は石井氏、一男一女があり、孫正明、曽孫克成はともに明倫堂教授となった。寛政七年一月二十一日没。享年八十七歳。墓は宮崎市宮崎霊園に在る。

大塚観瀾は克明を評し、明倫堂のまだ建たない以前に本藩の講学をなした中興の祖であると称揚している。

㉓ 田村克成（たむらかつなり）　一七九〇（寛政2年）生　一八四三（天保14年）没

教育

寛政二年八月十五日、高鍋筏に生まれる。父は平太左衛門正明。字は美仲、雄右衛門と称した。克成は幼いときから非凡で、大人のような子であった。才に秀で、学問好きで事務にも練達し、多くの人から将来を嘱望されていた。文政八年七月、明倫堂教授になり、天保四年七月総奉行で寺社兼任となり、明倫堂教授はほかに適任者が無いので日々学校へ出席し、総奉行としては用向のある節だけ出向き、賞罰などの主だった書類だけ披見するよう同役と申し談じ、月番は免除となった。天保五年三月十八日、明倫堂教授をやめ奉行所専任となった。伝えるところによると、ある身分の高い権力者に利用され、その優れた才能を発揮することができなかったという。また明倫堂の五経の訓点は、宇

井黙斎の訓点を使用していたが、雄右衛門はこれを煩冗だとし、いっそう簡明な訓点にしようと折衷して五経新註を考案し、既に着手していたのであったが、未完成のまま、天保十四年六月十七日没した。享年五十四歳。墓は高鍋から移され、宮崎市の宮崎霊園の田村一族の墓に合葬されている。

㉞ 田村正明

一七六四（明和1年）生
一八四一（天保12年）没

教育

明和元年十月三日生まれる。字は正明、平太左衛門と称す。父は久右衛門安民。幼にして父を失い、祖父巒斎織右衛門に教養された。人となり極めて聡敏であった。寛政九年六月、山内冨太郎の病気が回復するまで明倫堂教授に任命され、同七月二十六日大目付に昇進し、寛政十一年十一月二十六日奉行役となり、御馬屋中都合から御馬屋稽古中都合となり、享和三年三月七日に手塚源太夫とともに江戸屋敷留守詰となった。文化元年六月十三日、学校稽古所中都合となり、文化二年三月七日、再び江戸屋敷留守詰となったが、同年閏八月六日、病気のため退任し、文化四年一月四日隠居。天保十二年七月一日没した。享年七十八歳。墓はもと大竜寺墓地にあったが、現在は宮崎市宮崎霊園の田村一族の墓に合葬されている。

㉟ 田村増吉

一八三八（天保9年）生
一八七〇（明治3年）没

維新功労

天保九年、蓑江の田村志摩治の長男として生まれのち筏の田村家を継ぐ、増吉は通称で名は克高、字名は士柔といった。藩主種殷公の小姓となり次第に諸職に任じた。元治元年江戸藩邸に勤める。慶応三年副留守居役として幕府や他藩との交渉に当たっていたが、当時天下は勤皇、佐幕、攘夷論などで騒然としていた時代であったから、その役職は仲々容易ではなく気骨の折れるものであった。同年十二月二十五日幕府による薩摩藩邸の焼き打ち事件があったが、その藩の副留守居役脇田一郎が助けを求めてきたのを黒水長慥、鈴木来助、水筑弦太郎などと協議して、京都へ逃亡させようとした件で連座して収監された。翌年幕府の政権返上と共に保釈を受けて出獄その後、鈴木来助と京都において共に周旋方となり、藩命をうけて時事の為に奔走した。周旋方というのは他藩との交渉により天下の形勢を探ぐりつつ、藩の方向を定めるための交際官であった。帝都が東

京に移ると共に、東京の藩邸に移り公用人となった。公用人とは留守居役と同じ外交官であった。丁度王政復古の際で内外の事務は甚だ激務であったが、整然とこれを処理したそれは生来の剛気果敢な性格が役立つと共にその学問の才能も非凡なものであることを示したものである。藩邸が麻布から両国の矢の倉に移り、権大属という役名になったが、内容は以前と同じ役目だった。

明治三年十月二十四日夜急逝享年三十三歳であった。

㊻ 田村義勝

教育　一八三九（天保10年）生　一九〇四（明治37年）没

天保十年三月十二日、高鍋縦筏に父質勝（字は子野、極人と称す）の次男に生まれる。母は綾部氏。通称兵衛、其淵と号した。藩校明倫堂に学びその俊才を注目された城竹窓門下の高足である。江戸に出て安井息軒の門に学ぶ。備中の坂田丈平、肥前の岩崎小次郎らとともに三計塾中の異才と称され、塾頭にあげられた。

明治維新の初め、太政官に勤めたが、病のため退職し郷里に帰った。明治五年学制が頒布されて新しく学校教育は発足したが、人材養成に主眼を置いた明倫堂以来の教育とは、様相を異にし、特に青年の教育は着手も遅れがちであった。そこへ西南戦争が起こりたちまち県内は戦場化し、教育は休止状態となった。義勝はこうした郷土の教育事態を憂慮し、十一年八月、高鍋宮田の三好退蔵（義勝の実弟）旧宅を借り、私塾晩翠学舎を創設した。明倫堂の伝統に立ち、漢学を主要教科に義勝みずから塾の主幹兼教授となり、城勇雄の協力も得て人材の養成に努めた。旧高鍋藩内はもとより、延岡、佐土原、穂北などから来たり学ぶ者多く、優れた人物を世に送り出した。

十一年、宮崎県三等訓導となり、翌十二年明倫堂の旧校舎に高鍋学校が開校されると同校の教師も勤めた。しかし十八年四月晩翠学舎は高鍋学校に吸収され、同校の漢学部となった。義勝はその後高鍋学校が廃止となる三十五年まで漢学の教師として青年子弟の教育に精励した。三十七年一月十日病のため没し、漢学者、教育者の一生を閉じた。享年六十六歳。墓は竜雲寺墓地にあったが、現在は宮崎市本郷南方の宮崎霊園内、田村家墓地に合葬されている。

㊼ 堤（つつみ） 長発（ながあき）

財界　一八四九（嘉永2年）生　一九二七（昭和2年）没

高鍋藩士父鈴木百助、母田村克成の長女数子の三男として、大字上江字高月に生まれ後同藩士堤長善の養子となる。明倫堂に学び篤学の聞こえ高く、矢野タニ子と結婚、長子は長述である。明治二年、東京大学（元の昌平黌（こう））に入学、勉学衆にぬきんで、在学四五二人中から選ばれて寮長となった。

廃藩の後宮崎県に出仕、学務を担当し、かたわら宮崎学校の教師となる。九年八月宮崎県廃止により、十年一月千葉県属となり、翌十一年大蔵省に出仕し銀行事務を担当、十四年調査局に移り予算事務を担当した。二十年十二月東京控訴院書記官となり、二十三年裁判所書記長となった（年俸一、〇〇〇円）。

二十五年七月、郷里の期待を受けて前途有為の官途を去って児湯郡長（年俸六〇〇円）に就任した。在任五年余り、専ら郡内の教育振興、産業開発に尽くし貢献するところが大きかった。在京の日、三好退蔵らと高鍋郷友会を創始し、在京郷友の親睦を厚くし、同郷学生の指導に努めた。

三十年宮崎農工銀行の創設されるに当たり、衆望を負うて頭取となり、以来大正八年七月その職を辞するまで勤続実に二十二年有半、誠実もって終始一日のごとく行務に精励し、県下の殖産興業に甚大なる功を致し、経済界の重鎮となった。

明治三十九年一月、日向鉄道期成同盟会を組織し、その会長となり、県下官民一致協同、県民の宿願であった日豊本線の開通を促進した。高鍋郷党協会を設立してその会長に就任し、先哲祭の創始、高鍋実科高等女学校の県立移管、高鍋中学校創設、高鍋町・上江村の合併などに努力して偉功があった。

敬神崇祖・忠君愛国の念殊にあつく、家にあっては誠実一貫、養親に孝養を尽くした。老後は東京に移り、その子長述のもとに静養していたが、昭和二年九月二十七日眠るがごとく安らかに長逝。享年七十九歳、学殖深く、詩文に長じ、書をよくし遺作が多い。墓は安養寺墓地にある。

㊽ 津野常

政界　一八四九（嘉永2年）生
一九〇二（明治35年）没

新富町宮ノ首、津野善太郎常盛の二男として嘉永二年六月十二日生まれる。

藩校明倫堂に学び、出仕して藩の会計に従事した。

戊辰の役には京都まで出掛けた。その後廃藩置県となっては美々津県に出任し、宮崎県となるや出任して税務会計を勤めた。

資性円満な思想を持ち、事を纏めて諄々として成功する働きがあり、人によく相談し意見を聞いて決断するという美質の持ち主であるが、人に妄従するというような男ではなかった。

彼は学問に於いても才能に於いても他の成功した友人にも遜色のないものがあり、彼独特の、人の得難い人格をもっていた。敵をつくらない、人の言を容れ、人にさからうことのない篤実な性格を持ちあわせたことが有権者の敬慕となり、県会議員（初当選明治十六年七月）となったのであろう。

当時鹿児島県を割き宮崎県を再置するの議起こるや、鋭意分県の是なるを主張し遂にこれに成功。その後も政界の風色幾度か変革があったが彼は県議会議長としてあるいは県会常置委員として二十年間終始一日の如く県下公共問題に取組み尽瘁した。

また、衆議院議員となり、次の総選挙に再出馬の意志を示したが、総選挙の二ヶ月前に病魔に没す。

時に明治三十五年七月十八日。享年五十四歳。葬儀は自邸上町にて行われ参列者は知事代理以下県議会、町内外より一五〇〇名にのぼり、行列は十数丁にわたるとの記録からしても彼の徳望を察知することができる。墓地は大龍寺墓地、城勇雄、城重雄の墓の南隣に妻美善刀自、長男常信（日露戦争に於いて戦死）と並んで建っている。

㊾ 内藤元吉

教育　一七〇五（宝永2年）生
一七八〇（安永9年）没

宝永二年一月九日生。父は典医森心安、母は荒木氏。諱は有全。通称元吉、内藤久右衛門の有量の養子となった。有量は元、京都の商人で高鍋藩の用達であったが、山崎闇斎派の儒学の造詣が深く、藩主種弘は五人扶持を給してその教えを受け、後には扶持のうえに金一〇両を贈り、高鍋下向を求めていた。有量は正徳二年高鍋に来り、御書院番

となり、定日に藩主に経学を進講し、家臣にも傍聴を許し、好学の風が上下に広がるようになった。有量は御典医森心安の子元吉を養子とし、これを享保十年京都へ自費遊学させることを願い出た。藩ではこれを許可したばかりではなく、修業中一か年につき小判三両、当時としては高額の学費を支給した。元吉は名著「南狩録」の著者で尊王家の味池修居の家に寄寓し、闇斎門下の三傑の一人三宅尚斎について学び、三年の後に帰藩した。藩主種弘、種美、種茂に近侍し、かたわら藩士の子弟の指導に当たり、累進して給人に列した。山崎闇斎派の学は、内藤父子、久右衛門と元吉によって高鍋に行われるようになった。元吉は、性謹直でしかも酒を好んだが、藩主に近侍する間は酒杯を執らず、勤めをやめて初めて大杯を傾け快飲して曰く、願わくは再び公用なかれと。世人は大いに驚き「元吉どんの下戸」と称した。室は坂田氏、嫡子、進有恒は明倫堂師範となった。安永九年二月二日没した。享年七十六歳。墓は安養寺墓地にある。

⑨⓪ **内藤有恒**　一七三八（元文3年）生
教育　一七九二（寛政4年）没

元文三年八月十八日、父は元吉有全、母は坂田氏の長男として生まれる。安永四年財津十郎兵衛吉恵とともに、人材養成のために、廉の屋敷稽古所とは別に学校を設立することの必要を藩主種茂に進言したが、折あしく数年来、大風雨や旱害、あるいは虫害などが打ち続き財政も困難な折であり見送られた。安永六年七月千手八太郎が重ねて学校を設立し人材養成の必要を力説進言するに及び、ようやく学校を設立することになり安永七年明倫堂が完成した。十年二月、稽古改役並びに明倫堂師範に任ぜられた。同年閏五月稽古改役を免ぜられ、学校師範として教育に専念し、天明六年二月町奉行に任ぜられるに及び学校師範を免ぜられた。

寛政四年十一月十九日、病没。享年五十五歳。墓は安養寺墓地にある。

⑨① **長友勘右衛門**　生年　没年　）不詳
産業

慶長、元和のころ藩主種長に仕え偉功のあった人。初め石

河内（現木城町）福永神社付近に居住していた。ある日高鍋・上江両村の地勢を視察し、畑田一帯から東方の畑地に用水路を敷設して農家の増収と藩財政を豊かにすることを思い立ち、日ごろ信仰する比木大明神に百日参りの成就祈願を行い、満願の日の神託のままに水源地や水路の適地を調査し、設計書を添えて藩主に用水路開設を進言した。藩主は喜んでこれを許し、工事監督役を命じた。一意専心寝食を忘れて工事の成就に努め、慶長十七年春ついに太平寺用水路を完成、太平寺・畑田・中鶴地区一帯の畑地の水田化に成功した。幹線水路約五キロ、受益面積約一八〇町歩（約一八〇ヘクタール）に及んだ。

その豊かな用水は単にかんがい用水だけでなく、幾度も大火災に泣いた高鍋にとって、防火用非常用水となり日常雑用水として喜ばれた。

藩主はこの偉業を賞し、高鍋町下町に屋敷を与え、禄五十石を給し、徒士格をもって遇し、井手神、挽木出口など数か所の田地を与え、特にお勤め御免とされたが、禄半高の辞退を願い出て催司役（吉事のみ）を勤めた。子孫代々下町に住み永友の姓を名のっている。毎年九月の比木神社のお里回りには「太平寺井手祈祷」として神輿を迎え、自家製の濁り酒や種々の供物を捧げ、神楽数番を奏し、歴代の家主がお祓いを受けて奉拝し、終わって神官一同着座し、恒例の膳部を供するならわしとなっている。

墓は道具小路の元祇園墓地に約一メートルの自然石に「先祖長友勘右衛門墓」と銘されていたが、改葬されて現在はその姿はない。なお舞鶴公園岩坂御門跡の南に、「長友勘右衛門君水路功績記念碑」が建立されている。

⑫ 名和大年

教育　　生年　　没年　）不詳

大阪の人で、もと豊浦筑前介といい、南朝の元勲名和長年の子孫であるという。

白河神道を修めて、皇学を精究し最も国詩に長じていた。明治二年、高鍋藩の聘に応じ管内の神詞、神仏の混交であったものを分離し、神道を正し祭典を改む。藩知事の為に其の祖廟の祭器を正し、古典に則ることにした。

藩知事は大年を城内に住わせ二十口糧を与え、賓師として迎えた。

本藩はこれより国学始めて開かれ、大年はこれに感じて本藩人となり、明倫堂教授となる。（明治三年三月十七日）

明治三年六月十六日盂蘭盆廃止の通達、神仏の差別なく朝夕線香をたいている者を多く見かけるが、神前に於いて

は決してこんなことのないようにという通達の出ている時代で、大年は高鍋藩に於ける廃仏毀釈をすすめ、多くの寺院仏像等の文化財の焼却毀損を推進した。

老齢の母を残して来たことと自らの病気を理由に三年八月十六日辞職帰郷願を申し出で、許されて四年二月辞任した。

宮崎県の三大おんな旅日記と称せらるる佐土原藩の島津随真院、延岡藩の内藤充真院と高鍋藩の明倫堂教授日高耳水夫人（日高蔦子）の此花日記（慶応三年）は有名であるが、この、此花日記の歌評は那波大年妄評として朱筆で添削や歌評を書き入れている。

⑨③ 則松（のりまつ） クラ

一八七八（明治11年）生
一九五七（昭和32年）没

産業

明治十一年一月二十六日、児湯郡都農村大字都農町、父河野亀七、母サカの長女として生まれる。後に宮崎大学農学部教授となった河野成助はその末弟である。

二十八年都農村が殖産興業のため、山梨県に養蚕・製糸・機織（はたおり）（羽二重）の伝習生男子三人・女子四人を派遣するに当たり、芳紀十九歳の若さで率先これに加わり、東山梨七里村で養蚕を修得、甲府市風間製糸工場で製糸技術を修業、大木羽二重織工場で羽二重織りを修業し、刻苦精励約二か年で優秀な研修成果を上げてほかの三人とともに帰郷した。

帰郷後は都農村内はもとより、近隣町村に伝習講師として招かれ、三十年晩秋には水車式動力の座繰製糸工場や羽二重織工場も繰業開始、新入女工の技術指導にも著しい成果を上げた。

都農小学校長河野貞敏に見込まれ、その媒酌で、後に高鍋小学校長となった則松松太郎と結婚して高鍋に移り、長女徳の母となった。望まれて、当時県内最大といわれた高鍋製糸会社の婦教となったが、その勝気で率先垂範の教育指導で、おおぜいの女工たちを明朗かつ意欲的に育て上げた。その四十数年に及ぶ製糸業界への貢献は多大であり、高鍋産業婦人会のリーダーとして活躍した。

家にあっては農業経営の中心となり、養蚕・養鶏・養豚と多角経営の才能を発揮し、家族の着物は晴れ着の羽織・袴（はかま）に至るまで、すべてクラの手織りであり、よく名校長の夫を助けて青年教育に尽力した。各界からたびたび表彰を受けているが、昭和十年南九州陸軍特別大演習が行われた

とき、広幅羽二重を織り、天皇に献上する光栄に浴したことは、その生涯で最も輝かしい事であった。

昭和三十二年九月二十二日、八十歳で生涯を閉じた。墓は大字北高鍋砂子田墓地にある。

⑭ 原（はら） 坦（ひろし）

政界　一八八一（明治14年）生　一九六三（昭和38年）没

明治十四年六月二十日、宮崎県児湯郡高鍋村大字北高鍋三、四九一番地のイ、父原重次、母セイの二男として生まれる。高鍋小学校を終え同三十二年四月創設当時の宮崎県立宮崎農学校に入学、三十五年三月卒業、一年志願兵となり、三十七年八月、日露戦争に従軍、同年十月陸軍歩兵少尉に任ぜられ正八位に叙せられ、功により勲六等功五級に叙せられた。四十一年四月北諸県郡農業技手。四十三年四月高鍋町書記、大正六年六月高鍋町助役。十年二月に町長に当選、以後昭和九年三月まで町長在職十三年余、世界大恐慌のなかにあって困難な町政の進展に努め、児湯郡自治会長としても在任八か年鋭意その運営に当たり、九年八月後任理事長から感謝状を受けている。

同十一年九月児湯郡畜産組合長に選ばれ、通算十三年余畜産共進会の開催に尽くし、十七年七月からは馬匹組合長となり、軍馬の育成供出に寄与し、本県畜産の振興に尽瘁（じんすい）し、日本馬事会頭の感謝状や県知事の表彰を受けた。

大正十一年、児湯郡内に県立中学校設立の議が起こり、東西激しく争奪論争、県議会の議決の僅少の差で妻町設立に決まると、東部七か町村と謀り財団法人高鍋中学校を設立、天下に文教高鍋の意気を示し、理事に選ばれ、不況のさなかにあって学校運営の苦難時代を切り抜け、昭和十八年四月ついに県立移管に成功した。

昭和二年九月宮崎県会議員当選三回、合計十三年余り戦時下至難な県政に対処し、終戦後の混乱期にも県政に鋭意貢献した。同七年四月児湯郡養蚕業組合長に選ばれて十一年間、十四年五月児湯郡農会長、十八年十二月県農業会児湯支部長となり農会運営に貢献。終戦前後九年間は町会議員、二十二年五月から宮崎県監査委員、二十四年十一月からは宮崎県選挙管理委員として町政から広く県政に至るまで、終始一貫、誠実精励の人であった。三十五年四月三日、町政六十周年記念式典に当たり、高鍋町最初の名誉町民に推戴された。三十八年九月二十七日、八十三歳の高齢で死

去。墓は道具小路の田の上墓地にある。

⑨⑤ 泥谷良次郎

教育　一八六八（明治1年）生　一九四四（昭和19年）没

明治元年九月四日、筏に生まれる。「七歳で父をなくし父方の二人の従姉があっただけで、叔父も従兄弟もいない不遇の境遇にあった」（堤長発君小伝）

幼少にして聡明、高鍋小学校・晩翠学舎を経て宮崎県尋常師範学校に学ぶ。師範学校時代は成績は優秀。首席で卒業。卒業式の当日卒業生代表として答辞を読み栄誉を担った。卒業と同時に付属小学校訓導に任命された。卒業と同時に付属小学校訓導に任命されるというのは学校創始以来のことだった。

明治二十四年四月、付属小学校訓導、二十五年四月、高鍋小学校長、在任二年間で校長職をすて上京、二十七年四月、東京高等師範学校（現筑波大学）文科入学、三十一年三月、同校卒業。高等師範学校時代は、英文学や小説などは原書で勉強したほどで、英語力は上級生も及ばない実力をもち抜群の成績だった。卓越した才能と手腕力量を発揮し若くして師範学校長となる。

本県教育界の父遠藤正を敬愛し「国家治平のもとは教学を振うにあり、教学を振うは良き教師を得るにあり」の師範教育の教育理念に則り教育実践を究め人材俊秀を育成する。三十八年六月、大分師範学校長、四十年六月、鹿児島師範学校長、四十三年四月、兵庫県立神戸第二中学校長、大正三年四月、兵庫県立姫路中学校長、七年七月教育界を去り、同郷の読売新聞社長秋月左都夫の旗下に馳せ参んじ新聞経営に参画し、十年六月、京城日報社支配人（副社長格）秋月とは読売新聞社時代はもとより秋月が京城日報社社長就任から退任するまで終始側近にあって実直熱心に協力した。

秋月は「泥谷は、真面目で正直で礼儀正しく人格者で、人間として申し分のない完備した男」と評している。

大正十四年夏、京城日報社を退社、つねに郷土を思う心あつく帰郷するや、私立江陽高等女学校長、昭和二年十月、財団法人高鍋中学校長、郷党のために尽瘁貢献地方文化の発展に寄与した功績は大きい。

堤長発君小伝ほか数種の著書がある。晩年、秋月左都夫伝の編さんに熱意をもってその稿も完成に近かったが、死

の前後敗戦のドサクサのなかに紛失したことは残念である。
昭和十九年一月二十六日逝く。享年七十七歳。墓は竜雲寺墓地にある。

⑨⑥ 日高明実

一八〇九（文化6年）生
一八四七（弘化4年）没

教育

名実、またの名は昊、字は東卿、謙三と称した。耳水は美々川をもじった号である。堂号を安素堂という。文化六年（月日不詳）美々津に生まれた。父祖は皆高鍋藩主の関船の船頭で、乗太夫または善太夫を襲名した。家禄は三十七石五斗程度で、身分は初め間格、後徒士となった。

謙三は十六歳のとき、父に請うて乗船を辞し、学問に専念することになり、荒川嘯亭に漢学を学んだ。嘯亭は、謙三の人物と才幹に感じ、娘蔦子をめあわせることを望み、蔦子は後にその妻となった。文政十三年三月三日、鳥原玄竜の紹介で豊後国日田の淡窓広瀬求馬の咸宜園に入門し、平野五岳、秋月橘門とともにその領袖と称せられた。藩主種任はその名を聞き、天保六年城外のお仮屋に召し置き、明倫堂教授の勧告により天保八年三月江戸の古賀侗庵に入門させた。そこで稲垣研嶽、津田質堂、江木鰐水らと親しんだ。水野忠邦は当時老中であったが、謙三の名声を聞き、扶持百石をもって召し抱えようとした。しかし辞して受けず、十三年四月二十二日高鍋に帰り、明倫堂助教となり、中小姓五人扶持を給せられた。翌十四年十二月十日小給に昇進し教授に任ぜられた。折衷学派を学んだうえに、高鍋藩の学統である闇斎学にも通じ、新知識をもって指導に当たったので明倫堂の学風は一変したといわれる。しかしなお足れりとせず、弘化三年大坂に出て篠崎小竹に師事しようとした。小竹は師の礼を受けず、ともに研鑽に努めようと朋友の礼をもって遇した。その年の七月二日、幕府は藩主種任に勅使御馳走役を命じた。藩侯は種々考慮の末、謙三を呼んで、この大役の差図をさせることにした。謙三藩主の信任にこたえ、よくその大任を果たし、再び大坂に帰り学問に励んだ。翌年二月江戸の古賀侗庵の死が伝えられた。謙三は大変悲しみ、痛哭して人目をはばからなかったという。それより間もなく疫疾を得て、二月二十七日大坂の藩邸で没した。享年三十九歳。大坂寺町の浄国寺に葬った。咸宜園での同学秋月橘門に「耳水日高東卿を訪ひ、賦して呈す」という長詩がある。耳水の風貌を次のごとく表現している。「多くの人が、君は穏やかで心は強く、がさつをにくみ、心を潜めて沈黙を愛するという。親には心をこめてつかえ心から楽しませるようにし、事に当たっては

細心の注意を払い、一旦事をきめては堅く守り、道を踏むを自分の天職とし、名利を求めることはなかった」と評し、更に「その両眼は青く澄み、東山に旭日をささげるごとくである」と賛嘆している。同学の表現だけに彷彿たるものがある。三男一女があり、長男誠実は明倫堂教授となり、次男来助は鈴木家を継ぎ、三男鵠千代と漿子は早世した。著書に「耳水遺稿」「安素堂遺稿抄」がある。墓は元祇園墓地に改葬された。

⑨⑦ 日高蔦子

教育　一八一五（文化12年）生　一八七一（明治4年）没

文化十二年十二月五日、美々津の荒川利貞の長女として生まれ、幼名は嘉留、また好子といい、後、蔦子と改め、また織葉とも称した。父利貞は通称を環と名のり、俳号を嘯亭という。漢学を修め、長じて医を学んだ。多才で趣味多く、度量が広く、多くの人と交わり、よく人の世話をした。まだ若い日高明実に漢学を教え、その人物、才幹に感心して、娘の蔦子を嫁がせた。蔦子は恵まれた家庭に生まれ育ち、才色兼備の女性であった。坂田莠の筆になる日高孺人荒川氏墓銘に「為人柔順貞節、好読書、或至二于通宵忘一レ眠、真偽儒家配偶一矣」と述べている。夫の病没、当時蔦子は三十三歳、長男誠実は十一歳、次男来助は五歳、遠く離れて夫の臨終を見取ることもできず、幼児を抱いて悲嘆骨髄に徹する思いを浪華の空にはせた。三男鵠千代は五か月後に生まれ、間もなく亡くなった。重ね重ねの不幸であった。明実は病勢革るとき、「我ついに君恩に報ゆる能はず、願わくは児誠実学成るの後、父に代りて優渥にむくい奉るべし」と伝えることをかたわらの者に頼んだという。蔦子は朝夕夫の墓を拝することを願ったが、その養育に歳月を移し、一喜一憂皆その感懐を歌に詠んだ。高鍋の婦女子も幾人か歌を習う者もあった。

うつし見る鏡の影も曇るかな暗き心を嘆くあまりに

夫亡きころの詠であろう。子供の教育については毅然とした態度で臨み、しかも深い愛情をたたえていた。

物学びにまからんとする子に詠みてつかわしける

心ざすかしこき道に関の戸の幾重ありとも越えて進めよ

東に学びにまかれる次の子のよみておくりける

歌の返しに

心ざす道の奥まで尋ね得て帰らん時を待つべかりけり

慶応三年、業成って故郷に帰ろうとする長男誠実に呼ばれ、大坂で落ち合って亡夫の墓にもうでた。その旅日記を歌を交じえて書きつづったのが「此花日記一巻」である。

慶応三年一月二十四日高鍋を発ち、二月九日の難波の港に着き、その日の夕暮れに墓にもうでている。

世へだつる霞の谷の深くして問へど
こたえもなくばかりなり

長男誠実は藩校明倫堂教授となり、次男来助は名門鈴木家を継ぎ、戊辰戦争に高鍋隊隊長となり関川の戦に戦傷を負い新潟病院で亡くなった。誠実の長男真実（教育学者）も幼時蔦子の薫陶を受けた。蔦子は明治四年七月二十八日、上江村高月で五十七歳の生涯を終わった。墓は元祇園墓地にある。

⑨⑧ 日高誠実

教育　一八三六（天保7年）生　一九一五（大正4年）没

天保七年二月二十九日、父明実、母蔦子の長男として美々津に生まれた。幼名は鶴太郎、後源一郎、更に儀一に改める。諱は誠実、如淵・毅窓・梅瀬・梅瀬仙客・独倚楼と号した。天保十三年四月父に従って高鍋に移り明倫堂に学び、十三歳で成績優秀により白銀五両の褒美を受けた。二十一歳のとき江戸に遊学し古賀謹堂に師事すること七年、文久二年帰郷して明倫堂助教となる。元治元年再び命ぜられて古賀謹堂の門に学ぶこと三年、大坂に赴いた。慶応三年春、母蔦子を迎え母子そろって初めて父耳水の墓前に拝した。それより京都を訪うて疫病を患いほとんど死に至ろうとしたが、十一月ようやく癒えて帰郷した。藩主種殷の近侍となり、明治元年七月明倫堂教授に任ぜられた。同二年十月十二日上下両院が開設されて下院議長を兼ね、同三年十二月権大属に任じ上京して公務に従事した。廃藩置県の後、東京で残務を整理した。五年三月陸軍省出仕に補せられ秘史局分課に勤務し、後に参謀本部編さん課出仕となった。十九年三月非職となると、兼ねて千葉県令船越衛の斡旋で得た千葉県市原郡大久保村白鳥の広大な仙境に隠棲し、渓流に沿って梅樹数千本を植栽して梅ヶ瀬と称し、みずから「梅瀬仙客」と号し、漢詩十首と「引」（文体の一、序のごとし）を賦し、四方の文人にその志を示した。それから広大な地域の開発に努め、田畑を開墾し山野に牛羊を放牧し、各河川に稚魚を放流し、池を造って養魚を行い、更に皇室御料地二二九町歩余の原野を借りて徐々に植林した。後年隣村民に分譲し、また七十五町歩を購入し、林道をも通じて付近に余沢を与えたという。

明治二十一年、官許を得て私塾梅瀬書堂と八十名収容の寄宿舎を建て、地方の青年の一般教育に当たり、同三十五年閉鎖するに至るまで君津、市原、長生、山武、夷隅五郡の子弟およそ千人を世に送った。いずれも先生の高風を慕って集まった者で、かの小湊鉄道開設功労者の永島勘左衛門も梅門の一人である。

書は顔真卿より出でて顔法を脱し、みずから一家を成し、明倫堂教授のころから儀一流と称せられた。

大正四年八月二十四日、梅ヶ瀬に没し遺言により千葉県鷹取山頭に葬る。享年八十歳。三子があり、長男は真実といい、日本の最初の教育学者で東京大学教授、明治二十七年没、二男は早世、三男驥三郎（実業家）。

梅瀬の著書は数十種ある。主なものは近古戦記（十五冊）、復讐録（一冊）、梅瀬雅集（二冊）、独倚楼吟稿（三冊）、奇聞集（一冊）、仙台支傾録（一冊）、桃山報讐記（一冊）など。

⑨⑨ 一木儀一

軍人　一八七四（明治7年）生　一九三六（昭和11年）没

明治七年六月十三日、高鍋町脇に父琢二、母ケサの長男として生まれる。厳格な母のもとに育ち、宮崎中学から熊本第五高等中学校予科に進み、三十七年東京帝国大学医学部を卒業した。卒業と同時に見習い医官として歩兵第三連隊補充大隊へ配属になったが、日露戦役中で傷病兵の還送多く、間もなく東京予備病院に転属となった。同年八月第十六師団第一野戦病院付として出征し、各地に転戦して功績を残した。平和克服とともに同師団軍医部部員となった。

大正三年八月、日本がドイツに宣戦の布告をすると、独立第十八師団軍医部部員として出征、青島攻略戦に参加し殊勲を挙げ凱旋した。その功により四年十一月功四級金鵄勲章を授けられた。

その後十年七月には陸軍一等軍医正、第十九師団軍医部長となり、次いで第二師団軍医部長、大阪衛戍病院長を歴任、大正十五年には陸軍軍医監に進級して第四師団軍医部長となった。在職一年にして陸軍軍医学校長に転じ、同時

に軍隊胸膜炎調査会副会長となり、調査会の使命達成に献身的努力を払った。

昭和六年五月陸軍軍医総監に任ぜられ、七年四月現役を退いた。軍医学校在職三年四か月、その間天皇陛下行幸の光栄に浴し、整形外科教室、防疫部研究室の新設など多くの業績を残した。

日常生活では軍人の厳しさの中に情操豊かでユーモアに富み、手先が器用でテーブルを作り、料理などにも優れケーキやカステーラを作って楽しんだ。大工仕事や料理のほか刀剣、書画類にも趣味を持っていた。

現役を退いた後、東京目黒の自邸に住んでいたが昭和十一年四月二日、六十三歳をもって没した。正四位勲二等功四級を受けている。墓は舞鶴城跡の西、野首の墓地にある。

⑩ 平島敏夫（ひらしまとしお）

政界　一八九一（明治24年）生　一九八二（昭和57年）没

明治二十四年十一月四日、高鍋町小丸下、平島重綱の長男に生まれる。幼少から秀才の声高く、高鍋学校から宮崎中学校入学、学校推薦として第一高等学校に入学、優秀な成績で卒業、大正四年東京帝国大学英法科入学、同校卒業の際成績優秀恩賜銀時計の栄誉に浴した。直ちに内務省内務書記官、明治神宮造営局書記官となり、神宮造営に尽力。十一年台湾総督府事務官、司法大臣秘書官、満州に出向、満鉄社長秘書官、協和会総務部長、錦州省次長となる。そののち二か年欧米留学。昭和三年川村竹治台湾総督の総督秘書官となる。退職後七年宮崎県選出衆議院議員当選、十年渡満し満州国協和会事務局次長、南満州鉄道株式会社理事、満州電業兼満州電気化学工業理事長を経て満鉄副総裁となり、偉大な足跡を残した。

二十年八月終戦を迎え、後事を処理し、同胞引き揚げに尽力した。

公職追放解除後、電源開発株式会社理事、満蒙同胞後援会長、大東文化大学長および南九州大学理事長、天竜川開

発筆頭理事として実績を上げた。

三十一年第四回参議院議員選挙に宮崎県地方区当選、以来三期十八年間参議院議員として、中央政界に活躍し四十九年引退した。自由民主党に所属し、議会では予算委員長の重任を果たし、本県の発展にも寄与した。戦後は本県保守党の政界リーダーとして調整役を果たし、後輩や同郷人のために尽くした。清廉潔白で誠実、折目正しい人柄で多くの人々に信頼された。趣味は狩猟、剣道、著書に「楽土から奈落へ」「満州国の終焉と百万同胞引揚実録」がある。

五十七年二月十四日、東京都渋谷区代々木の自宅で病没した。九十二歳。東京都八王子市上川霊園に葬る。

⑩1 平原美夫（ひらはらよしお）

スポーツ

一九一一（明治44年）生
一九七五（昭和50年）没

明治四十四年一月十日、父、惣太郎、母、千代の三男として東臼杵郡東郷町山陰に生まれる。

宮崎師範付属小学校を経て宮崎男子師範学校・同校専攻科を卒業。師範学校時代は豪腕投手として活躍し同校野球部の黄金時代をつくりあげた。円盤投宮崎県新記録を樹立。昭和五年から二十八年まで記録保持者として陸上界に名をとどめている。

卒業後、生涯を教育に捧げ、専攻の美術をもって身を立てる決意をし上京して石井柏亭画伯に師事し、昭和十一年に文展に入選（入選作「ビロー樹」は、現在県教育会館講堂に展示）ほか、日本水彩画展、第一美術協会展、一水会展に入選し、絵画団体の双台社会員に推され、また文検図画科に合格するなど美術界にも少からぬ足跡をとどめている。一方、スポーツ面では、昭和二十二年に社会人野球協会から功労賞を授けられ、二十九年には県文化賞（文化功労部門）をうけ、なかでも輝かしい功績は、宮崎県における甲子園出場の快挙であった。

昭和二十二年、高鍋中学校美術教諭として赴任し野球部を創設した。二十三年、学制改革によって高鍋高等学校となるや美術を担任するかたわら弱小な野球部の強化運営に部長監督として他の窺い得ぬ甚大な腐心をした。当時荒廃とした戦後社会の虚無混迷の青少年に光明と夢を与え、協力和合、自主独立の気概を培うには、スポーツに如くものはないと思料し、就中野球こそ最適であることに強く固い信念をもっていた。

爾来、寝食を忘れ、総てを抛って白球による青少年の教育に全精力を傾注した。かくして昭和二十九年に全国唯一の甲子園未出場県であった本県に甲子園出場の栄冠をもたらし強く県民の宿望に応え、在職中に監督として春三回、夏四回、甲子園に出場して名門高鍋の名を築いた。学生野球の父飛田穂洲の一球入魂、快打洗心の精神に傾注したが、自らまた独自の平原野球、白球無私道を創造樹立し、その深く温い愛情と厳しい鍛錬との翼下には、野球のほか美術全般の分野に実に多くの人材俊秀を打出した。

昭和五十年四月十二日逝く、六十四歳、萩原の墓地に葬る。

昭和六十二年四月十二日、高鍋高等学校野球部OB並びに有志一同は、胸像を町営野球場に建立した。

⑩② 平林忠恕

一八五三（嘉永6年）生
一八九一（明治24年）没

政界

嘉永六年五月五日、高鍋藩上江平原の賜邸に生まれる。幼名丑太郎、通称勇記、父忠国、母は三浦氏で、幼い時に両親を亡くした。生まれつき頭脳優れ十八歳のとき、藩は衆人の中から選び、英学を東京の箕作秋坪、尺振八に学ばせた。時たまたま廃藩となりやむなく帰郷し、句読師補、準訓導となり、郷土の子弟教育に従事したが、明治九年宮崎県地租改正係に転じ、児湯郡書記に任ぜられ、上江村戸長となる。十七年県会議員に当選し、村会議員を兼ね、県会議員に再選された。

忠恕はつとに経済に明るく、養蚕業の当地方に適することを洞察し、同志と図り金一、〇〇〇円のきょ出を約し、飫肥地方から桑苗二万本余を購入し、原苗圃を仕立て、飫肥の人平沼氏を巡回講師に雇い、蚕業を普及させ、養蚕方法も伝習させた。なお製糸座繰機械を購入し、六人の女工に製糸法を伝習させ、大いに実績を上げ、好評を受けた。

間もなく高鍋養蚕社長となり、その後繭品評会を開催し生糸輸出に尽力した。

同志とともに、士族授産金の借用を政府に願い出て、十七年一万円を借り入れることに成功し、忠恕は推されて頭取となり「高鍋士族授産場」を設立し、製糸事業を始めた。

まず製糸業の改善策として、座繰製糸を機械製糸に切り替え、女工の養成を行い、蒸気機関を購入し、五十人繰の製糸機械を据え付け、更に繭購入量の増加を図り、鋭意事業の発展に尽力した。絶えざる努力と苦労のため、ついに病魔の冒すところとなり、翌二十四年四月二日、三十九歳を一期として逝去した。平原谷坂墓地に葬る。人々はその遺業を追憶し、同地に大きな記念碑を建立した。

碑文は、秋月種樹の撰である。

三十二年農商務大臣から蚕業振興の功により、金壱封を贈られ、大正五年大日本蚕糸会宮崎支部長から功労を追賞された。現在の高鍋町役場は株式会社高鍋授産場の跡である。

⑩③ 深見和彦（ふかみかずひこ）

政界　一八八六（明治19年）生　一九七九（昭和54年）没

明治十九年九月一日、父、重固（かた）、母、ヒデの長男として道具小路に生まれる。三十八年、宮崎中学校卒業、四十四年、宮崎県庁に入る。大正二年、有吉忠一知事から日向国史編纂主任の依頼をうけ、編纂業務に尽瘁（じんすい）する。喜田貞吉博士、日高重孝の編纂監修によって、七年完成する。昭和七年、西臼杵支庁長、翌八年、県立病院庶務部長を歴任。当時、赤字の病院経営を再建した。二十三年、勇退。翌二十四年、高潔な人格と広い識見、豊富な経験をかわれて県選挙管理委員長に就任。三期十二年のながきにわたり県選挙管理委員長の要職にある。公職選挙法施行以来、選挙の適正管理。啓発活動に貢献された功績は大きい。三十八年、県政八十年史編纂委員として編纂に尽力する。地域にあっては、老人会長、納税組合長として親睦、融和につとめ地域の向上に寄与した。石井十次を尊敬し薫陶をうけ、長年友愛社の理事をつとめ福祉事業に協力する。四十年、地方自治の功労により勲五等双光旭日章を授与される。五十四年一月十八日病没。九十二歳。

妻、しづかは明治十九年十一月十二日、鳥取県境港に生まれる。東京女子高等師範学校文科卒業。四十五年、宮崎女学校の教壇に立ち昭和五年退職するまで二十年間ひたすら女子中等教育に尽力した。戦後、優生保護委員のほか宮崎家庭裁判所調停委員として長年にわたり貢献し、その功労により四十三年勲五等瑞宝章を授与される。

六十年八月十三日病没。九十九歳。深見家の墓地は元祇園にある。

⑩④ 福崎良一

維新功労　　一八四一（天保12年）生
　　一八六八（明治1年）没

天保十二年、上江村平原の平林勘兵衛忠敬の次男で忠恕の叔父、同村松本の福崎浪十郎重明の養子となった。諱を重範という。

年少のころから文武を修め、後藩命を受け江戸に上り曽根氏の門に入って数年間、西洋砲術を学んだ。高鍋に帰ると藩から砲術師範を命ぜられた。

慶応三年徳川幕府は大政を奉還し、戊辰の役が始まった。高鍋藩は武藤東四郎総指揮のもとに鈴木来助を隊長とした高鍋隊を編成し、同四年六月北越征討軍に加わり越後方面に出動した。総勢一一〇名、四分隊編成で京都を出発、北陸路を新潟方面に向かった。

福崎良一は高鍋隊の小隊長として各地に転戦、武功を立てた。越後口に出陣し、明石藩の兵とともに征討軍の先鋒となり、新潟の賊を破り、進んで薩摩兵と協力して山熊田に陣を構えた。福崎小隊長は隊員二十余名を率いて、雷村口の山上の台場を守備した。八月二十八日の朝百余名の庄内兵の猛襲を受け、善戦奮闘して一歩も退かなかった。やがて武藤東四郎らの援護もあって敵軍を撃退したが、高鍋隊からも五名の戦死者を出した。高鍋の北陸戦では最大の激戦であった。この日の戦闘で福崎小隊長の行方が分からず鈴木来助隊長が部下を率いて探したところ、台場から少し距った山林の中で、身に三弾を受け割腹しているのを発見した。享年二十八歳で、郷里の夫人は妊娠中であった。明治二年六月、藩主から知行十五石加増の行賞が遺子に与えられた。墓は町内上江の谷坂、戊辰の役戦没者招魂墓地にある。

⑩⑤ 武藤東四郎

政界　一八三〇（天保1年）生
一九〇五（明治38年）没

天保元年八月三日高鍋横筏に生まれる。十五歳のとき藩主秋月種殷の小姓となり、その後番頭、物頭を経て、三十五歳で総奉行に進み、藩政に参与した。江戸藩邸に勤めること数回、公務の余暇に郡山藩山脇正準に兵法を学び、更に洋式練兵を修め馬術にも長じた。

戊辰の役に当たり、慶応四年六月征東総督の支配下に属し、高鍋隊の総指揮として新潟・山形方面に従軍、各地を転戦し勲功を立てた。

明治元年十一月十六日京都に凱旋した。三年高鍋藩の少参事に任ぜられ、兵賦局判事に補せられた。廃藩置県後、第七区児湯郡高鍋村戸長、第四区大区区長を歴任した。西南戦争が起こると、高鍋地区の大区長の立場から黒水長慥、柿原宗敬らとともに有志を集め対策を協議したが、薩摩方の勢力圏にあり、ついに西郷軍に従うこととなり戦い敗れて官軍に降った。十三年特赦によって許され、帰郷して学校世話係となり十七年十月からは南北高鍋村、蚊口浦村、高鍋町の戸長を勤めた。

明治新政となって旧武士などは世禄を失い、金禄公債証書を受けたが、多くはこれを消費し困窮する者も多かった。十二年七月金禄公債を資本にして、高鍋に保存株式会社が設立され銀行商社業務を通して士族救済が図られ、二十六年一月武藤はその社長に推された。

「君の事に当るや、任の大小、位の高下を論ぜず、必ず其力を尽す。故に其事みな能く成績を挙ぐ。然れども其の健康の漸く衰ふるや、自ら予知する所ありしが如く、逝去の前年秋月子爵家の家令を辞し、没年の春、製糸会社の取締役を罷む。君少より篤志道を学び、実践躬行、至誠人を感動せしむること甚だ深し、君が日常の行動は即ち謂はゆる武士道その侭なりき」（高鍋郷友会報告第六十四号）。以上は武藤東四郎小伝の一節である。武藤は戊辰の役に高鍋隊の総指揮を勤めたこともあって、二十六年以降高鍋招魂社（現在の護国神社）神職を勤めた。肝臓を病み三十八年八月二十四日没した。享年七十六歳。墓は高鍋町上江の竜雲寺墓地にある。

㊱ 本多慶次郎

芸術　一八八二（明治15年）生　一九六六（昭和41年）没

茶道裏千家教授。明治十五年一月十四日、香川県仲多度郡白方村（多宝院）に生まれる。

多宝院は、京都醍醐三宝院の直末にして高松・丸尾・多度津等の各藩主帰依篤き寺院で、茶の儀式の機会も多く幼少の頃から環境のなかに育ち趣味を解していた。

明治三十九年十月、粟島商船学校機関科卒業。遠洋航路汽船機関長。大正三年五月、上毛モスリン株式会社岐阜工場最高技師。十三年十二月、旭絹織会社技師第一運転課長兼建設課長。昭和二年三月、旭絹織株式会社（旭化成の前身）延岡工場建設のため派遣。四年四月退社。

大正八年から昭和元年まで、大阪市天王寺区紅葉寺橋口宗園宗匠につき師事、昭和元年高鍋に転住し地域の人々に茶道を教授。七年三月より高鍋高等女学校、宮崎高等女学校、宮崎女子師範学校、教員養成所、警察官養成所等の茶道教授として子弟の教育に傾注され、また各学校等に茶器一切を提供するなど学校教育に寄与された功績は顕著である。昭和七年十一月、茶道裏千家家元より茶道教授。茶名〝宗城〟を下付さる。十四年、宮崎市南広島通二丁目に真・行・草の正規の三室を建て、〝無門庵〟を命名して専念し茶道普及開発に努める。

終戦後、高鍋町（御屋敷）にひきあげ老後の余生をおくるとともに〝無門庵〟も高鍋に移す。

宮崎神宮。宮崎護国神社、宮崎八幡宮、生目神社、都城神柱神社、延岡今山八幡宮、延岡今山大師、高鍋護国神社等に慰霊献茶式の儀式をあげる。

昭和二十七年十一月、茶道裏千家淡交会宮崎県支部を設置し爾来支部長、幹事長の職を執りつつ、県内各地に散在する茶道教授を毎月一回あつめ茶道の奥儀の訓育に努める。

昭和二十七年十一月支部発足以来四十一年一月退任するまでながきにわたって茶道に貢献され、三十三年には県文化賞（文化功労部門）をうけた。

茶道の研究をつみ四十一年ひたすらにこの道に生き茶道の普及と後進の指導に尽力した功績は大きい。今日もその門弟たちが各地で活動をつづけている。

昭和四十一年十二月、八十五歳で逝く。郷里の先塋に葬る。

⑦ 本田（ほんだ） 親（ちかし）　一八四四（弘化1年）生

産業　一九三三（昭和8年）没

弘化元年九月十五日藩士の家に生まれ、幼にして茶道、文武両道に秀で、高鍋藩（種殷、種樹、種繁）の三代に仕え、特に秋月種樹公の側近として知遇を受け功績大であった。

彼は治水管理こそ増産の基であるという藩主の心を受けとめ、高鍋上江の灌漑用水路の建設に心血を注ぎ、幾多の困難を排してその完成に至る六十年間、用水路の維持管理に務め、いまなお農業用水路として重用されている。

その他、高鍋上江の町村合併、高鍋無尽会社の建設のために努力した。

なお、戊辰の役、西南の役に従軍する等、昭和八年六月十四日九十歳で没するまで郷土のために努力をつづけた。

また、彼の一生を徹しての信条の第一は親につかえて孝であれという信念がすべての根底となっていた。物を大事に使えば長持ちするという道理を、親から受けた体をはじめとし、家財道具は勿論、公共諸事に至るまでかたく応用したという。

第二は公に対して忠実であれということであった。君公に対しての忠節は勿論のこと、敬の心を根幹として誠実一路九十年を一日の如く過した立派な生涯であった。

黒谷の愛宕神社入口に本田親灌漑功績記念碑が建っている。高鍋町田の上墓地に葬られた。

⑧ 三沢（みさわ） 立身（たつみ）　一八四八（嘉永1年）生

産業　一九二一（大正11年）没

嘉永元年十一月十一日鳥取市立川町に生まれる。幼名壽太郎、後音次郎と改め、長じて立身と改名、諱は弘宣、扇山樵夫と号した。

明治十六年六月、宮崎県再置に際し、初代県令田辺輝実に従って来県、県六等属　学務課県庶務課のことに従い官報報告事務を兼任、統計、衛生、地理、土木、勧業、駅逓、通信の諸係りを転歴、この間に天神山遊園の創設、宮崎神宮の修営拡張を計画、前者は宮崎県における公園の始まりでもあるという。

明治二十一年七月一家を挙げて高鍋に移住牧畜を始め。二十二年有志とともに県有種牛を借入れ牛種改良に取組み牛馬畜産協会を組織、二十五年農業改良要項を高鍋・上江

両村長におくってその覚醒を促し、十二月上江農業組合長、二十六年日州勧業会児湯支部助役（幹事）当選、農業改善に関する調査・研究・勧奨督励に東奔西走する。三十三年農会令が発布され、児湯郡農会副会長となり、のち六十四歳で職を辞するまで十一年の長きに渡り再選される。勧業助役より数えて十八年の長いあいだ郡農会の実質的首脳であった。この他数々の役職につき、この間提唱して実現したものに、系統農会の組織、県立農事試験場の設立、耕地整理の実行などがある。また、各種講習会を開いて旧い習慣から抜けでようとしない農業者を相手として、常に新生面を打開する努力を続け、郡内農事の改善進歩に貢献した。その功績に対して、三十七年五月大日本農会総裁賞を受賞、四十三年三月緑白授有功章、五月には全国篤農家会に招かれ、また愛知県農会の編纂の全国篤農家列伝に名を連ねる。

大正十一年十二月二十四日大阪の次男糾方にて没す七十四歳、遺骨は鳥取市芳心寺の同家の墓地に眠る。

⑩⑨ 三沢糾

教育　一八七八（明治11年）生　一九四二（昭和17年）没

鳥取藩士三沢立身の次男に生まれる。明治二十一年七月家族と共に高鍋の高月に転居、高鍋学校から宮崎中学校、第五高等学校、東京大学哲学科へと進み、明治三十七年七月、文部省より教育学研究のため米国クラーク大学に留学を命ぜられ、三年後哲学博士の学位をえて欧州を経由、明治四十三年帰朝、広島高等師範学校教授、大正四年和歌山県立海草中学校創立されるや校長となり、わが国中学初の背広型制服を定め、新しい教育感覚を示した。大正七年大阪府高津中学校長より大正十四年台北高等学校々長に栄転、昭和四年より同八年まで京都大学学生課長、その後東京成城学園校長となる。昭和十五年満州（今の中国東北部）ハルピン学院長となり現地の子弟の教育に臨んでいたが、健康を害して旅順にて療養につとめたが昭和十七年二月六十四歳で没した。

⑩ 水筑弦太郎　一八四四（弘化1年）生

勤王志士　一八六八（慶応4年）没

弘化元年高鍋横筏に父種節（後に秋月姓）母久子（鈴木百助長女）の長男として生まれる。幼名兵太郎、後に弦太郎と改めた。諱は弦、字は佩弦と称した。明倫堂に学んだが、安政五年、十五の時、豊後佐伯の秋月橘門の家塾に学んだ。弦太郎は正直寛厚で人情に富んでいても、秀才型でなく鷹揚で目立たないほうであったが、この塾の三年間に人柄が一変し、家郷の人々も驚いたほどの努力家であった。帰郷後再び明倫堂に入学し、やがて藩主種殷の小姓となった。一年足らずで遊学を命ぜられ、元治元年（二十一歳）三好充太郎（後に退蔵）とともに江戸に赴き、紀州藩の儒者渡辺魯輔（荘盧）に学んだ。更に慶応三年五月からは安井息軒の三計塾に入った。当時勤王佐幕で世情騒然としていたから、弦太郎のような青年学生も国事に力を尽くした。同年十二月の末京都へ使者として赴くよう命ぜられた。しかし出発前日の二十五日、幕府の江戸薩摩藩邸焼き打ちがあり、同邸の副留守居をしていた脇田市郎が高鍋藩に救いを求めてきた。このとき弦太郎は鈴木来助とともに脇田を救い出すことに尽力、脇田を従僕に仕立て江戸を後に京都へ向かった。しかし駿河の原宿で捕えられ江戸伝馬町の獄につながれた。翌年二月一日から疫病にかかり、五日には釈放されたが、慶応四年二月十日、二十五歳の若さで世を去った。

江戸麻布の崇厳寺に葬ったが後年改葬して、墓は高鍋高月の大竜寺墓地にある。明治二十四年靖国神社へ合祀せられた。

⑪ 水町元　一八六六（慶應2年）生

軍人　一九三六（昭和11年）没

慶應二年十月二十四日、道具小路に生まれる。幼少にして聡明。明治十五年、高鍋小学校を経て晩翠学舎に入り漢学を修め、十六年、東京攻玉社に学び、十七年、海軍兵学校に入り二十年七月業を卒え少尉候補生として実地練習のため筑波艦に乗組み北アメリカ、南洋諸島に遠洋航海、二十一年七月、帰朝、二十二年八月、少尉、二十六年十二月、大尉に任ぜられ筑波分隊長、二十七年六月、浪速分隊長として豊島・黄海海戦に参戦、二十八年三月、日清戦役の功に因り勲六等功五級に叙せられ瑞宝章を賜わ

る。同年十二月、呉水雷隊攻撃部艇長、三十年五月、吉野水雷長、三十一年十月、少佐、三十二年三月、ドイツ出張、三十三年八月、帰朝、三十四年五月、勲五等瑞宝章を賜わる。同年十月、海門艦長、三十六年五月、村雨艦長、日露戦役起るや三十七年二月六日旅順に向い同年十二月二月まで警戒封鎖につとめ偉大な勲功あり。同年七月、中佐、勲四等瑞宝章を賜わる。三十八年一月、呉海兵団副長、同年六月、吾妻副長北遣艦隊として従事、日露戦役の功に因り勲三等旭日中授章功四級を賜わる。四十年七月、赤城艦長、四十一年一月、武蔵艦長、同年九月、淀艦長、十二月、韓崎艦長、四十二年二月、対馬艦長、五月、第七駆逐隊司令、四十三年三月、大佐、十二月、常盤艦長、四十四年一月、千歳艦長、六月、第十三駆逐隊司令、大正元年十二月、春日艦長、二年四月、丹後艦長、十二月、鹿島艦長、三年十二月、待命、四年十二月、予備役、少将に任ぜられ従四位に叙される。十三年十月二十四日退役となる。

品格は、極めて高潔で泰然として小事にこだわらず、寛大で愛情に富み、つねに後進の指導育成につとめ多くの人々から信頼敬慕される。

つねに郷土を思う心あつく、退役後帰郷するや財団法人高鍋中学校理事長・郷党会長となり高鍋中学校の創設、地方文化の向上に貢献した。とくに、高鍋中学校の設立とその経営発展とに尽瘁貢献せられ、設立事務長となりて自ら率先して最も困難とする資金調達の衝にあたられまた敷地の買収に、校舎の新築にその心身を労せられる。また理事長となりて東奔西走刻苦経営時には私財を投じ、ひたすら中学校発展に精力を傾注される。

昭和六年四月、職を辞し挙家東京に僑居。十一年一月十八日病没。享年七十一歳。田ノ上墓地に葬る。

⑫ 三好善太夫

一七〇四（宝永1年）生
一七六〇（宝暦10年）没

教育

宝永元年月日不詳、父は市弥、母は内田主水の娘、その長男として高鍋村宮田に生まれる。三好家は元、安芸国広島三好郷の出で、祖父門田治部右衛門が第三代種信のとき召し抱えられた。後、姓を三好に改めた。

諱は重道、藤馬と称し、後に善太夫と改めた。初め祖父治部右衛門が善太夫と称し、父市弥も、重道も善太夫と襲名したので、重道は三代目の善太夫である。上杉鷹山に二度の訓言を奉ってから重道が喧伝され、善太夫といえば重道を指すことになったのである。

重道は享保十一年二十三歳で家督を継ぎ、同十五年者頭、

元文二年九月一日三十四歳で用人に任ぜられ、宝暦五年六月九日、五十二歳のとき家老に就任している。宝暦六年九月稽古改めすなわち、藩の教育について三か条の意見を具申し、何事も根本を立てることが肝要であるといっている。宝暦九年三月、種美の二男松三郎すなわち後の鷹山が米沢藩上杉重定の養子となる内約が調い、八月には秋月家の親戚筋に当たる人吉藩の相良遠江守が急逝し、同藩の家老万江長右衛門から、末期養子についての懇請を受けた。善太夫は種美の三男頼完を養子とするように努め内約が調った。同年十月、人吉藩から頼完を迎えに用人豊永清右衛門が人数を召し連れて来た。善太夫は家老として多くの供を召し連れて人吉まで送り届けその行を盛んにしている。人吉から帰りようやく政務の余暇を得た善太夫は、年わずかに九歳の若君松三郎が上杉家に入ることを喜ぶとともに、責任の容易ならぬことを察し、「恐れながら」の語で始まる一書を、「成長の後も折節御覧下されたい」と誠心をこめて書き記してこれを呈上した。また宝暦十年八月、松三郎が桜田の上杉邸に引き移るときにも、再び一編の訓言を贐にしている（鷹山略伝参照）。その二書には、善太夫の闇斎学の深い教養と高い識見、真摯な人柄が行間ににじみ出ている。鷹山は生涯二通の書をそばから手離さなかったという。現在も上杉家に保存され、その原本のコピーが高鍋図書館にある。善太夫はその年の十一月二日江戸で没した。享年五十七歳。その墓は、高鍋町の竜雲寺墓地にある。今も米沢市から高鍋を訪れる人々は善太夫の墓にぬかずくのが常である。

⑬ 三好退蔵

政界　一八四五（弘化2年）生　一九〇八（明治41年）没

弘化二年五月十二日、高鍋村筏、田村極人質勝の三男として生まれる。母は綾部氏、長兄夭折、次兄は兵衛義勝。諱は重毅、幼名充太郎、退蔵と称し、宮田の三好家を継ぐ。少にして明倫堂に学び、日高耳水の教を受け、十二歳で大試験に抜群の成績で合格し、白銀五両の賞を受け、元治元年二十歳のとき江戸に遊学し安井息軒に就いて学び、家兄義勝とともに三計塾の異才とされた。慶応三年世子秋月種樹の若年寄辞任問題に奔走周旋に努め、その途次薩藩の徳田彦二を斡旋して藩兵訓練の改革を図るなど、幕末藩事に鞅掌し、明治元年二月二十四歳で大目付と、

九月用人に抜擢された。明治二年徴士として維新政府に出仕し、待詔局判事試補、次いで待詔局参事、待詔院判官、集議院権判官に任ぜられた。その後帰藩し少参事兼大観察となり、廃藩後、厳原県権大参事、伊万里県小参事に任ぜられた。明治六年五月司法省に入り、山梨、東京、鹿児島の各裁判所の判事となり、同十年一月大審院詰、西南戦争が勃発すると長崎へ派遣され、元老院議官の旧藩主秋月種樹と連絡を取り、旧高鍋藩の救済を謀った。旧高鍋藩は日向国内での孤立を避け、高鍋隊を編成して薩軍に投じたため、いかんともし難く、情勢の推移を見守るしかなかった。また、旧藩の指導層の人々の救出も失敗に終わった。同年四月九州臨時裁判所出張を命ぜられ、征討総督宮の指揮を受け、騒擾国事犯の処理に当たった。明治十二年三月六日横浜裁判所長、十三年九月民事局長、十四年二月代言人試験委員、十五年二月参議伊藤博文が憲法調査のため欧州に派遣されるのに随行し、終了後も引き続き司法制度調査のためそのまま滞在し、十八年四月帰朝。同年七月司法少輔、二十一年十一月東京控訴院詰となり再びドイツに派遣され、二十二年四月帰朝して大審院評定官に任命された。二十三年八月二十一日大審院検事総長に任ぜられた。二十四年五月十一日来遊中のロシア皇太子（後のニコライ二世皇帝）を大津市内で巡査津田三蔵が襲って負傷させるという、いわゆる大津事件が発生し、国を挙げて憂慮した。三好は検事総長として、刑法第百十六条の適用の論告をせざるを得ぬ苦しい立場に立ったが、結果的には大審院による無期徒刑の判決が下され、大審院の判決であるがゆえに一審終結となり、間接的に司法権の独立を守ることとなった。同年六月三日大審院判事ならびに大審院長に補せられた。二十九年十月七日願出て退官し、同月十日錦鶏間祗候仰せ付けられ、正三位に叙せられ、また勅選による貴族院議員となり、翌三十年三月、弁護士名簿の登録を受けて民間法曹界に投じ、訴訟事務に執掌し、東京弁護士会会長となる。

年若くて儒教を学びその造詣もすこぶる深かったが、第二次洋行中感ずる所があり、敬虔なキリスト教徒となった。明治四十一年八月二十日、神奈川県国府津の自邸で没した。従二位勲一等、享年六十四歳。墓は青山墓地にある。

⑭ 森　宣著

教育　一八三〇（天保1年）生　一八九二（明治25年）没

天保元年二月十五日、上江平原に父吉太郎の長男として生まれ、幼名を仲太と呼び後に盈之進と改めた。字は子誠、宣著は秋月種樹公から賜った雅号である。

森家は漢学の家柄で宣著の祖父森辰右衛門は篤学のゆえをもって、徒士から中小姓に昇格、宝暦七年野別府代官に登用された。

宣著は江戸に遊学し、寛政三博士の一人古賀精里の孫勤堂の久敬舎に学んだ。学成って帰郷したが、後再び江戸に出て学び造詣を深めた。江戸遊学中の嘉永五年鈴木百助に城勇雄とともに寄宿舎設立の要を進言し、後に明倫堂の寄宿舎切偲楼が実現する。明倫堂の学風は山崎門から古賀門に移り、宣著は横尾敬、財津吉一、横尾栗に次いで城勇雄とともにその教授となった。

明治維新後、高鍋に塾を開き子弟を懇切に指導したので、郷党の人々は深く敬慕した。更に串間や高岡にも私塾を営み、教育に力を尽くした。その後宮崎県書記官高田善一に認められ、明治二十一年には、当時宮崎にあった私立同志鬚の教授となり、多くの人材を薫陶した。

宣著は資性恬淡、寡欲正直で常に典籍堆積の中に読書し、その部屋は足の踏む所もなかったという。読書は精読型で、どの書籍も朱線がいっぱいであった。清貧に甘んじ酒を愛し、焼酎を飲みながらも読書を続ける熱心さであった。また屋敷内に珍樹珍花を植えこれを眺めて楽しんだ。屋敷の生垣に植えたつばきは宣著没後も長く残り、近隣の人々は「宣著つばき」と呼んで親しんだ。

明治二十五年九月十九日病没、享年六十三歳であった。門弟相謀り、墓碑を立て盛大な祭典を営んだ。墓碑は町内上江谷坂墓地にある。

⑮ 安田尚義

教育　一八八四（明治17年）生　一九七四（昭和49年）没

明治十七年四月十九日、上江村西平原に父信義、母あぐりの長男として生まれる。家は世々高鍋藩の絵師を勤めた。公立高鍋学校、東京郁文館中学校を経て、

明治四十年早稲田大学卒業。函館商業、鹿児島一中の教師となり地理歴史を担当、一中では野球部長となり全国中学校選抜野球大会にも出場した。

戦時中の昭和十五年七月から鹿児島県史蹟主事となった。これより前、大正十一年六月太田水穂の主宰する「潮音社」に加入、短歌を歌誌「潮音」に発表、昭和二年には鹿児島市において歌誌「山茶花」を創刊、これを主宰する一方、同四年には潮音の選者となり、八年十一月歌集「群落」を潮音社から発行した。

終戦の年六月、高鍋へ帰住、以後高鍋町農地委員（地主代表）、熊本放送局九州ラジオ歌壇選者、高鍋町選挙管理委員会委員長、宮崎地方裁判所司法委員、宮崎家庭裁判所参与並びに調停委員と、日向日日新聞短歌欄選者となり、二十五年十一月から宮崎県文化財調査委員（後に文化財専門委員）を勤める。二十七年日向文庫刊行（日向興業銀行記念事業）に当たり、編集委員となり「上杉鷹山」を執筆、二十八年宮崎県文化賞を受けた。続いて同文庫の「秋月種茂と秋月種樹」を武藤麒一の共著として刊行するほか、三十年一月には宮中御歌会始めの儀に陪聴の光栄に浴し、翌年には第二歌集「尾鈴嶺」を発刊した。

このほか著書に随筆「森の男」「萱島高伝」「安田尚義著作選集」「高鍋藩史話」「虔々集」などがあり、四十三年一月一日高鍋町名誉町民の称号を贈られた。なお歌碑は高鍋農高正門、茶臼原石井十次墓地入口、鹿児島市城山頂上、鹿屋市古江峠、鹿児島県郡山町花尾神社境内などに建てられている。農高の歌碑は次のとおりで三十四年五月建立。

尾鈴山ひとつあるゆゑ黒髪の
白くなるまで国恋ひにけり　　尚義

四十六年六月高鍋史友会を設立、初代会長となり、町公民館の郷土史講座にみずから講師として勤め孜々としてうむところを知らなかった。四十九年十二月二十四日病没、享年九十一歳。高鍋町民葬をもって葬られる。墓は高鍋上江の谷坂墓地にある。

⑯ 安田李仲（やすだりちゅう）ほか

芸術

安田李仲（初代自画像）

町内上江西平原の安田家は、代々藩の絵師として仕えた。安田家資料により画業を中心に人物伝を記す。

○初代義成（よしなり）

利左衛門、絵師狩野尚信に師事し、師より「狩野李仲」と改めるよう名を賜った。以来代々画号を「李仲」と名のるようになった。「自画像」の作が安田家に保存されている。元禄九年十二月五日没した。

○二代義正（よしまさ）（正信ともいう）

利左衛門、後に李仙と号した。宝永三年十二月十三日没した。

○三代義行（よしゆき）（信行ともいう）後に義貴（よしたか）

利左衛門、「不動明王図」が安田家に伝わっている。延享四年四月十五日没した。

○四代甫行（ほこう）（利平次、後に利忠）

修竹齋と号した。「涅槃図」（称専寺蔵）「竹と鶴の図」（安田家蔵）があり、気品のある端正な画風を伝えている。明和八年九月十九日没した。

○五代義方（よしたか）（後に義門（ぎもん））

利平次、李仲と改め、好竹斎と号した。安永十年五月、綾部長英等と共に弾琴松の碑を立てた。寛政四年木城の比木神社が大風のため破壊したとき、祝詞殿の天井画も損傷したので苦心の末これを復元、「白鷺の図」（安田家蔵）「源氏物語絵巻（写）」などの作品が残っている。文化十二年十二月十六日没した。

○六代義為（よしため）

利平次また利左衛門、後に李仙と号した。天保三年十月五日没した。

○七代守義（もりよし）

橋口無尽院の二男に生まれ、六代義為の娘婿となり安田家を継ぐ。兵吉後に李仙、閑鶴斎と号した。花鳥画の名手と称され典雅な画風で知られている。「聖徳太子像」（称専寺蔵）「美人画」「袋戸下絵」（安田家蔵）などの作品が残っている。天保十二年一月二十六日没した。初代義成・義正・義行・甫行・義方・義為・守義の墓碑は船塚墓地にある。

○八代守世（もりよ）

利平次といい後に李仲、閑春斎と号し竜川と称した。

画業の主なものを挙げると、「折衷和漢図」は守世の最高の作品と言われ、「群鶴図」は六十歳円熟期の典雅な秀

安田守世（竜川第八代）

作、そのほか「仙女西王母図」は守世の最晩年の作、「三国志関羽図」などが残っており、いずれも安田家の所蔵である。絵巻物「後三年の役図」は「種樹」の署名があるが、竜川の描いたものと言われている。現在の木城町比木神社の天井絵「双竜の図」は竜川の作である。

明治四十一年五月十九日没した。墓碑の石は生前種樹からいただき、墓碑の文字も同公の書である。町内上江の谷坂墓地にある。

⑰ **山内仙介**　一六八二（天和2年）生
教育　一七六九（明和6年）没

天和二年十月十一日生。源姓諱は貞良。幼名は次郎吉。長じて竹右衛門と称し、後更に仙介と改め、日南と号した。その先祖は出羽貞綱、毛利氏の臣で、天文年間毛利氏の女に従って秋月家に仕え、秋月家の転封に従い福嶋に移った。仙介は元禄十一年十七歳のとき、江戸に遊学すること四年、同十六年尾張（名古屋）の泰雲寺の僧湛海に学び、更に宝永二年京都に転学し、学業大いに進み、宝永四年正月二十九日藩主種政に召され、中小姓に列し、知行三十石を給せられた。種政、種弘、種美三代に仕えて経学を講じ、藩学の祖といわれる。室は梁瀬氏、六男二女があった。孫貞昌は明倫堂師範となった。明和六年一月二十七日没した。享年八十八歳。墓は元祇園墓地にある。

⑱ **山内貞昌**　一七五二（宝暦2年）生
教育　一八〇〇（寛政12年）没

宝暦二年（月日不詳）高鍋に生まれた。父は貞徳、通称琢磨、母は永友氏。源姓、字は林伯、冨太郎と称した。若いとき、藩主種茂に従って江戸に出て萩原恪斎に師事した。安永六年七月、藩校の建設が始まると、財津吉恵、千手八太郎などとともに建設に参画した。翌七年二月二十四日、明倫堂が完成し開講式が行われ、財津吉恵、千手八太郎とともに師範（後には教授という）に任命され、大学校著察斎において「大学序」を講じた。ときに二十七歳であった。安永九年京都に遊学を命ぜられ、宇井小一郎黙斎ならびに山田某に学び、天明六年高鍋に帰り、再び師範となり、藩

臣の子弟の教育に努めた。寛政九年病気のため、冨太郎出勤まで田村平太左衛門正明が師範仮役を勤めた。同年七月に平太左衛門は大目付へ転役のため、綾部恒兵衛が師範仮役を勤めた。冨太郎は同年九月病が癒えて師範に復帰したが、翌十年再び病み引退のやむなきに至った。寛政十二年六月二十九日没した。享年四十九歳。元祇園の先塋に葬った。関氏を娶ったが、子が無く、姉妹と二弟があり、姉は終身嫁がず、妹は山村氏の嫁した。弟の貞信が兄の跡を継ぎ、次弟貞寛は福嶋の山内貞英の跡を継いだ。

⑲ 山田容庵

一七九二（寛政4年）生
一八六二（文久2年）没

医学

綾部六之烝の三男政道が山田家の養子となり容庵と号した。山田家は代々医学を以て藩主に仕え信任も厚かった。この頃藩の医家の子弟は江戸、京都、大阪の三都で五ヶ年の遊学の義務があったが、天保十五年八月稽古所内に医学館が出来て医師の教育が始まり、十月医学研修の規則を作り、平嶋保節、荒川環と共に医学研修の係りに任命された。

種任、種殷、の平常の診察及び、奥医並びに楽昭院御付医師、等勤める傍ら、安政二年六月藩の許しを得て、荒川環と共に川北郷で種痘を行った。

安政五年五月十八日隠居を許され、藩公も紋服を与えてその労をねぎらった。文久二年閏八月十九日没享年七十一歳であった。墓は元祇園にある。

⑳ 山名勝重

一八七六（明治9年）生
一九五九（昭和34年）没

医学

山名勝重は眼科医として特に有名。明治九年十一月一日高鍋町南高鍋筏小路山名重三の二男として生まれる。幼い時に両親を亡くし、祖母に養育される。生来身体虚弱であったが、意志は堅固であった。二十四年高鍋小学校卒業後長崎市私立以文中学校入学、成績優等にて翌年特待生として月謝を免ぜられる。卒業後第五高等学校医学部に入学、成績優秀につき卒業後直ちに特選により、同校助手を拝命した。その後長崎県玉ノ浦産婆学校勤務、やがて大村私立病院副医院長に迎えられた。三十二年熊本師団志願兵となり三等軍医に任ぜられ、除隊の後木城村に開業

し、やがて東京遊学を志し、東京帝国大学河本眼科教室において眼科を専攻し、かたわら開業医大西克知博士に師事し研究を積んだ。三十四年高鍋町小丸に眼科医院を開業した。眼科医としてのすぐれた技量は広く伝わり、遠隔の地から診療を求めて来る者も多かった。三十五年以後は児湯郡医師会副会長、医学会長、児湯郡医師会長に就任、昭和七年まで、宮崎県医師会評議員、副会長を歴任し医師会発展のため尽力した。

また経済的識見も高く、株式会社小丸社取締役、什二株式会社取締役、延岡電気株式会社取締役、舞鶴劇場代表者、高鍋郵便局長心得、旧株式会社宮崎銀行取締役などとなり金融界にも活躍した。教育面にも熱心で旧高鍋中学校（現高鍋高校前身）設立に物心両面にわたり貢献、財団法人高鍋中学校理事となった。

十一年十二月嗣子山名重文に眼科医業一切を譲り余生を専ら自己本業の趣味に生きた。紫川と号し、絵画、彫刻、骨董、詩文を楽しみ、紫川絵日記、高鍋城図などの遺作がある。三十四年四月四日、病魔のため八十四歳で死去、高月安養寺墓地に葬る。

⑫1 横尾（よこお） 敬（けい）　一七九六（寛政8年）生　一八七六（明治9年）没

教育

寛政八年月日不詳、松岡喜作の第二子として生まれ、横尾三右衛門の養子となる。字は直卿、仲治と称し鐸峰と号した。鐸は大鈴で尾鈴山を意味している。人となり沈毅にして学を好み、家は元貧しくみずから耕作していたが、常に書物を持参し少憩ごとに読書して労苦を慰め、筆耕して灯油を買い、灯油がなければ松明をともして読書するという風であった。義父母には実の父母より手厚く仕え、妻子に対してもやさしく、声音を改めることなく、近隣の人々は皆、及び難い人物として敬意を払っていた。初め千手八太郎廉斎、大塚観瀾に就いて学んだが、藩主種任は仲治を江戸の古賀侗庵の門に学ばせた。修業数年で藩に帰り、文政十一年二月二十五日、明倫堂助教を命ぜられ、教授に支障ある節は代講もするよう命ぜられた。従来徒士で助教になった先例はなく初めてのことであった。

天保五年三月十八日一代小給に進んで明倫堂教授に任ぜられ藩主の侍講を兼ねた。嘉永四年十一月八日世襲小給となり、晩年には藩士としては最上級の給人となり物頭となった。異例の抜擢（ばってき）であった。仲治は教職にあることほとんど四十年、厳もってみずから持し、寛もって人を導き、過激奇異の行いを好まず、終日穏やかにして競うことなく、諸

生からうやまわれたばかりでなく、藩内すべてから尊崇され、権臣猾吏も謹んでその言に従ったという。寄宿寮の切偲楼を創立し、学校予算を増加し、門閥の者が年若くして要職に就くことをやめたのもその建議によったのである。年六十を過ぎ、しばしば隠退を請うたが、そのつど慰留されている。ある日、校内で突然中風を発し初めて致仕を許され、養老料を給せられた。教授の後任には、文久三年八月十九日に門弟の城勇雄が任命された。仲治は家居して病を養い、風月に吟嘯して性情を養い悠然として命を待った。藩主種殷は大事があれば必ず仲治に諮問し、ときに城内に召し、あるいは酒食をその家に贈り優待は少しも衰えなかった。明治九年十月三十日八十一歳で没した。瑞松山竜雲寺墓地に葬り、城重淵勲が碑銘を撰み田村義勝がこれを書いたが、今は宮崎市春の山の墓地に移されている。その著書に読本藩実録二十二巻、拾遺本藩実録十一巻があり、ほかに明倫堂記録に教授横尾仲治の名で提出した存寄という形式の諮問の答申書が数通ある。またその家に自著の年譜があったが、碑銘撰定の際これを失ったという。

(122) 横尾栗（よこおなのる）　一八二〇（文政3年）生　一八九七（明治30年）没

教育

文政三年月日不詳、父敬、母藤子の長男として上江村松本に生まれる。字は希寛、初め信太郎と称し後、潜蔵に改め、松堂と号した。天保十二年江戸に出て古賀侗庵に学ぶこと三年、弘化三年一月父仲治病気により助教となって代講した。早く経済に志し文をもって名を成そうと欲しなかった。かつて会計官任命の候補となったが、数字に明るくないということで保留された。栗はこれを聞き発憤して数学の蘊奥を究めた。壮年になって文学に偏するを憾み、示現流の剣術を修め、その奥儀を極めた。かつて高鍋藩の兵学がじゅうぶんでないのを歎じ、甲州流、越後流諸家の兵学を学び、藩主はその志を喜び、兵学研修のため江戸に遊学させた。

しかし洋法の最も優れていることを知り蘭学を学んで洋法を究めた。帰国して数年地方官を歴任し、文久三年藩の兵制改革に携わり、上江屯長となった。明治元年の戊辰戦争には八月羽越遠征の高鍋隊の救援隊を指揮し到着したときは既に鎮定されていた。明治二年三月明倫堂教授に任ぜられ、同年九月、公選によって左局権大属となり、廃藩後、宮崎県第二十四区長となり、郡制が敷かれた際は児湯郡の初代郡長に補せられた。明治十年の西南戦争のときは、そ

の子炳（九烈士後判事）とともに節を守って屈しなかったため、怒った薩将坂田諸潔は、旧城内の仮牢に秋月種節、黒水長慥らとともに幽閉し、高鍋陥落の日、刺客を送ってこれを切ろうとした。幸いにも政府軍が早く入城し、薩軍は倉皇としてこれを棄てて去り、九死に一生を得た。明治三十年一月十九日、病のため没した。享年七十八歳。竜雲寺の先塋に葬ったが後宮崎市春の山の墓地に移した。

⑫③ 横山政幸

政界　一八八九（明治22年）生　一九七一（昭和46年）没

明治二十二年五月九日、高鍋町堀之内の横山和一の長男として生まれる。

高鍋農学校に学び明治三十九年三月卒業、四十年八月八日、宮崎県農事試験場の職員となり、技手として農事改良に尽力する。特に菌虫主任として研究調査を進めていたが、感ずるところがあって、大正九年二月二十九日に退職して同年宮崎市に新設された日向殖産株式会社へ入社する。努力と人望の厚さで昭和十七年には社長となる。

十八年九月高鍋町民の要望にこたえ、高鍋町、上江村合併後の第三代、推薦による町長に就任した。

そのころは、大東亜戦争の終末期にあたり、食料や物資の不足はたとえようもないほどであった。この苦しい町民の現実を少しでもやわらげようと必死になって町政執行に専念したが二十年八月遂に終戦となり、占領軍の統治下となる。その中にあって農地改革事業をはじめ戦災復旧の方策、終戦直後の台風被害の処置など、かってない苦難の町政に鋭意努力を重ねたが、戦後の公職追放により二十二年退任のやむなきにいたる。

二十二年五月、高鍋製油株式会社が設立されると、その代表取締役社長に就任した。二十七年六月社名を高鍋油脂工業株式会社に変更し、現在に及ぶ発展の基礎を築きあげた。

その間、二十六年より二期六年高鍋町農業委員会委員をつとめる、また、三十二年十二月高鍋町議会議員補欠選挙に当選し高鍋町議会議員となり再び町政に参加した。更に三十四年県議会議員に当選し県政の場に活躍したが、四十六年九月三日死去、享年八十三歳、堀之内霊園に葬る。のち、令弟横山清松の眠る宮崎霊園に移葬された。

⑫④ 横山清松

財界　一九〇〇（明治33年）生
一九八〇（昭和55年）没

実業家横山和一の四男として堀之内に生まれる。明治三十八年四月高鍋小学校へ入学、その後旧制高鍋農学校を卒業したが期するところありて、大正五年長崎鎮西中学校四年へ編入学、長崎高等商業学校へと進み大正十年同校を卒業し、十四年グンゼ製糸株式会社へ入社、昭和二十七年同社取締役となり、経営形態の改善と製造設備、技術の改善をはかり、製品の品質向上に貢献し、特にシームレスストッキングの技術と設備を導入しシームレス時代の幕開けを行った。四十年同社取締役社長、次いで四十五年同社取締役会長、のち相談役となる。

日本婦人靴下協会会長にも就任し、婦人靴下業界の方向を設定し協調を唱導して業界全般の繁栄を図った。また蚕品種を改良し独自の自動繰糸機を開発して製糸業を近代化していった。繰糸機は海外に輸出するほか繊維加工の各部門の改善育成と事業の拡大を図った。

さらに、宮崎県から工場進出の要請があり、四十五年小林市に九州グンゼ株式会社を設立し、須木村と高崎町に分工場を設置した。

その他日本繊維機械学会評議員、大日本蚕糸会理事、経済団体連合会理事等多くの役職につき、蚕糸功労賞を受けた。五十五年二月二十一日宮崎市において病没す。八十一歳。宮崎霊園に眠る。

⑫⑤ 吉田貞吉

財界　一八八三（明治16年）生
一九五四（昭和29年）没

明治十六年十二月二十日、父良四郎、母のぶの長男として小丸上に生まれる。

幼年時代より聡明利発、礼儀に厚く、恩師神代勝文先生の自宅（小丸上）の前では必ず立ち止まって最敬礼して通過したという。

宮崎中学校、第五高等学校（熊本）を経て京都帝国大学工学部電気科に進んだ。少年時代より数学が得意で電気科を専攻したのもそのためである。

卒業後住友に入社、住友別子鉱業所に勤務したが、住友入りについては当時総理事だった鈴木馬左也（筏の出身）

の影響があったと云われる。

昭和二年七月、土佐吉野川水力電気会社常務取締役に就任、十七年十月、住友化学工業株式会社社長、同時に住友本社理事に栄進し、二十年十月退任するまで住友の最高幹部の一人として化学工業発展に貢献している。

終戦後、高鍋に帰り悠悠自適の生活を送っていたが、二十七年、南九州化学工業株式会社の設立にあたり学友柿原政一郎（当時高鍋町長）の要請によりその初代社長に就任し地元産業の振興につとめていたが、二十九年七月十八日、美々津海岸で不慮の事故により急逝した。

享年七十二歳、田の上墓地に葬られた。

貞吉は大正八年、事業視察のため一ヶ年近く米国に滞在したことがあるが、英語の会話力不足により十分に目的を果たせなかったことに思いをいたし、後年、自費で米国婦人を招き長期に亘り子女の教育と住友の社員、子女の英語教育に役立てている。

そのほか、昭和六年には、高鍋小学校に吹鳴用サイレン一式を寄贈して学校運営に寄与するほか当時の町民生活にも利便さを提供した。

また近年、吉田家を継いだ孫洋子氏（長女鍋島宏子の子女）から、小丸上公民館用地として使用することを条件に広大な宅地を高鍋町に寄贈されるなど貞吉の遺徳は現在にも及んでいる。

小丸上地区では公民館建設にあたり、貞吉の遺徳を偲びまた子孫の厚意に感謝して公民館入口に立派な記念碑を建立して顕彰している。

⑫⑥ 吉水輝文（よしみず てるふみ）

政界　一八九六（明治29年）生　一九七二（昭和47年）没

明治二十九年七月五日、黒谷、黒水家に生まれる。昭和二十一年農地委員などを経て、二十二年四月に行われた公職選挙法による公選初代町長に当選、戦後の行政の重責を担う事になった。町政の主力を小丸川の直轄河川編入におき再三上京、財津吉史・上條勝久の協力をえて、東奔西走ついに直轄河川編入の端緒を開いた、困難な財政を改善するため財源増を図ることに努力しつつ学制改革による新制中学校の建設、ついで小丸大橋の架橋工事の落成。自治警察高鍋町警察署設置、都市計画構想の実現など、抱負をもちながら二年にして退任したが、昭和三十六

年十一月再び町長に立候補して当選、多年経験ある土木事業を中心として都市計画に取り組む。各計画の樹立には非難も生じたが、進歩的な構想はその後に残され実現をみた。先ず、役場拡張事業では旧学校の古材を利用して町長室、事務室、集会室を増設し町行政事務を便利にした。公害問題防止対策のため木城・高鍋合同衛生センターの建設操業、高鍋電報電話局新築着工、国道十号線高鍋バイパス開通を実現した。また、高鍋農業高等学校の自営者養成校文部省指定に当たり、地元負担を果たし、土地斡旋の労をとった。こうした中で都市計画準備に着手、小鶴区画整理事業、町上水道事業を企画し、高鍋杉安・高鍋高岡道路の改良推進を図った。その間町議会の不信任問題解決に努めつつ、宮崎県畜産共進会の開催を本町に誘致した。

その他波乱の多い時期であったが、その独特の風格をもって終始した。昭和四十七年八月二十二日没、七十七歳であった。墓は大竜寺墓地にある。

(127) 吉本盛光（よしもとみつ）

政界　一九〇七（明治40年）生　一九八九（平成1年）没

明治四十年三月三十日、父松太郎、母キクの長男として太平寺に生まれる。

昭和五年立教大学卒業、兵役に服したのち七年、警視庁に入り十五年退職、中国に渡り日本製鉄株式会社の事業所で警務責任者として勤務、終戦により二十一年引揚げ帰国、この間三度の召集をうけ陸軍大尉まで昇進。

帰郷後は家業の農業に精進、指導力を買われて二十六年より七年間高鍋農業協同組合長、三十四年より五年間農業共済組合長、また二十九年より四十一年にかけ三期九年間農業委員をつとめ戦後の農業振興に大きな足跡を残した。

また、それらの経験や持ち前の行動力を発揮して三十年と五十年の二度県議会議員に選ばれ、文教衛生、建設および農林水産の委員長などの要職につき、さらに五十七年より一期四年間高鍋町長をつとめ県民、町民の生活や福祉の向上に大きく貢献した。

町長在任中に手がけた主な事業として、ナイター施設、西中学校体育館、蚊口地区の学習等供用施設および歴史総

合資料館などの建設のほか、町下水道事業特別会計や高額医療費貸付制度の新設、さらに「時間の励行日本一」運動の展開推進などがあげられる。

そのほか、広域行政面ではし尿処理設備の近代化、高能力化やゴミ焼却施設の抜本的改善などに手腕を発揮した。

さらに、個人事業面では三十九年株式会社高千穂タクシーを設立、東児湯や宮崎市を基盤に住民や観光客に利便を提供している。

町長勇退後の六十三年四月、自治功労により勲五等瑞宝章を授与されたが翌平成元年九月十三日病没、享年八十三歳。太平寺墓地に葬られた。

盛光が町長に就任した時期は中曽根内閣による緊縮財政のきびしい環境下にあったが、老齢にもかかわらずそのねばりと柔軟性を活かして多くの事業を完遂し町政を安定させた功績は大きい。

参考資料

宮崎県百科大事典
宮崎県大観
高鍋町史
木城町史
児湯郡郷土誌
宮崎県総合博物館紀要（昭和63年度版）
先哲の略歴
郷友会報（第2・4・5・6・43・65・66・72号）
明倫会報復刊（第14号）
史友会報（第20・21・22・23・24号）
秋月左郁夫（黒木勇吉著）
鈴木馬左也（鈴木馬左也翁伝記編纂会）
堤長発君小伝（泥谷良次郎著）
遠藤正の教育理念（甲斐亮典著）
唐はぜ並木（秋月種久著）

編集後記

「高鍋の先賢」は高鍋町文化財シリーズ第八集として発行しました。

藩校明倫堂の創設は画期的なことであり、これを契機に文教が大きく育ち、やがて小藩高鍋から偉大なる人材が京師を始め各地へと輩出されました。

このたびはこれらの人びとを詳細に調査研究をしていただいたうえに、比較的新しい世代まで調査対象となし、資料不足にも拘らず多くの人びとを掲載されて、有為な編さんであったと思います。

執筆は高鍋町文化財保存調査委員の先生方に依頼しました。対象の家庭を直接訪問されたり、資料収集など、ひとかたならぬご苦労があったと思います。ここに心から厚くお礼を申しあげます。

第八集「高鍋の先賢」を発刊することによりまして、高鍋の文教の町たる由縁を知っていただくと同時に、先賢たちのたゆまぬ努力と心情に感謝して編集後記といたします。

高鍋町教育長　岩永高徳

執筆者及び参画者所属名

高鍋町文化財保存調査委員長	黒木鎮夫
高鍋町文化財保存調査副委員長	中武弘
高鍋町文化財保存調査委員	河辺周矩
同	平田和彦
同	高橋照久
写真撮影	石井正敏
高鍋町社会教育課長	高嶋傳
同課長補佐兼文化財係長	江川雅章

高鍋町の文化財 第八集

高　鍋　の　先　賢

■初　刊　　平成　4年3月
　再　刊　　平成14年4月
　再々刊　　平成23年3月

■発　行　　高鍋町教育委員会
　編　集　　社会教育課
　　高鍋町大字上江8335番地
　　TEL(0983)23-3326

■印　刷　　合資会社 阿部印刷商会
　　高鍋町大字北高鍋1375-6
　　TEL(0983)22-1121